宇宙維新　黄金の夜明け（前編）

序

第62回式年遷宮後の西暦2,01×年のある日、イエス・キリストと呼ばれる存在と共に、かつて地球上で神々として振る舞っていた存在たちが天から降臨した。それにより、人々の意識は一気に覚醒し、一部の経済的富裕層が貧しい大多数を管理・支配するというグローバル・スタンダードは脆くも崩れ去った。

と同時に、それまでに地下組織が着々と準備を進めていた計画、すなわち、誰もが平等で人生を満喫でき、宇宙創造のエネルギー、すなわち、真の創造神の御心に従って生きるという「弥勒の世」の達成に向け、真の世界統一政府、すなわち、宇宙国政府が樹立され、人々が一致団結して社会の立て直しが順調に進み始めていた。

そんなある日の、男と女の会話である。なお、これは以上の設定のもとに構成された創作（フィクション）である。

・男：

降臨した神々のために新たに建造された神殿に御奉仕する、日本の古代大王家、すなわち、古代シュメールに遡る大王家の血を引く若い神官。その名を建（タケル）と言う。通称ケン。

・女：

建の恋人。何でも知りたがり屋。後に、建と同族であることが判明。その名をひかりと言う。

ひかり：それにしても、あなたが言っていたように、やっぱり降臨してきたのよね…。驚きだったわよ！しかも、勢揃いで…。

建：だろ？聖書にも書いてある、て言ったじゃないか！

ひかり：そうなんだけど、まさか、本当に起きるとは…。

建：それだけ、人類が荒んでしまった、てことさ。神々は地球上で人類の進化に介入したから、その末路には責任がある。だから、人類が、そして地球自体が滅亡の危機に瀕したあの時、降臨したんだよ、約束通り。

ひかり：そういうことなのね…。今まで聞きかじってはいたけど、ちゃんと知りたいわ。お・し・え・て！

建：デハ、話ソウ。

＜目次＞

序

1：神々の故郷
(1)神々の星：6
(2)地球へ：9

2：太陽系の創世
(1)宇宙の創世：9
(2)太陽系の創世：10

3：アラルの地球調査：11

4：地球への調査団派遣－地球植民地化計画
(1)エンキの地球への派遣：12
(2)地球での最初の活動：14
(3)“恐怖の武器”の封印：14

5：地球での鉱物資源確保－地球支配神の誕生
(1)ニビルへの一時帰還とエンリルの地球への派遣：15
(2)アヌの来訪：16
(3)アラルの反逆と追放：16

6：宇宙空港の本格的建設－神々の反乱
(1)ニンマーの地球到着：21
(2)エンキ、エンリル、ニンマーの関係：22
(3)エンリルの追放：22
(4)エンキとニンマー：23
(5)エンリルの監視塔：24
(6)アンズの処刑：25
(7)アブズでの反乱：25

7：遺伝子工学による人類の誕生－原始的労働者の生産
(1)原始的労働者の創成決定：26
(2)最初の人類アダムゥの誕生：28
(3)ティアマトの誕生：30
(4)生殖能力の付加：31
(5)エディンからの追放：32

8：ニビルの接近－エンキとの自然受精による人類誕生
(1)イルニンニとウツの誕生：33

(2)ニビルの接近に伴う天空の混乱：33
(3)エンキとマルドゥクの月への旅：35
(4)シッパールの司令官ウツ：36
(5)エディンへの人類入植：38
(6)アダパとティティの誕生：38

9：ニビルへの人類初の宇宙飛行－文明の始まり
(1)アダパのニビル訪問：40
(2)アダパの帰還：42
(3)カ・インとアバエル：42
(4)カ･インの追放：44
(5)アダパの子孫：44
(6)アダパの死：47

10：人類の増殖、旱魃、疫病－迫り来る大洪水
(1)年老いた指導者たち：48
(2)マルドゥクの結婚：49
(3)イギギの反乱：50
(4)マルドゥクの息子たち：51
(5)アメリカ大陸のカ･インの子孫：51
(6)ジウスドラの誕生：51
(7)大洪水の前兆：53
(8)謎の密使ガルズ：54
(9)自らの運命の決定：55
(10)遺伝子の採取と保管：56

11：大洪水の記録－ノアの箱舟の真実
(1)ガルズからのお告げと“万物の創造主”の御意思：57
(2)ジウスドラへの警告：58
(3)船頭の到着：59
(4)大洪水：59
(5)エンリルの赦し：60
(6)火星と月の荒廃：61
(7)地球再興の準備：62
(8)新たなる金の採掘場：63
(9)ピラミッド建造：64
(10)ニンマーの称号：67

12：最初の古代地球大戦争－終戦協定の行方
(1)マルドゥクの息子同士の戦い（エジプト神話の真相）：68
(2)新たなる“天と地球を結ぶ”施設：71
(3)ドゥムジとイルニンニの婚約：72

(4)ドゥムジの死：73
(5)エンキの苦悩：73
(6)イルニンニの冥界下りと“復活”：74
(7)イルニンニの怒り：77
(8)イルニンニ一族とマルドゥクの戦い：77
(9)マルドゥクの追放：78
(10)ピラミッドの破壊：79

13：神々の聖域－人類に与えられた三大文明の地域
(1)アヌの来訪：81
(2)アヌとの対談とガルズについて：82
(3)イルニンニへの愛情：84
(4)錫と青銅の発見：84
(5)マルドゥクへの赦しと地球年の開始：85
(6)第1の地域：86
(7)ニヌルタの栄光：87
(8)イナンナの奸計：88
(9)バベルの塔：89
(10)イナンナの都市への王権移譲：90
(11)ニンギシュジッダの旅立ち：90
(12)エジプト文明：91
(13)第3の地域：93

14：不老不死－イナンナの想い
(1)イナンナの不死宣言：95
(2)ギルガメッシュ叙事詩：97
(3)エジプトへの死生観植え付けとマルドゥクの野望：99
(4)アッカド：100
(5)マルドゥクの独断的宣言：101
(6)サルゴン1世の任命：102
(7)バビロン神殿の建設とイナンナの激高：103
(8)イナンナの冒涜行為：104
(9)ア・キ・チ（地球の生命の創成）と新年祭：104

15：古代核戦争－繰り返された覇権争い
(1)エンリルに与えられたガルズの預言：108
(2)アブラハムの登場：109
(3)マルドゥクの支配権宣言と恐ろしい決定：111
(4)禁断の“恐怖の武器”：112
(5)神々の誤算と大いなる惨禍：116

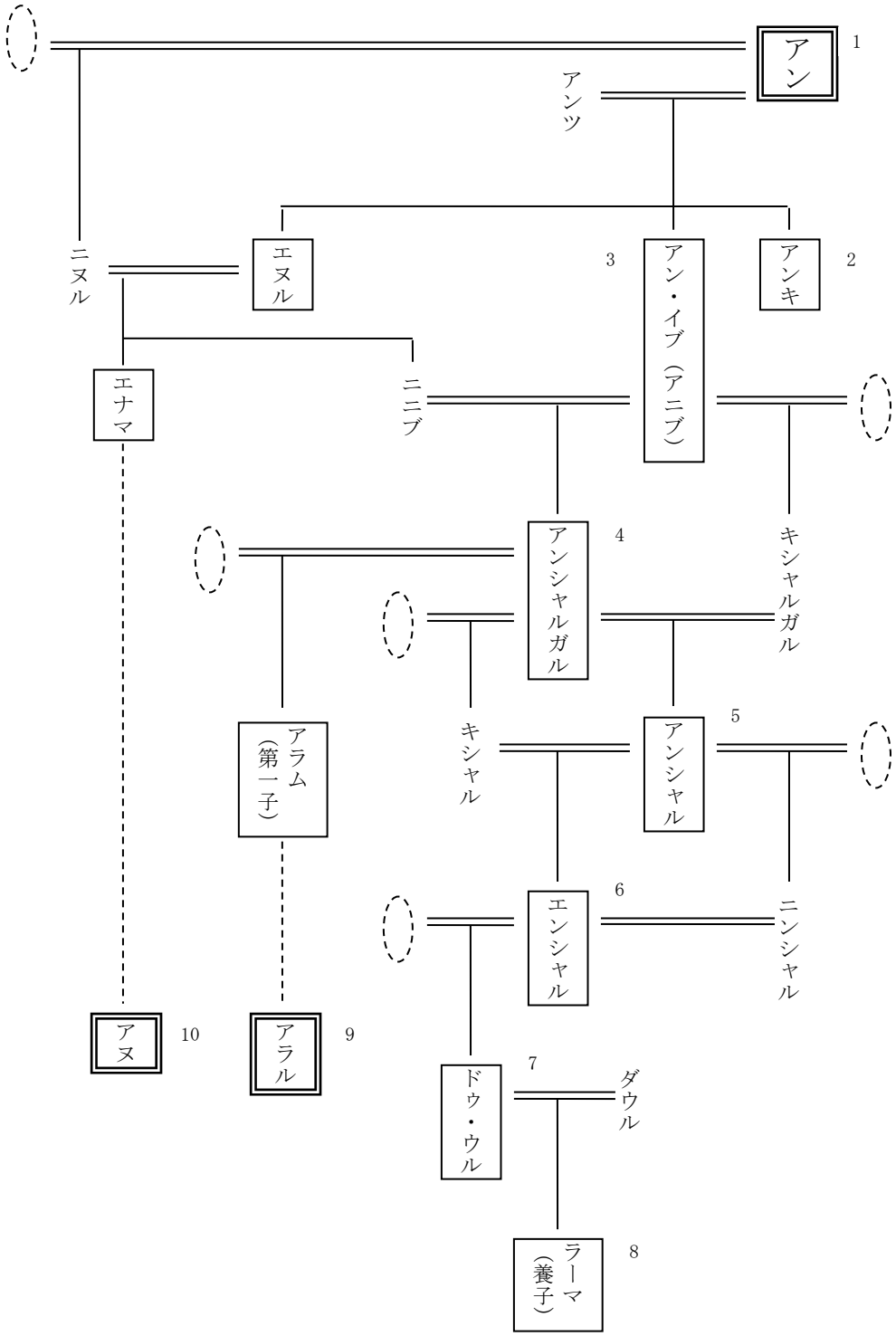
16：新たな最高権力神の誕生－人類へ残された預言

(1)認められたマルドゥクの覇権：120
(2)過去と未来：121

あとがき

1：神々の故郷
(1)神々の星
　神々の故郷は、太陽系の最も外側を約 3,600 年の長楕円周期で公転する惑星である。その惑星の名は、フリーメイソンのグランドマスターでシュメールの研究家でもあったザカリア・シッチン氏によって、“ニビル”と名付けられた。聖書の唯一絶対神を否定するような氏の説は、神の存在を否定する闇の組織のメンバーだからだ、とかなり非難されてはいたものの、やはりそこはグランドマスターだけあって、偽のように見せかけつつも、核心を散りばめたものだったのである。
　ニビルは赤みがかった光を放つ大きな火山性の惑星で、噴火によって供給されるガスによって、分厚い大気層が形成されていた。太陽から遠ざかる寒い時期には熱を逃がさず、最も近づく時には焼け付くような光線からニビルを保護していた。そして、雨を保持したり降らせたりして湖や小川を生じさせ、植物が青々と茂り、様々な生物が存在していた。
　しかし、進化のある時点で種族間の競争が起こり、侵略が発生した。そして、北と南の 2 つの大きな国が戦争した。兄弟同士が戦うことにもなり、雷や光輝の武器が恐怖を増大させた。何周期にもわたり荒廃が地上を支配し、すべての生命が減ってしまった。それから休戦宣言が成され、和平が訪れた。ニビルの王座を 1 つとし、1 人の王が統治することとされた。北あるいは南から王となる者をくじ引きで選び、王が北なら伴侶は南、王が南なら伴侶は北とすることに決定された。選ばれた王は北の者であり、伴侶は南の者となった。王の名はアン、“天の 1 人”という意味であり、妃の名はアン・ツ、“アンの伴侶である指導者”という意味である。王は法を制定して国を再建し、ニビルに平和を取り戻した。

　そして、アンシャルガル（王子の中で最も偉大なる者、の意）がニビルの 1 公転周期を 1 シャルと決めた。彼はシャルを 10 分割し、2 つの祝祭を制定した。太陽に最も近づいた時の暖かさの祭り、最も離れた時の涼しさの祭りである。
　また、戦争以来、女性の数が男性の数を大いに上回っていた。そこで、1 人の男性が複数の女性を娶るよう、布告が出された。法律により、正式な配偶者として 1 人の妻が選ばれ、“最初の妻”とされた。そして、最初に生まれた息子が父親の後継者とされた。しかし、この法律により、すぐに混乱が生じた。最初の息子が最初の妻から生まれずに側室から生まれ、その後に最初の妻に息子が生まれたらどうなるのか。
　アンシャルガルの治世に、それは現実となった。第一子の息子は、正妻のキシャルガルではなく、側室から生まれた。その後、キシャルガルから息子が生まれた。キシャルガルは主張した。
「二重の種子を見過ごさないで。私は王の異母妹。それにより、私の息子は父の種子を二重に備えていることになります。今後は“種子の法”に最も効力を持たせましょう！」
　何番目に生まれようと、異母姉妹による息子の継承権を他の息子たちよりも優先する、というものである。王アンシャルガルは、この主張を認めた。


アン
1
アンツ
エヌル
ニヌル
アンキ
2
アン・イブ（アニブ）
3
エナマ
ニニブ
アンシャルガル
4
キシャルガル
アラム（第一子）
キシャル
アンシャル
5
エンシャル
6
ニンシャル
アヌ
10
アラル
9
ドゥ・ウル
7
ダウル
ラーマ（養子）
8

アンシャルの治世に、農作物が激減した。太陽に近づいた時、その熱は強くなり、遠ざかった時、寒さに凍えることとなった。大気中に、裂け目が発生していたことが原因と判明した。大気の元となる、火山活動と噴煙が減少していた。そのため、ニビルの空気は薄くなり、保護シールドとしての役割を成さなくなってきたのである。

ドゥ・ウルは、子に恵まれなかった。彼は、アンの血統が始まって以来、初めて“種子”によってではなく“愛”によって自分の伴侶ダウルを選んだ。そして、ダウルが宮殿の入り口で見つけた子を息子とし、“日照り”を意味する“ラーマ”と名付けた。しかし、大気層の裂け目を修復する方法も見つからず、宮殿や王室顧問評議会では、不満が増大していた。

有識者会議では、修復のために2つの方法が検討された。1つはニビルでは非常に稀な金属である金を細かく挽き、空に浮遊させる方法である。金は、“打ち出し細工のブレスレット（小惑星帯）”の内側に豊富に存在することが判明していた。もう1つは、“恐怖の武器”を創造して大地を揺るがし、火山活動を活発化させる方法である。ラーマは決断力に欠け、その間に状況は悪化した。そして、その責任として、王に非難の目が向けられた。昔の倉庫から武器が取り出され、1人の王子が最初に武器を手に取り、氾濫した。その王子とは、アラルである。王は宮殿の塔に逃れたが、追ってきたアラルともみ合いとなり、ラーマは倒れて死んだ。そして、アラルは王座に着き、王位を宣言した。ラーマの死を喜ぶ者もいれば、アラルの行いを嘆き悲しむ者もいて、国の統一は失われた。

アラルの王位について、多くの者が立腹した。しかし、アラルは“種子の法”によって王位の権利を略奪されたアラムの血統であることが判明し、評議会は王位を認めようとした。そこに、1人の王子が意見した。
「私こそ、アンの純粋な種子の末裔です」
と。アヌであった。評議会が血統を辿ると、まさしくその通りであった。そして、アヌを王とすることが決定された。しかし、アラルはアヌに
「一緒にニビルに平和を取り戻そう。私は王座に留まり、君は継承権を持つ」
と言った。アラルは評議会に
「アヌを皇太子とし、彼の息子に私の娘を娶らせ、継承を合体させよう」
と提案した。そして、アヌは評議会と会衆の前で、アラルの次期継承者となることを宣言した。このようにして、アラルは王位に留まった。

アラルは“天の船”を建造させ、“打ち出し細工のブレスレット”で金を探させたが、そこで船は粉砕され、1隻も戻ってこなかった。また、“恐怖の武器”で“空飛ぶ二輪戦車”を武装させ、火山を攻撃したが、火山による噴出は増えず、効果は無かった。そのため、人々の間では不満が増大した。しかし、アラルは王位に居座った。9番目のシャルに、アヌは裸での取っ組み合いの喧嘩をアラルに挑み、勝者が王となることを提言した。彼らは公共の場で取り組み、アラルが膝を折って胸から地面に倒れこんだ。そして、アヌが新たな王として迎えられた。

……

ひかり：ニビルでも、エゴによって大戦争が勃発したわけね…。

建：そうさ。しかし、和平後の血統が問題を生じさせた。それが後々、地球での覇権争いへと繋がる。神々のエゴは、まだ消えていなかったというわけさ。

ひかり：それにしても、くじ引きだとか、血統の選択の類似性とか、聖書の原型よね？

建：勿論。そして、ラーマと言えばインダス文明の叙事詩ラーマーヤナだし、アヌとアラルの取っ組み合いは相撲そのものだよ。

ひかり：ふ～ん、これだけでも、話は世界的ね。

(2)地球へ

アラルはラーマのように殺されることを恐れ、密かに逃げ出した。“天の二輪戦車”の場所へ大急ぎで行き、ミサイル投下用の二輪戦車に乗り込んだ。“道筋を示すもの”のスイッチを入れると青みがかったオーラで部屋が満たされ、二輪戦車の“大きな爆竹”を活気づけると、赤みがかった光輝が放たれた。そして、ニビルから脱出し、地球へ進路を定めた。“始まり”の秘密、すなわち太陽系創造の歴史により、地球が“打ち出し細工のブレスレット”の片割れであることを知っていたためである。

“打ち出し細工のブレスレット”は誰も横断したことがなかった。アラルは、迫り来る“打ち出し細工のブレスレット”の巨石に対して“恐怖の武器”を発射して粉砕し、見事、危機を乗り切った。そして、未知なる地球に到達した。地球の頂上と底は雪のように白く、真ん中は青と茶色だった。

地球を旋回するため、彼は二輪戦車の停止翼を広げ、“貫くビーム”で地球内部を調べた。多くの金の存在を、ビームが示していた。アラルは二輪戦車を運命の手に委ね、地上に何とか着陸した。

……

ひかり：金が必要だから、地球に来たわけか…。

建：そう、今までに無い危険を冒した、一か八かの賭け。それだけ、神々の星も危機に瀕していた、てこと。

ひかり：ニビルについては解ったけど、じゃあ、私たちのこの太陽系はどうやってできたの？

2：太陽系の創世

(1)宇宙の創世

まだ今日のような宇宙というものが無く、1つの茫洋な意識的エネルギー体しか存在していなかった頃、このエネルギー体は自らがどういう存在なのかを知るために、また自らの進化のために、何かを創造しようとした。その瞬間、一気に素粒子が生成し、連鎖的に陽子、中性子、電子及びそれらの反粒子が生成してプラズマ状態が形成された。言わば、巨大な電磁場が三次元の物質界として分離・出現したわけである。

このプラズマが光速に近い速度で移動し始めると、重力が発生した。その重力とプラズマの電磁場に引き付けられて物質が生成し、恒星や惑星などの星々が誕生した。故に、銀河群は巨大な泡構造を形成し、電磁場的に互いに共鳴し合っている。それはまた、創造の意識エネルギーとも共鳴し合っているわけである。言わば、星々は創造のエネルギーと電磁場的に共鳴し、当然、星々に誕生した生命体も電磁場的にその星は勿論のこと、創造のエネルギーとも共鳴しあう相互関係なのである。これが、物質宇宙の基本的物理法則となった。

一方、このような銀河群を形成していないプラズマは、暗黒プラズマとも暗黒物質とも言われ、創造のエネルギーと合わせて宇宙の大部分を占め、現在に至る。

……

ひかり：従来の宇宙論は、完全に間違っていたわけね。

建：その通り。物理学はその名の通り“物の理（ことわり）”を研究する学問だが、三次元的な物質が存在しない創造のエネルギーを物理学の方程式で記述できないという自己矛盾に、ようやく最近、物理学者たちは気付いた。で、それまでのいわゆる“御用学者”たちはお役御免のお払い箱さ。

ひかり：そうすると、星々は創造のエネルギーと共鳴し、生命体はその星と共鳴し、更には創造のエネルギーと共鳴しているわけだから、どこかの星で惑星規模の現象が発生すると…

建：例えば生命体にエゴが発生し、その星が滅びると、周辺に伝わって宇宙全体にエゴの波動が伝わる。そして、宇宙全体が存続の危機に瀕する、ということさ。

ひかり：単に、その星だけの問題では済まされないのね。

(2)太陽系の創世

最初は太陽（アプス）だけが存在していた。まずティアマトが形成され、次に火星（ラーム）と金星（ラハム）が形成された。次に土星（アンシャル）と木星（キシャル）が、それから天王星（アン）と海王星（アンツ）が形成された。このようにして、3 組の天空の夫婦が創造され、水星（ムンム）を連れたアプスとティアマトの家族を形成した。

その頃、各周期は定められておらず、バラバラだった。ティアマトからは月（キングゥ）を始めたとした衛星が 11 個形成された。そして、遥か離れた深遠なる場所で、ニビルが誕生した。

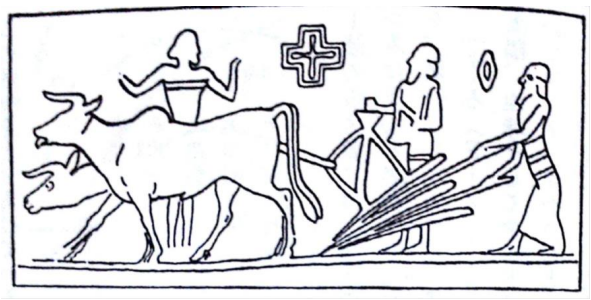
ニビルが太陽に向けて進路を取り始めると、まずは土星の重力により、ニビルから 4 個の衛星（北の風、南の風、東の風、西の風）が生じた。それから、更に 3 個の衛星（邪悪な風、つむじ風、並ぶ者のない風）が生じた。そして、木星の巨大な重力により、ニビルはプラズマを帯びた。

ニビルがティアマトに近づくと、衛星がティアマト目掛けて突進した。ニビルのプラズマがティアマトを覆い、“邪悪な風”がティアマトの腹に突撃して、腹を引き裂いた。ティアマトは、死骸のようだった。キングゥ以外のティアマ

トの衛星はニビルに捉えられ、粉々になり、逆方向に回り始めて輪となった。
　ニビルは太陽から遠ざかり、また近づいて“死骸のようなティアマト”に接近した。そこには、金色の静脈（金鉱石）があった。今度は、ニビルの“北の風”が“死骸のようなティアマト”に衝突し、半分が地球（キ：固い土地)、残りが小惑星帯（打ち出し細工のブレスレット）となった。そして、キングゥは地球の衛星＝月となり、土星の衛星ガガは、度重なるニビルの接近によって軌道を乱され、冥王星となった。ニビルとは、“天と地球の交差点”という意味である。
　このような宇宙規模の衝突により、ニビルと地球に芽生えていた生命の芽は、中核の部分が共通のものとなった。

……

ひかり：地球の元はティアマトと呼ばれた惑星で、ニビルの接近により破壊され、その残骸が地球、片割れが小惑星帯だなんて、学校で習わなかったわよ！
建：そりゃそうさ、ついこの前、神々から聴いたからね。
ひかり：道理で、天文学者たちは天王星の地軸の傾きや海王星の磁場の向き、彗星の公転方向、地球の大陸と海洋の地質の違い、小惑星帯の由来、冥王星の特殊な軌道なんかの不可思議な現象を説明できなかったわけね…。
建：ついでに言うと、“打ち出し細工のブレスレット”は、聖書の中のヨブ記、アッカドの古文書などにも登場するよ。聖書の創世神話はこの話が元さ。
ひかり：聖書を絶対視していた人たちにとっては、とってもショッキングよね…。
建：“事実は小説よりも奇なり”さ。古代メソポタミアでは、実際に神々の星が観察されていたし、ニップールで発見された円筒印章には、農夫の一団が日中でも天に輝くニビルを、恐れながら見上げている光景が刻まれているよ。ニビルはしばしば十字として表された。



ひかり：じゃあ、さっきの続きで、地球に到着したアラルはどうなったの？

3：アラルの地球調査

二輪戦車は乾いた土地、広大な湿地の端に着陸していた。彼は鷲のヘルメットを被り、魚のスーツを着た。彼は近くを歩き、二輪戦車に引き返し、眠った。起きてから、“検査装置”によって空気を吸い込むと、適合性を示した。そこで、今度はヘルメットとスーツ無しで、地面に降りた。太陽光線の強さに目が眩んだので、目にマスクを着けた。そして、携帯用武器とサンプラーを手に持った。湿地へ歩いて行き、水を検査すると飲むには不適合だった。植物の茂みを歩いて行くと、甘い香りの果実が豊富にあり、口にすると甘かった。更に行くと池があり、検査すると飲むのに適していた。水を飲んでいると、シューという音が聞こえ、這うような生物が池の横を移動していた。彼は武器を取り、音の方向に向けて撃った。すると、音と動きは止んだ。その生物は長い紐のようで、体には手も足も無く、小さな頭には獰猛な目があり、口から長い舌を突き出していた。ニビルでは、絶対に目にすることの無い光景だった。あれは、果樹園の守護者なのだろうか？水の支配者だろうか？アラルは１人で思案した。

また、日の短さに彼は驚いた。夜には、白い色合いの地球の同伴者、キングゥを目にした。夜が明けると、アラルはテスターを取り出し、湿地の水を調べた。水の中に、金があることをテスターは知らせていた。アラルは、ニビルの宿命が自分の手中にあることを勝利と感じた。そして、ニビルに通信を送った。もう 1 つの世界に私はいる、救済の黄金を見つけた、ニビルの宿命は我が手中にあり、お前たちは私の条件に従わなければならない！と。

……

ひかり：鷲のヘルメットと魚のスーツは宇宙服か…。

建：そう、最初は大気の適合性が解らなかった。しかし、地球がニビルの衛星の衝突によって形成され、その際、生物種の DNA が地球に蒔かれたから、2 つの星は類似していたのさ。これまでに言われていた、まったく他の星系からの訪問者では、大気組成も合わないし、そもそも微生物によって体がやられしまうからね。

ひかり：この状況からすると、広大な湿地の端に着陸に偶然着陸したようね。

建：そう、現在のアラビア半島。偶然にね。

ひかり：日の短さは、地球とニビルの公転周期が関わっているわけ？

建：その通り。公転周期は地球が 1 年、ニビルが約 3,600 年だから、地球での 3,600 年がニビルでの 1 年だよ。だから、神々は長生きさ。

ひかり：そのニビルには、蛇がいなかった…。

建：だから、神のシンボルとして、後に蛇が使われた。そして、果樹園というのが、聖書ではエデンの園とされている。

4：地球への調査団派遣－地球植民地化計画

(1)エンキの地球への派遣

アラルからのメッセージを受け、アヌは驚愕した。学識者たちにより、これは地球から発せられたと判明した。アヌの第二子エンリル（命令の主、の意）

が、
「本当にティアマトの黄金を見つけたのなら、その証拠が必要だ」
と発言した。アラルはそれを受け、調査結果を送信した。アヌは第一子エアをはじめとする 50 人の英雄を地球に派遣し、入念に調査するよう命じた。

その二輪戦車の機長はアンズ（天空を知る者、の意）であった。彼は王子の中の王子で、王族の末裔だった。“打ち出し細工のブレスレット”に到達すると、エアは“恐怖の武器”ではなく、“水推進装置”で巨石の向きを変え、突破した。水を使いすぎ、補給の必要が生じたので、火星に着陸した。火星の帽子は雪のように白く、中央部分は赤みがかり、湖や川がきらきら輝いていた。水は飲むのに適していたが、大気は適していなかった。
その火星からは地球が見えた。彼らは地球に向け離陸し、アラルの信号を頼りに、地球の海に着水した。海が乾いた土地に接する場所、4 つの川が湿地に飲み込まれる場所である。
「地球へようこそ」
というアラルの声がスピーカーから聞こえた。彼らは二輪戦車で湿地まで移動し、魚のスーツを着て、湿地へ降りた。間もなく、彼らはアラルの姿を見た。

……

ひかり：火星は水が豊富だったのね。
建：大気組成は適合していなかったようだけどね。最初に着陸したのが魚座の時代の始まりだったから、エンキのシンボルの 1 つに魚がある。約 44 万年前のことさ。
ひかり：確か、オアンネスと言う、地上に最初に降りた半神半魚の神がいたという伝承があったと思うけど…。
建：その原型がエンキさ。このオアンネスが転じてヨハネという名前になった。洗礼者ヨハネと、黙示録を書いたとされるヨハネだよ。
ひかり：エンキが海に関わりが深いから海神で、水神でもあるのね！その水神の性質が、水を吹き出している水瓶と共にエンキの姿が描かれている粘土板が示しているわけか…。これは、まさに洗礼を施す様子ね？
建：それが洗礼者ヨハネ。他に、水に関わるから水鳥もエンキのシンボルだよ。

(2) 地球での最初の活動

アラルは義理の息子を歓迎した。エアはアヌの命令どおり、皆の前で地球に於ける指揮官であることを宣言した。やがて、空の色が変化していき、太陽が真っ赤な球となって地平線に消えていく光景に驚愕した。ニビルでは、決して見られない光景だからである。夜が訪れたが、初めての体験に彼らは動揺していて眠れなかった。そして、あっという間に朝が来た。彼らはあまりにも速い地球の自転に戸惑った。これが、地球での最初の１日である。

2 日目には水路と堤防を作って湿地帯との境界とし、飲むための真水を確保した。3 日目には草と木が茂る場所へ行ってハーブや果物を調査し、食べ物を確保した。4 日目には粘土からレンガを作り、居住施設を建てた。5 日目には葦の船を作り、水中の生物を調査した。そして、空の生物も調査した。6 日目には果樹園の生物を調査した。野生生物（特に爬虫類）の残忍さを知り、防御のためのフェンスを作った。そして、アンズが戦車から“殺しの光線”を降ろし、“言葉を送るスピーカー”をエアの住居に設置した。成し遂げたことは、すべてうまくいった。よって、7 日目は休息の日とされた。7 番目の日はいつまでも、休息日とすることをエアが宣言した。エアはこの最初の宿営地をエリドゥ（遠く離れた故郷、の意）と名付け、アラルをエリドゥの司令官とした。アラルはエアのことをヌディンムド（巧みな形作る者、の意）と呼んだ。

エアは水から金を得る仕事に着手した。6 地球日に亘り、水から金が採取された。7 日目に検査すると、鉄や銅はたくさんあったが、金は少なかった。地球の時間で１年間、水から金を採取したが、ニビルに送り出すほどの量は無かった。金を集め、ニビルの接近時に届けるように、アヌはエアに命令した。しかし、水からの金だけでは、まったく量が不足していた。そこで、エアはアブガル（エアの司令官の１人）と共に、金鉱脈を探しに出掛けた。

夜間、エアは月の運行に魅了された。エアはその周回を“月”と呼んだ。太陽は６ヶ月毎に別の季節を与え、エアはそれらを“夏、冬”と呼んだ。そして、地球の１周回を“年”と呼んだ。

……

ひかり：これって、まるで聖書の 7 日間での天地創造の話じゃない！

建：ああ、これが原型だよ。エンキは月の運行に魅了されたから、シンボルは三日月さ。

(3) “恐怖の武器”の封印

アラルの二輪戦車を修理し、ニビルへ戻れるようにすることを、アヌはエアに命じた。ある晩、アラルの二輪戦車の“恐怖の武器”を全部で 7 つ、取り外した。武器の使用は止める誓いが立てられていたからである。エアとアブガルは秘密裏に出掛けた。そして、秘密の洞窟にそれらを保管した。戻ってから、エアはアンズにアラルの二輪戦車を修理するよう命じた。アンズは二輪戦車に

熟練していたので、“恐怖の武器”が無いことに気付いた。彼は怒りで激しく抗議した。
「天空に於いても、“固い土地”に於いても、それらは決して使用してはならないのだ！」
とエアは言った。
「それ無しでは、“打ち出し細工のブレスレット”を安全に通過できない。“水推進装置”だけでは、忍耐の度を越えてしまう」
とアンズは言った。その時、操縦法を知っているアブガルが、危険に立ち向かうことを宣言した。エアはアブガルに“運命の石板”を与えた。
「それは君にとって、道を示すものとなるだろう」

……

ひかり：“恐怖の武器”って、核兵器のこと？
建：ああ。これを隠したことが、後に大変な事態を引き起こすことになろうとは…。
ひかり：気になるな…。ところで、“運命の石板”って？
建：いろいろな場面に登場するけど、ここでは航路などの情報がインプットされた石、つまり、シリコン製のマイクロチップのようなものだね。

5：地球での鉱物資源確保－地球支配神の誕生
(1)ニビルへの一時帰還とエンリルの地球への派遣
　アブガルの操る二輪戦車は、スピードを増すために月の周りを周回し、ニビルへ向かった。“打ち出し細工のブレスレット”をうまく切り抜け、赤みがかった色に燃えるニビルを目にし、ニビルを 3 回周回し、ビームによって誘導された場所に到着した。

　ニビルが太陽に接近すると、金の粉はかき乱され、大気はまた、裂け目を開いていった。地球に戻り、更なる金の採取をアヌは命じた。アブガルが戻ってくると、エアは調査に出掛け、アフリカに金鉱脈があることを発見し、その地域をアブズと名付けた。エアがニビルに情報を送信すると、1 人の王子が言った。
「金鉱脈があるという証拠が必要だ」
アヌの息子でエアの異母弟エンリルである。アヌは、エンリルに地球へ行くことを命じ、副官で操縦士のアラルガルと共に、エンリルは地球へと旅立った。エンリルは地球に着くと、一大計画をぶち上げた。もっと英雄たちを連れてきて、入植地を設置し、地球の内部から金を得て精製することを。では、誰がエリドゥの指揮を取り、誰が入植地を監督するのか。誰が“着陸場所”や二輪戦車の管理をするのか。アヌを地球に招いて、判断を委ねることとした。

……

ひかり：惑星の重力を利用して加速・減速するスイング・バイ航法が利用されていたわけね。それにしても、またもやニビルの危機ね。

建：それだけ、ニビルにはエゴが蔓延ってしまった、てことさ。

(2)アヌの来訪
　アヌの来訪は、壮麗な歓迎をもって行われた。アラルは戸惑いながらも、アヌと肩を組み合った。着陸する場所を建設し、英雄たちをもっと送り込んで金を採取するよう、アヌは提案した。そして、エリドゥで、仕事や任務を割り当てるために会議が開かれた。エアが提案した。
「私はエリドゥを築いたので、他の入植地をこの地域に築こう。そして、“直立した者たちの住まい＝エディン”としよう。エディンの司令官は私が引き受け、エンリルには金の抽出を行ってもらおう」
すると、エンリルが腹を立てた。
「指揮を取るのは、私の方が上手です。地球とその秘密についてはエアの方が熟知しており、アブズを発見したのも彼なので、彼をアブズの主人とすれば良いのです」
　彼らが“第一子”と“正統な世継ぎ”として争っていることに気付いたアヌは、これが原因で金を採取できなくなることを懸念した。
「では、誰がニビルに戻って王座に座り、誰がエディンを指揮し、誰がアブズの主人になるのか、くじ引きで決めようではないか！」
とアヌはぎょっとするような提案をしたが、彼らはそれに従った。そして、アヌがニビルに戻り、エンリルがエディンを指揮し、エアがアブズの主人になることに決定した。エンリルは大変喜んだが、エアは涙に暮れた。そこで、アヌは提言した。
「エリドゥはエアの故郷として、永久にエアの名を記憶にとどめよう。彼が、着水した最初の存在であることを、永久に記憶させよう。エアは地球の主人として知られるようにしよう。彼の称号を“地球の主人＝エンキ”としよう」
エンリルは言った。
「あなたの称号は、これよりエンキとしよう。私は“命令の主”として知られよう」

……

ひかり：これが、さっきの血統が原因で…ということなのね。くじ引きで決めるのも、聖書の原型ね。
建：そして、神威をはかる神道の原型でもある。

(3)アラルの反逆と追放
　一件落着と思ったアヌがニビルに戻ろうとした時、アラルが言った。
「地球の支配権は私にあることが、金の発見をニビルに知らせた時の約束ではないか。不愉快だ！」
アヌはアラルと対決しようとした。2 人は服を脱いで裸となり、戦い始めた。勝負は、アラルが地面に膝をついて負けた。アヌは地面に崩れ落ちたアラルの胸を踏みつけ、勝利を宣言した。と、その時、アラルはアヌの両足を引っ張って倒した。そして、アヌのペニスを噛み切って飲み込んだ！激しい苦痛にアヌは

叫び声をあげ、倒れた。エンキがアヌに駆け寄り、エンリルがアラルを取り押さえた。アヌは小屋へ運ばれ、アラルは別の小屋へ連行され、両手足を縛り上げられた。

アヌはエンキの治療により回復した。アラルの内臓の中ではアヌのペニスが重荷となり、腹は産気づいた女性のように膨らんでいた。そして、裁判が行われた。裁判を下す 7 人の席には、議長としてアヌが真ん中、右にエンキ、左にエンリルが座った。更に、それぞれの腹心 2 人ずつが座った。判決の前に、アラルの答弁が許された。アラルは、ニビルで自分の継承権が奪われたこと、ここ地球では義理の息子エンキに長子としての権限があるにも関わらず、くじ引きによって騙され、“地球の主”として祀り上げられたことに対して、無念さで胸が張り裂けそうだったことを述べた。
アヌが声を大にして言った。
「お前は私のペニスを噛み切って飲み下し、子孫の血統を断ち切った」
アヌには怒りと共に、同情心が込み上げた。
「流刑で死を！」
とアヌの判決が下った。裁判官たちは、何を言っているのだろうと思った。
「流刑地はラーム（火星）とする。ヌンガルをニビルまでの私の操縦士とし、英雄たちを地球まで運んでもらおう。そして、アンズにも加わってもらい、ラームへの降下任務に当たらせよう」
刑は実施され、ラームに近づいたが、アンズが予期せぬ言葉を口にした。
「私はアラルと共にラームに留まります。彼が亡くなったら、私がアラルを王に相応しく葬ります」
アラルの目には涙が浮かび、アヌは驚嘆した。アヌはその願いを叶えることとした。アラルとアンズには鷲のヘルメットと魚のスーツ、食料と道具が与えられ、ラームに降下した。

アヌはニビルに帰還すると、事の次第を議会と王子たちに説明したが、同情や復讐心を引き出そうとはしなかった。代わりに、ニビルと地球の間に宇宙ステーションを建設するよう指示した。最初のはラームに、次のは月に、そして順次、他の惑星にも。地球ではエンキが“地球分割機”を設計し、ニビルで造るよう依頼した。エンキはアブズで使う“噛み砕くもの”と“押しつぶすもの”も設計し、ニビルで造らせた。

英雄たちにとって、地球の速い周回は不安の種で、眩暈を引き起こしていた。大気は上等だが、いくつかのものは不足し、いくつかのものは多すぎた。エンリルは太陽の熱に悩まされ、涼しさと日陰を切望していた。エディンの北側にある雪に覆われた山々をエンリルは気に入り、涼を取る陰の場所を作った。ヒマラヤ杉の森に動力ビームを放って平らにし、山腹から巨石を切り出してサイズを揃え、“空の船”で積み上げた。エンリルは山頂に自分の住まいも造らせた。

また、ニビルからは新たに 50 人の英雄が旅立とうとしていた。その中には、

女性たちもいた。アヌの娘で、エンキとエンリルの異母妹ニンマー（後のニンフルサグ）に率いられた、救助と治療の乙女たちである。二輪戦車がラームに着くと、かすかに発せられている信号の元を追った。すると、湖岸の側でアンズを発見した。彼のヘルメットから信号が発せられていたのである。アンズは死んでいた。ニンマーはアンズの心臓に着目し、自分のポシェットから“プルセル”を取り出して、アンズの心臓に振動を向けた。また、“エミッテル”を取り出し、生命を与える水晶の放射物を体に向けた。それぞれ 60 回ずつ向けた。すると、60 回目にアンズは目を開けた。そこでニンマーはそっと「生命の水」を顔に注ぎ、「生命の食べ物」を含ませた。アンズは死から目を覚ました。

　ニンマーはアラルについて尋ねた。アラルは着陸して間もなく、耐え難い苦痛に見舞われ、自分の内臓を吐き出し、苦しみ悶え、巨大な岩を凝視して死んだ。アンズはその岩に洞窟を発見し、その中に遺体を隠して入り口を石で塞いだ、と言った。彼らがそこまで行くと、アラルの痕跡が見つかった。ニンマーは言った。

「私たちの年代記の中で、初めてニビル以外で王が亡くなった。彼を、安らかな眠りに就かせましょう」

そして、洞窟の入り口を再び塞ぎ、その巨大な岩山にアラルの姿を光線で刻んだ。鷲のヘルメットをかぶった姿であり、顔は何も覆わなかった。

「アラルの顔には、彼が統治したニビルの方向を永遠に見つめさせよう！」

父アヌの名に於いて、ニンマーはそう宣言した。そしてアンズには、ラームの中間ステーションの司令官を任命した。アンズは

「あなたは命の恩人です。偉大なレディ！アヌには感謝してもしきれません」

と言った。

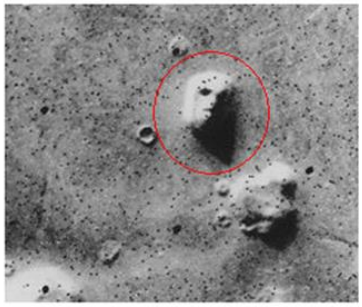
……

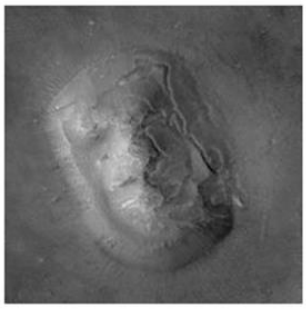
ひかり：ニビルでの屈辱を晴らす戦いが行われたわけね…。で、これが、セトが兄オシリスの遺体をバラバラにして川に投げ込み、オシリスの男根がナイル川に住むオクシリンコスという魚が飲み込んだというエジプト神話の原型になったのか…。

建：オクシリンコスには、オ・シ・リ・スが入っているだろ？その魚とは、“魚のスーツ”を着て最初に地球に上陸したアラルの暗示だったのさ！

ひかり:ひたすらNASAが隠していた火星の人面石は､アラルの顔だったのか…。

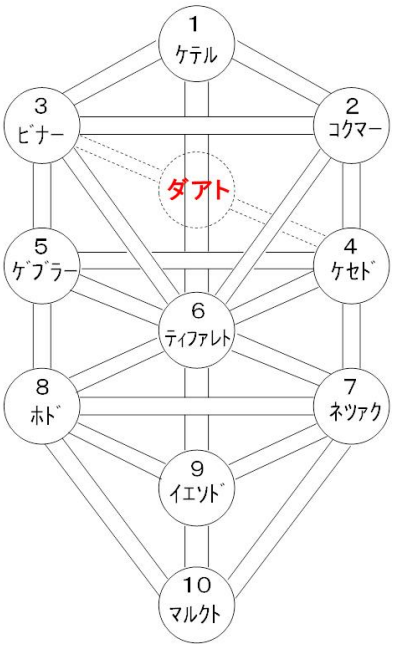
建：だから、鷲のヘルメットの顔。その火星と月には、神々の中継基地が造られたわけ。それをひたすら、NASA は隠し続けてきた。神々は、火星と月の基地から降臨して来たのさ。ニビルはエゴでとっくに無くなってしまったから…。





ひかり：それから、議長としてアヌが真ん中、右にエンキ、左にエンリルが座ったのが、ひょっとして「生命の樹」の 3 本柱の原型？

建：その通り。それだけではないけどね。



ひかり：神殿は、エンリルの避暑地が元だったんだ。

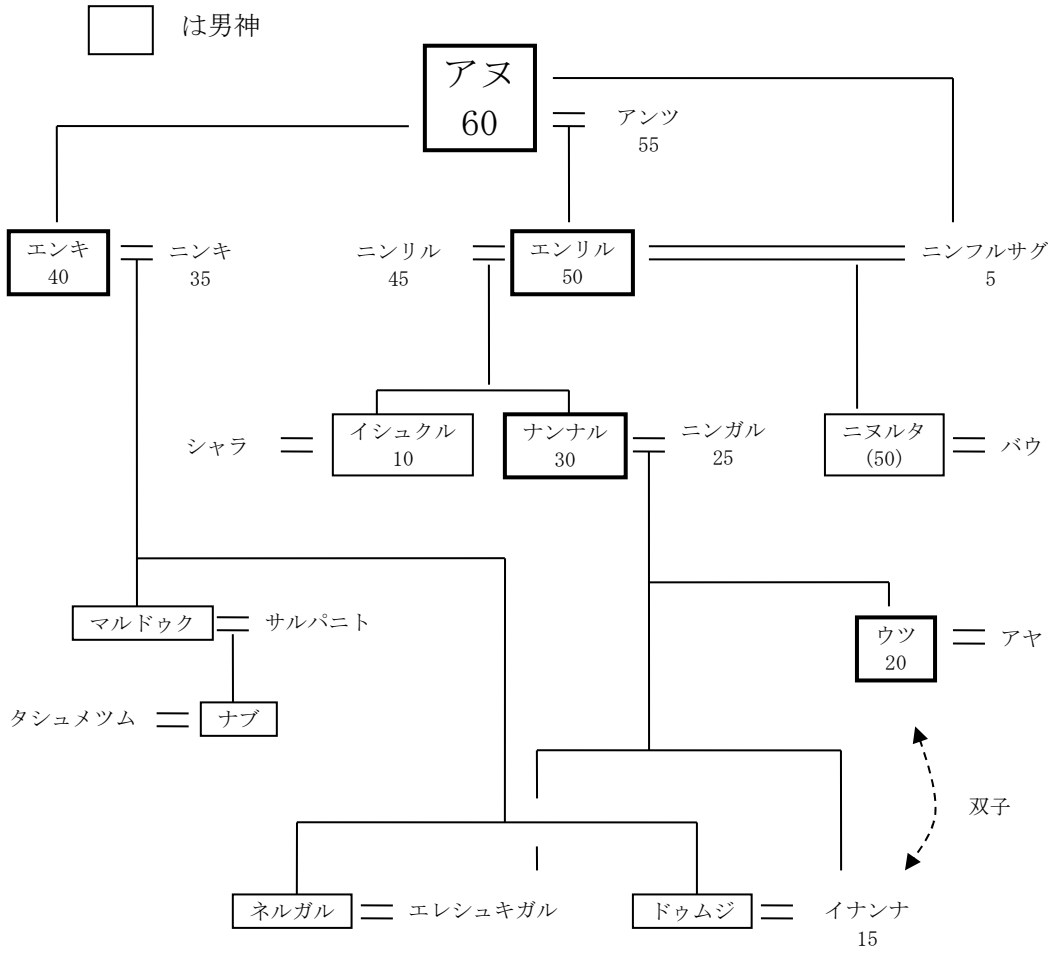
建：ジグラットさ。ピラミッドもそうだが、巨石遺跡はすべてニビルの科学技術によって切り出され、積み上げられた。人間ができるものではない。

ひかり：かつての考古学者たちは、いろいろ議論していたのにね…。ところで、“プルセル”と“エミッテル”は死者を蘇らせる道具なの？

建：いや、死者は蘇らない。仮死状態あるいは瀕死の状態の者を蘇生させる装置だ。まあ、AED のようなものだね。

ひかり：60 回の意味は？

建：単に“ニビル”の暗示さ。アヌの王位継承数字の 60 だよ。じゃあ、ここで理解しやすくするために神々の系図を示すよ。



主要な神々は全部で 12 柱。アヌとアンツ、エンリルとニンリル、エンキとニンキ、ナンナルとニンガル、ウツ、イナンナ、イシュクル、そしてニンフルサグ。大神はめったに降臨しないアヌ、その 2 人の息子エンキとエンリルを合わせて“原初三柱の神々”となる。これは、ニビルを加えた太陽系の 12 の天体に相当し、イスラエルの十二支族、そしてイエスの 12 人の使徒の原型でもある。また、ニビルから数えて地球は 7 番目の星で、エンリルがこれに相当する。これが、神聖数字 7 の原型。7 は他にも、「生命の樹」の中高世界以下にあるセフィロトが 7 個で、これは天上ではなく地上での叡智をすべて知ることにも相当している。

更にこれとは別に、各神には系図に示したような数字が割り当てられている。これは王位継承順位で、シュメールは 60 進法だから、60 が 1 つの区切りを表す。60 に近いほど王位継承順位が高く、アヌが最高の 60。この継承数字は様々な暗示に使われ、聖書に於ける数字、例えば、ヘブライの民を 40 年間荒野で彷徨わせたのはエンキであり、契約の箱アークが移動しなか

った年数が最長で 20 年というのは、太陽神ウツに由来しているということを暗示しているんだよ。
ひかり：なるほどね…。今までの疑問がすっきり解決！

6：宇宙空港の本格的建設－神々の反乱
(1)ニンマーの地球到着
ラームからニンマーたちは離陸した。月を周回した後、地球に着陸し、歓迎を受けた。ニンマーは、エンキとエンリルにニビルで決められたことすべて、アラルの死と埋葬、ラームへの中間ステーション建設について述べた。エンリルは、地球にそのような施設を建設しようと思っていたので困惑したが、アヌの命令ということで、納得せざるを得なかった。ニンマーはポーチから一袋の種を取り出し、果樹から万能薬ができること、そして英雄たちが飲むのにうってつけであることを述べた。種を蒔く場所として、エンリルはヒマラヤ杉の森の横に建設した“着陸場所”にニンマーを連れて行った。彼らはエンリルの住まいへ行き、中に入ると、エンリルは彼女を抱きしめて熱烈なキスをした。彼女の腰を抱き寄せたが、子宮に精子は注がなかった。ニンマーはエンリルとの間にできた息子ニヌルタ（エンリルの長男）のことを話し、彼を呼び寄せることにした。そして、ニンマーは谷間の土地に種を蒔いた。

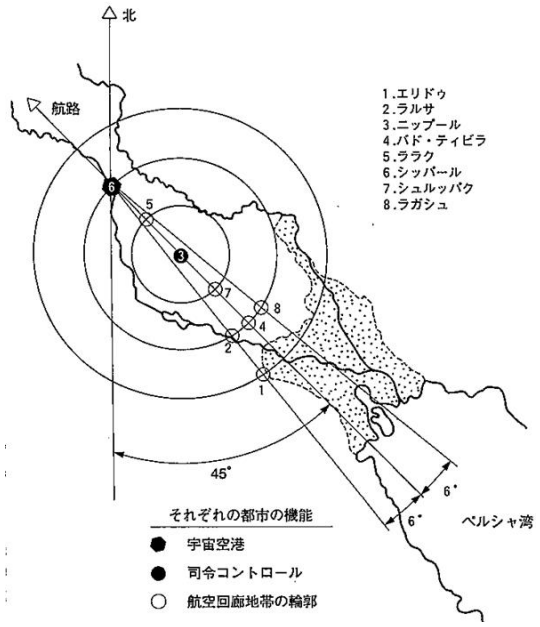
エンリルはニンマーに都市計画を示した。
「エリドゥから離れた乾燥した土地で、プランヌ川（ユーフラテス川）の川沿いが指揮の拠点であるラルサ、それと双子の都市ラガシュ、2 つの都市の中間点から 60 リーグ先に垂線を延ばした場所に安息の都シュルバク（シュルッパク）、更にその延長線上に地球の交差点の場所ニブル・キを配し、“天と地球を結ぶもの”を築くつもりだ。そこに“運命の石板”を保管し、すべてのミッションを管理するのだ」
ニンマーは、エンリルが何故、困惑したのか理解した。

エンキはアブズでいろいろ計画していた。彼は大河が流れる水のほとりに、自分の住まいを建てた。アブズの中央部、真水の場所にエンキは行き、金を採掘するために“地球スプリッター”、“噛み砕くもの”と“押しつぶすもの”を設置した。7 番目の日、あらゆる場所に英雄たちが集まり、アヌのメッセージを聞いた。地球で 600 人、ラームで 300 人、総勢 900 人の英雄たちだ。
「君たちは栄光ある名によって呼ばれるだろう。“天から地球へやって来た者たち”、アヌンナキである。ラームにいる者たちはイギギ、“観測し見る者たち”と名付けよう」

……
建：ラガシュは灯台都市の役割を担い、大洪水後はニヌルタの都市とされた。シュルバクはニンマーの治療センター、ニブル･キは元々の宇宙飛行管制センターで、エンリルの都。アッカド語ではニップールと呼ばれたのさ。この

ニップールを中心に同心円を描くと、これらの線上に都市が並ぶ。また、シッパールを起点とした飛行ルートの線と、その線から左右対称に6度間隔で線を結ぶと、これらの線上に都市がすべて正確に配置されているんだよ。

ひかり：驚きよね…。



(2)エンキ、エンリル、ニンマーの関係

彼らは、3人の異なる母から生まれた。エンキはアヌの第一子だったが、側室の子だった。エンリルの母は正式配偶者アンツから生まれ、正統な世継ぎだった。ニンマーは別の愛人から生まれ、非常に美しく、叡智に溢れていた。アヌはエンキに異母妹であるニンマーを娶らせ、彼らの息子を合法的な継承者にしようと計画した。しかし、ニンマーは颯爽とした司令官エンリルに夢中になり、エンリルはニンマーを誘惑し、妊娠させた。その子がニヌルタである。アヌはこの行為に激怒し、ニンマーが誰かの配偶者となることを禁じた。そして、エンキはニンマーを諦め、ダムキナという姫を娶った。2人の間には息子が生まれ、マルドゥク、“純粋な場所で生まれた者”と名付けた。

……

ひかり：神々って、意外とふしだらと言うか…。

建：この後、もっとふしだらな話がいっぱい登場するよ。だが、ここでニンマーがエンキの子を宿さなかったのが、後に大変な事態を引き起こすのさ。歴史に″if″は無いが、ニンマーがエンキと結婚していればね…。

(3)エンリルの追放

エンリルが結婚したのは、ニビルではなく地球である。ある夏、暑さを避けてエンリルは自分の住まいに引きこもっていた。涼しくなってからヒマラヤ杉

の森を歩いていると、ニンマーの治療乙女たちが何人かで水浴びしていた。その中のスドという名の乙女にエンリルは魅了され、彼女を住まいに招いた。エンリルは彼女に性交渉を仄めかした。娘は嫌がった。
「私の膣は小さすぎます。まだ交合を知らないのです」
エンリルはキスを仄めかした。
「私の唇は小さすぎます。まだ、キスを知らないのです」
エンリルは笑って彼女を抱きしめてキスし、彼女の子宮に精子を注いだ。この行為はニンマーに報告された。ニンマーは、ふしだらな男、と蔑み、裁判に掛けることにした。すべての都市からエンリルを追放し、“戻れない土地”への流刑が決定された。

　アブガルが操縦士となったが、彼らの目指したのは“戻れない土地”とは別の土地だった。そこは、かつてエンキとアブガルが“恐怖の武器”を封印した場所であった。アブガルはエンキの秘密を告げ、エンリルを残して帰還した。
　エディンではスドが妊娠し、ニンマーがエンキに伝えた。彼らはスドを“裁定を下す 7 人”の前に連れて来た。スドはエンリルを配偶者とすることを承認した。そのことは、アブガルによって流刑地にいるエンリルに伝えられた。そして、スドを娶ることでエンリルは流刑から戻され、恩赦された。スドはその後ニンリル、“司令官のレディ”と称号を与えられた。2 人の間には、ナンナル（輝く者、の意）が生まれた。彼は、地球で最初に生まれたアヌンナキであった。

……
ひかり：またエンリルは！
建：ははははっ、まあ、そう怒るなよ。それが男というものさ！
ひかり：まったく男というものは身勝手なんだから。それにしても、エンリルって、暑さに弱いのね。
建：そう、そのエンリル神殿の森が、神社の杜の原型なのさ。
ひかり：ここで“恐怖の武器”の封印がエンリルにばれたけど…。
建：これが、後々大変な事態となる。
ひかり：で、この後、エンキはどうなったの？

(4)エンキとニンマー
　その後、エンキがニンマーを誘った。
「エンリルへの想いは諦め、私と一緒になろう！」
エンキは愛撫するように愛の言葉を囁いた。
「君はまだ、僕の最愛の人なんだ」
エンキはニンマーを抱きしめ、キスし、精子を子宮に注ぎ込んだ。
「私の息子を産んでくれ！」
彼女は妊娠したが、女の子だった。エンキはがっかりし、再び妊娠させた。またもや女の子だった。
「君には息子を産んでもらわなければならない！」

エンキは叫び、再びキスした。すると、ニンマーはエンキに呪いの言葉を吐いた。彼が食べ物を食べると内臓で毒となり、顎、歯、肋骨が痛んだ。高官イシムドがアヌンナキを召喚し、ニンマーに苦痛を取り除くよう、懇願した。エンキが
「金輪際、ニンマーの陰部から遠ざかる」
と手を挙げて誓うと、彼女は 1 つずつ、苦痛を取り除いた。ニンマーはエディンに戻り、決してエンキやエンリルの配偶者となることはなく、アヌの命令は成就された。

エンキは配偶者ダムキナと息子のマルドゥクを地球に呼び寄せた。彼女は“地球のレディ”ニンキという称号を与えられた。彼女と愛人たちによって、エンキは更に 5 人の息子をもうけた。順にネルガル、ギビル、ニナガル、ニンギシュジッダ、そしてドゥムジである。エンリルはニヌルタを呼び寄せた。エンリルはニンリルによって、イシュクルをもうけた。

……

ひかり：エンキの執念は凄まじかったのね。
建：そりゃそうさ、本来、自分が王位を継承すべきところを、弟に取られたわけだからね。これが、聖書では兄よりも弟に継承権が与えられ、日本の古代では王位は弟が継承していたことの元になっている。

(5)エンリルの監視塔

地球で採掘された金はニビルで微細な粉にされ、天空に打ち上げられ、大気の裂け目は徐々に修復されていった。エンキはエリドゥに輝く住まいを造り、その地でマルドゥクに知識を授けた。ニブル･キでは、エンリルが圧巻的な“天と地球を結ぶもの”を設置した。その中央では、ひっくり返ることのないプラットホームの上に、天に向かって高くそびえる柱が設置されていた。そこから、エンリルの言葉が入植地に広がった。光線が高く上げられ、すべての土地の深奥部を捜索することができた。その両目はあらゆる土地をスキャンし、その網は望まないものの接近を不可能とした。王冠型の部屋が、そのそびえ立つ家の中心で遠い天空を凝視し、地平線を見つめ、天の頂点を完成していた。その暗く神聖な部屋には、太陽の家族が 12 個の紋章で表され、“メ”には天空の神々の秘密の公式が記録されており、“運命の石板”が光彩を放っていた。エンリルはそれらによって、すべての到着と出発を監督した。

……

ひかり：空中庭園のようなものができたのね。光線はサーチライト、両目はレーダー、王冠型の部屋は「生命の樹」のケテル（王冠）みたいね。
建：“すべてを見通す目”さ。これに対して、エンキは三日月と関連させ、“ニニギク、ニンイギク（目の清い神)”と言われた。ニニギノミコトやニギハヤヒの“ニニギ、ニギ”という言葉の原型だよ。

(6)アンズの処刑
　地球で鉱山労働しているアヌンナキは、仕事と食事に不満を漏らし、地球の速い周期に悩まされたが、万能薬は少ししか配給されなかった。アヌンナキは数組毎にニビルに送り返され、新しい組がやって来た。ラームでは、もっと不満が大きかった。彼らは地球へ降りる時、休む場所を要求した。エンキとエンリルはアヌに助言を求めた。ラームのリーダー、アンズに地球に来てもらい、話し合うこととなった。エンキはアブズをアンズに見せ、鉱山の労働方法を公開した。エンリルはニブル･キへ招いて神聖な暗い部屋に通し、一番奥の聖域で、“運命の石板”をアンズに説明した。“着陸場所”に到着してくるイギギへの救済措置を、エンリルは約束した。この時、アンズの心の中は邪な考えで一杯になった。アンズは王子の中の王子であり、天空と地球の指示系統を掌握し、エンリルから権限を取り上げようと目論んでいた。疑念の無いエンリルはアンズを聖域の入り口に立たせておき、聖域を離れ、泳ぎに出掛けた。ここぞとばかりに、アンズは“運命の石板”を奪い、“空の部屋”で飛び去った。“着陸場所”には、謀反を起こしたイギギが彼を待っていた。彼らは、アンズが地球とラームの王であることを宣言する準備をしていたのである。聖域では輝きが衰え、ブンブンという音が静かになり、神聖な公式が停止した。

　エンリルらはアヌに助言を求め、石板を取り戻すこととなった。ニヌルタが母ニンマーにけしかけられ、反逆者に立ち向かう任務を負った。アンズは石板を持っているため、自分は無敵だと思っていた。ニヌルタは“稲妻の矢”をアンズに向けたが、矢はそれた。戦闘は膠着状態となり、エンキが助言した。
「“つむじ風”で嵐を起こし、粉塵でアンズの顔を覆い、彼の“空の鳥の羽”を逆立てるのだ！」
エンリルはティルル（ミサイル）を造り、
「“嵐を起こす武器”に取り付け、翼と翼が近づいた時、撃て！」
と指示した。ニヌルタはエンキの助言に従ってミサイルを放ち、アンズは地上に落下した。そして、アンズを捕虜とし、石板を取り返した。反逆していたイギギらは降参した。裁判により、アンズは殺害光線により処刑された。同じ先祖の種子を受け継ぐアラルの横に埋葬すること、マルドゥクに遺体を運ばせて彼をラームの司令官とすることをエンキが提案した。エンリルはそれを認めた。

……

ひかり：これって、天界でのサタンの反逆？
建：まあ、その原因の 1 つ、てとこかな。落ちたアンズの話は、ギリシャ神話“イカロスとダイダロス”の原型だよ。

(7)アブズでの反乱
　エンキとエンリルは地球での反乱を警戒した。地球での滞在期間が長すぎると彼らは考え、ニンマーに助言を求めた。彼らは、彼女の変化著しい容貌に不安を抱いた。そして、もっと迅速に金をニビルに送り込めるようにすることで、意見が一致した。ニヌルタの提案により、エディンに“金属の都”、溶解精錬工

場を設置することになり、その場所はバド・ティビラと名付けられ、発案者のニヌルタが司令官となった。その結果、ニビルへの金の流れは速くなった。金は二輪戦車によって運ばれた。
　しかし、その頃エンキはアブズのアヌンナキに注意を払わず、そこにいる生物に魅了されていた。地球とニビルの違い、地球の周期と大気によってどのように病気が引き起こされるかなど、彼は解明したかった。そこで、湧き出る水のほとりに“生命の家”を建て、ニンギシュジッダを呼んだ。彼らは背の高い木々の間で暮らす直立猿人に夢中になっていた。

　ニヌルタは、バド・ティビラに送られてくる金鉱石が次第に減っていくのに気付いた。そして、エンリルの命により、アブズに派遣された。そこでは、労働に不満を持つアヌンナキが不平を言い、嘆き悲しんでいた。彼はエンキにこのことを話した。エンキはエンリルを呼び寄せた。鉱山労働の英雄たちが彼らの住まいを囲んだ。エンリルは彼らの言い分を聞き、アヌに助言を求めたが、金を入手するために仕事を続けなければならない、と言われた。そこで、エンキはニンギシュジッダを呼び、相談した。そして、ある解決策を提案した。
「原始的労働者ルルを創ろう。それにアヌンナキの労役を負わせよう」
周りのアヌンナキたちは仰天した。
「そんな話は前代未聞だ！」
彼らはニンマーを呼び寄せた。彼女が言った。
「1 つの生命からもう 1 つへ、生命は長い間にわたって発達してきました。無からは何も生じないわ！」
エンキはアブズの秘密を明かした。
「我々が必要とする生物は、もう存在しているのだ！そこに、我々のエッセンスの印を付けるだけで良いのだ！」

……

ひかり：地球とニビルの公転周期の影響が、ニンマーの容貌に現れ始めたのね。
　　あぁ、歳とって皺が増えるのは嫌！
建：誰でも歳はとるさ。それはさておき、いよいよここから、人類誕生となる！

7：遺伝子工学による人類の誕生－原始的労働者の生産
(1)原始的労働者の創成決定
　他の指導者らは、エンキの説明に心奪われた。
「アブズには直立猿人がいる。体が毛むくじゃらで、頭の毛はライオンのようだ」
エンリルが言った。
「エディンでは、そんな生き物は見たことがない」
ニンマーが言った。
「遥か昔、私たちの祖先はそんな風だったに違いないわ！それは畜生ではなく、見たらドキドキするでしょうね」

エンキは“生命の家”に彼らを連れて行った。頑丈な檻の中に、それらはいた。
「ニンギシュジッダが生命エッセンスを調べたら、2 匹の蛇が絡み合っているようで、我々のものと酷似している。我々のエッセンスを混ぜ合わせれば我々の印が付き、原始的労働者が創りだされる！彼らは、鉱山労働を担うだろう」
エンリルはたじろいだ。
「我々の惑星では、奴隷制度はずっと昔に廃止された。奴隷のように働くのは道具であり、他の生き物ではない。新しい生物を、君は誕生させようとしているのだ！“創造”は、“万物の父”の手にだけ委ねられているのだ！」
エンキが言った。
「奴隷ではなく、助っ人だよ」
ニンマーが言った。
「その生物は、既に存在しているわ。更に能力を与えるだけなのよ」
エンリルは言った。
「由々しき問題だ。これは惑星から惑星へと旅してきた規則に反している。金を手に入れることが目的であって、“万物の父”に取って代わることではない」
ニンマーが言った。
「“万物の父”は私たちに知恵と理解を授けてくださいました。“すべての創造主”は、私たちの生命のエッセンスを知恵と理解力で満たされました。私たちはそれを使うことができます。そう、運命付けられているのでは？」
「我々の理解力が我々をどこへ導こうと、そうするよう、我々は運命付けられている。我々は知識を使うことを、妨げられてはいない」
とニンギシュジッダが言った。
「運命は確かに変えられない。始まりから終わりまで、それは決定されていたのだ。それは運命か、宿命か？私はそれが疑問なのだ。それを見極める必要がある」
とエンリルは言った。彼らはその問題をアヌに問いかけた。

　ニビルでの議論は長く続いたが、ニビルを救うことが決定され、エンキはその結論を喜んだ。エンキはニンマーを助手とし、アヌンナキは労役へと戻って行った。いくつかの檻の中には、上半身と下半身が異なる生物がいた。ニンマーはそれらを怪物と言った。ニンギシュジッダは生命エッセンスの秘密、2 種類から採ったエッセンスの混ぜ合わせ方をニンマーに説明した。そして、どのように混ぜ合わせるのか、量はどうか、どの子宮で受胎を始め、どの子宮で出産させるべきか。そのために、ニンマーの力が必要なことを、エンキは説明した。そして、彼女はニンギシュジッダと共に、“メ”に隠されている神聖な公式を調べ、檻の中の生物を検査して言った。
「アヌンナキの男性で 2 本足の雌を受精させましょう。そして、掛け合わせた子供を生ませましょう！」
「我々はそうしたが、駄目だった。妊娠すらしなかった」
とエンキが言った。

……

ひかり：アフリカにいた人類の祖を遺伝子工学で…。道理で、人類の祖はアフリカに行き着くわけね…。
建：人為的な生物系統樹の操作だ。
ひかり：つまり、神々は本当の「神」ではなかったわけね。彼らも“万物の父”“すべての創造主”として、創造のエネルギーを崇敬しているわ。
建：その通り。エンリルは創造主にしか許されていないことに手出しすべきではないと主張しており、まったくごもっともだ。
ひかり：DNA は 2 匹の蛇が絡み合っているようで、アヌンナキのものと酷似していたのを発見したのは、天才科学者のニンギシュジッダだったのね？
建：エジプトのトート神で、中南米のケツァルコアトルでもあり、日本では導きの猿田彦。そのシンボルはカドゥケウスの杖で、「生命の樹」そのものであり、現在の病院のマーク＝医療の象徴なのさ。そして、ニビルには存在しなかった蛇。蛇と言えば、父エンキのシンボルの 1 つが蛇でもある。エンキは水神でもあり、後に人類は神々に長寿を祈願したから、長寿の爬虫類の亀もまたエンキのシンボルさ。
ひかり：しかし、いくら DNA が酷似していても、いきなり異種間交配は不可能だったのね。

(2)最初の人類アダムゥの誕生

別の方法を試すよう、ニンマーが言った。地球の分が損なわれること無く、私たちのエッセンスを段階的に受け取るように。水晶の容器にニンマーはエッセンスの混合物を用意し、2 本足の雌の卵子をそっと置いた。そして、アヌンナキの種子を含んだ“メ”で受精させ、2 本足の雌の子宮に挿入した。今度は妊娠し、開腹して取り出すと、新生児が生きていた。しかし、上半身は毛むくじゃらで、下半身はアヌンナキに似ていた。成長を待つと、手は道具を扱うことには向かず、話すことはできなかった。そこで、何回か試行錯誤した。“メ”の中のエッセンスを注意深く検討し、1 つの“メ”から少し、もう 1 つの“メ”から少し取り出し、メスの卵子に受精させた。耳が聞こえなかったり、視覚が弱かったり、足が麻痺したり、精液が漏れていたり、手が震えていたり、肝臓が機能していなかったりした。エンキは失望し、
「原始的労働者はできない！」
と嘆いた。しかし、ニンマーは

「成功するまで続けよ、と私の心が駆り立てるの」
と言って、実験を続けた。

　エンキが言った。
「ひょっとすると、何かが不足しているのかもしれない。地球自身を形成しているもの、その成分が欠けているのではないか？ニビルの水晶ではなく、地球の粘土でそれを作ろう」
エンキは、アブズの粘土を使うよう、指示した。ニンマーは、浄化する槽を粘土で作り、その中で混合物を作った。そして、2 本足の雌の卵子をそっと置き、アヌンナキの血液から採取した生命エッセンスを、徐々に正確に容器に加えた。そして、2 本足の雌の子宮に挿入した。受胎し、出産の時を待ちわびた。いよいよ、新生児を取り出すと、それは男の子で、姿は完璧だった。しかし、成長しても言葉を話せなかった。そこで、エンキは考えを巡らせた。
「唯一、変えなかったことがある。それは、地球の雌に卵子を挿入したことだ。これが、最後の障害の可能性がある。もしかすると、アヌンナキの子宮が必要なのかもしれない！」
“生命の家”に沈黙が走った。彼らはお互い見つめあった。互いの胸の内を探りながら。ついに、ニンマーが震える声で言った。
「お、お兄様、か、賢いお言葉だわ…。それで、…、アヌンナキの誰が、自分の子宮を提供するのかしら？ひょっとすると、怪物をお腹に宿すことになるかもしれないのに…」
エンキが言った。
「私の配偶者、ニンキに聞いてみよう。彼女に事情を詳しく話そう」
すると、ニンマーが言った。
「駄目よ！混合物は私が創ったの。見返りも危険に身をさらすことも、私の責任であるべきよ、私が子宮を提供するわ！」
エンキは頭を垂れ、彼女を抱きしめ言った。
「ならば、そうすれば良い」
そして、その通りにした。妊娠は地球のより長く、ニビルのより短かった。そして陣痛が始まり、男の子が誕生した！エンキは彼を抱きかかえ、下半身をぴしゃりと叩くと、正常な音を口から発した。エンキは新生児をニンマーに手渡し、彼女は両手で掲げた。
「私の手が創り出したのよ！」
と勝ち誇ったように叫んだ。

　彼らは新生児の手足、容貌、各器官の機能を調べ、いずれも問題無かった。頭髪は漆黒で、毛むくじゃらではなく、肌は滑らかでアヌンナキの肌のようだった。その色は、どす黒い血のようで、アブズの粘土のような暗褐色であった。彼の男性器を見ると、アヌンナキのものとは異なり、前部が皮膚で覆われていた。エンキが言った。
「この包皮で、地球人と我々を区別しよう」
ニンギシュジッダが言った。

「我々は完璧さに到達した！」
エンキはニンマーに、名前を付けるよう促した。彼女は新生児の肌を指で撫で、
「アダムゥと呼ぶわ。“地球の粘土のような者”、それが彼の名前よ」

……

ひかり：人類の祖の誕生の瞬間、というわけね…。
建：この場合の“メ”とは精子のことさ。雄の精子に、アヌンナキの精子から DNA の一部を抜き取って導入し、それを体外受精させた。最終的には、エンキの DNA を血液から採取し、猿人の雌の卵子と体外受精させた。地球の粘土から作った容器といっても、素焼きの土器などではなく、フラスコのようなガラス容器さ。粘土はアッカド語で“ティト”で、泥を意味する。その同義語はビサ＝湿地、ベサ＝卵だから、粘土は“猿人の卵子”をも意味する二重語義となる。粘土にはケイ素が豊富で、その化合物の酸化ケイ素は光学活性を有する。生命体の根源であるアミノ酸は光学活性があるから、酸化ケイ素の光学活性が効いていたのかもしれないね。
ひかり：あなた、歴史以外もよく知ってるわね、…いろんなこと。アダムゥの容貌からすると、現在のアラブ系やインド系よね？
建：うん、白人などではない。ちなみに、ニンマーは古代バビロニア文書では“助産婦、利口なマミ”と呼ばれており、“ママ”の語源なのさ。

(3)ティアマトの誕生
「彼のような労働者が、たくさん必要とされているのです。これから先、誰が子宮を提供するのですか？」
とニンギシュジッダが言った。ニンマーが 1 つの解決策を提案した。彼女は、シュルバクにいる女性治療者たちを呼び寄せ、課せられた任務を説明した。そして、強制ではなく希望を募った。すると、7 人が任務を引き受けた。その名をニンギシュジッダが記録した。ニニンマ、シュジアンナ、ニンマダ、ニンバラ、ニンムグ、ムサルドゥ、そしてニングンナである。
今度は、アダムゥから生命エッセンスを抽出した。そして、ニンマーはアダムゥの男性部分に切込みを入れ、血を滴らせた。
「これを“生命の印”とし、肉体と魂が混ぜ合わされたことを、永遠に宣言させよう！」
彼女はそれぞれの容器に、血を 1 滴ずつ落として混合物に加えた。ニンマーは
「この粘土の混合物の中で、地球人とアヌンナキが結び付けられんことを！」
と言って、呪文を唱えた。
「この 2 つのエッセンスに統一あれ！1 つは天の、1 つは地球のものが一緒にされ、地球のものとニビルのものが、血によって血縁関係を結ばれんことを！」
ニンギシュジッダは、この言葉も記録した。
出産のヒロインたちの子宮に、卵子は挿入された。受胎があり、出産があり、7 人の男児が誕生した！そして、“正常”であった。しかし、この方法は過酷すぎるし、時間も掛かりすぎた。そこで、雌を創ることをエンキが提案した。地球人自身で生殖させるのである。アダムゥの対を成す者を創るためには、1 人、

アヌンナキの子宮が必要であることを、ニンギシュジッダが述べた。
　今度はニンマーではなく、ニンキを呼び寄せ、彼女が任務を引き受けた。“調整”はニンギシュジッダが行った。ニンキの子宮に卵子が挿入され、受胎したが、割り当てられた時に出産の印は来なかった。更に月を数え、10ヶ月目、“邪悪な宿命の月”と彼らは呼んだが、ニンマーが帝王切開して取り出すと、女の子が誕生した！彼らは新生児の手足、容貌、各器官の機能を調べ、いずれも問題なかった。頭髪は浜辺の砂のような色で、毛むくじゃらではなく、肌は滑らかでアヌンナキの肌の滑らかさと色だった。
「この子は君に姿がそっくりだ」
とエンキが言った。そして、ニンキが名付け親となり、ティアマト、“生命の母”とされた。地球の大元となった、あの古い惑星に因んで。

……

ひかり：勇気ある女性たちね！
建：その通りだが、それによって、人類の本来あるべき進化が歪んでしまったとも言える。
ひかり：アダムゥから生命エッセンスを抽出する儀式が、割礼となったのね？
建：割礼により神の姿そのものになるからこそ、割礼が“選ばれた民”の印とされたわけさ。
ひかり：浜辺の砂のような栗毛色の髪に合う肌色は、黄色味を帯びた肌、モンゴロイドのような色、ということになるから、肌の色が“アヌンナキと同じ色”だとしたら、アヌンナキの肌はモンゴロイド系なのね？
建：だから、神の系譜はモンゴロイドなのさ。その証拠が蒙古斑。これが後に誤解されて“青い肌”となった。更に、その直系は遺伝子的に特別な…
ひかり：YAP遺伝子ね！

(4)生殖能力の付加
　ニンマーはティアマトの生命エッセンスを抽出し、アダムゥの時と同様にして、7人のヒロインたちの子宮に挿入した。そして、7人の女子が誕生した。エンキが言った。
「彼らをお互いにつがわせよう。そして、彼らの子孫が増え、アヌンナキの労働を担うことになるのだ！アダムゥとティアマトについては、労働の苦役から守られる。彼らをエディンに連れて行こう」
アダムゥとティアマトはエディンに連れて行かれた。エンリルは彼らを見ると、彼の不満は減少した。他のアヌンナキも見に来て、驚嘆した。
　しかしアブズでは、期待していた地球人同士の受胎は観測されなかった。ニンギシュジッダは昼夜を問わず観察し、実際に男性は女性に精子を注入していた。しかし、受胎すら起こらなかった。エンキは熟考した。そして、かつて掛け合わせた生物のどれひとつも、子をもうけなかったことを思い出した。そこで、ニンギシュジッダがアダムゥとティアマトの生命エッセンスを抽出し、アヌンナキのものと比較した。彼はエッセンスの絡まりを解いた。エッセンスは「生命の樹」の上に、22本の枝のように配列されていた。アヌンナキの方には、

更に2つの小片が存在した。
「1つは男性、1つは女性由来です。それら無しでは、出産は起こりません！アダムゥとティアマトの雛型には、それらは含まれていないのです！」
ニンマーは取り乱し、エンキは落胆した。しかし、ニンギシュジッダは解決策を提案した。エンキ、ニンマー、ニンギシュジッダとアダムゥ、ティアマトだけが部屋に残り、鍵をかけた。ニンギシュジッダは 4 人を眠らせ、感覚を奪った。そして、エンキの肋骨から生命エッセンスを抽出し、それをアダムゥの肋骨に入れた。また、ニンマーの肋骨から生命エッセンスを抽出し、それをティアマトの肋骨に入れた。そして、切開した場所を塞いだ。これにより、「生命の樹」に2本の枝が付け加えられたのである。
　アダムゥとティアマトは、エディンの果樹園を自由に歩きまわれるようにされた。彼らは自分たちが裸であることに気付き、男らしさと女らしさを知った。そして、ティアマトは葉っぱで前掛けを作った。

……

ひかり：この話からすると、イブを唆したのはニンギシュジッダなのね？
建：偉大な科学者ニンギシュジッダ！彼無くして、今の人類はあり得ない。そして、「生命の樹」を基盤とするカバラもニンギシュジッダということだ。だから、トートのような知恵の神となる。
ひかり：男性のY染色体はエンキ、女性のX染色体はニンマー由来なのね！
建：だから、みんな神々の子なのさ。約30万年前のことだよ。聖書のアダムは“赤い土”や“人間”を意味するが、“血”も意味する。これは、人類の血と神々の血＝遺伝子が混ぜられたことを意味する。ニンフルサグはニンティとも呼ばれ、シュメール語の“ティ”は“生命”と“肋骨”の意味だから、アダムの肋骨からイブが創られたことに対応する。そして、後に“礼拝”として訳される言葉“avod”は“仕事”の意味だが、神を礼拝するのではなく、人類が神々の労働力として働かされていたことを表すのさ。

(5)エディンからの追放
　エンリルが果樹園の木陰を散歩していると、アダムゥとティアマトに遭遇した。そして、彼らが前掛けをしていることに気が付き、エンキに説明を求めた。生殖の問題について、エンキは説明した。すると、エンリルは激怒した。
「私は最初から反対だった。“創造主”のような振る舞いに、私は反対だった！ニンマーとニンキを危険に曝し、君の作品は失敗したのに関わらず、我々の生命エッセンスの最後の小片を、これら畜生に与えてしまったのだ！ことによると、我々と同じ生命サイクルを授けてしまったのかもしれないぞ！」
エンキはニンマーとニンギシュジッダを呼び寄せ、エンリルをなだめた。
「彼らは生殖能力を与えられただけで、“長寿の枝”を与えたわけではありません」
とニンギシュジッダが言った。
「どちらを選ぶの、お兄様？すべてを失敗に終わらせるか、それとも、生殖によって地球人に労役を負わせるか？」

とニンマーが言った。
「エディンから追放し、アブズへ行かせろ！」
とエンリルは怒って言った。

……

ひかり：エンリルが果樹園を散歩していたから、聖書に於けるエデンの園は「知恵の樹」と「生命の樹」に生る（なる）果実の例えとなっているのね。
建：「知恵の樹」に絡まる蛇とは、責任者としてはエンキ、実質の実験者としてはニンギシュジッダ。「我々に似せて人を創ろう」と言った主はエンキだが、エデンの園に於いて、アダムとイブを追放した主はエンリルのことだよ。決して、唯一絶対神などではない。
エンキのシンボルは、さっき言った魚と水瓶、水鳥、三日月、そして、ここでの蛇だよ。水は洗礼や「生命の水」に関係する。

8：ニビルの接近ーエンキとの自然受精による人類誕生
(1)イルニンニとウツの誕生
アダムゥとティアマトはアブズへ追放された。エンキは木々の囲いの中に彼らを置き、為るがままにさせた。そして、新生児が何人か誕生した。彼らの成長は早く、アダムゥとティアマトが他の息子や娘を産む頃には、最初の子たちは彼ら自身で子をもうけていた。ニビルの 1 シャルが過ぎる前に地球人は増殖し、配給される食べ物だけでアヌンナキと共によく働き、熱や埃に不平をこぼさなかった。地球から届けられた金で、ニビルの大気は修復されていった。
アヌンナキの間でも、結婚と出産があった。エンキとエンリルの息子たちは、異母妹、治療のヒロインたちを配偶者とした。彼らの子供はニビルの寿命サイクルを授かっていたが、地球のサイクルによって早まっていた。ニビルでハイハイを始めた頃、地球では走り回っていた。ナンナルとニンガルに双子が生まれた時の喜びは特に大きかった。イルニンニ（後のイナンナ）、ウツと名付けられ、地球上に三世代のアヌンナキが揃った。

……

建：遺伝的にニビルの性質を受け継いでいても環境に左右される。これは今後、人類が新たな惑星探査のために宇宙旅行する際、生物学的に見て、極めて興味深い。
ひかり：三世代揃うことの喜びは、神宮式年遷宮の“宇治橋渡り初め”が三世代揃った夫婦によって始められることの原型かしら？
建：かもね。

(2)ニビルの接近に伴う天空の混乱
地球では気温が上昇し、植物が繁茂し、野生動物が土地を蹂躙した。雨は多くなり、川は勢いよく流れ、暑さが増していった。そして、南極では氷が解け始め、ゴロゴロと地球が鳴っていた。海では砂洲が無くなった。陸地では火山

が噴火し、地面が震えた。アブズの先端“下の方の世界”に、エンキは観測所を設置し、息子のネルガルとその配偶者でイルニンニの姉のエレシュキガルにそこの指揮を委ねた。未知のことが起ころうとしていることを、ネルガルはエンキに告げた。

ニブル･キでは、エンリルが天の周回路を観察しており、天空に混乱が起きていることに気付いた。ラーム（火星）からは、マルドゥクがエンキに不平をもらした。
「強い風がかき乱しています。厄介な砂嵐です。“打ち出し細工のブレスレット”で混乱が生じています」
その後、地球では空から硫黄が降ってきた。それらは空で爆発し、燃え盛る炎となった。晴れた日に、それらは暗闇を引き起こし、嵐と共に邪悪な風が暴れまわった。石のミサイルのように、それらは地球を攻撃した。月とラームも大破壊を被り、3 つの星は顔が数え切れない傷で覆われた。エンキとエンリルは、アヌに緊急のメッセージを発信した。
ニビルから返答があった。
「天空で、地球を含めた 7 つの星が一直線に並んでいる。ニビルが太陽に接近したことにより、“打ち出し細工のブレスレット”から細々したものをずらしてしまった！」
天の棒を無くし、ラハム（金星）はムンム（水星）と太陽の側にうずくまり、彼女の壮麗な住まいを捨て、天空のニビルに引きつけられ、天の女王になろうとしていた。彼女を鎮めるため、ニビルは天の深遠から、かつてのティアマトの衛星を出現させた。空の地平線から中心に掛けて、火を吹くドラゴンのように、その尾は伸びていた。日中、それは地球の空を暗くし、夜には月の表面に呪いを掛けた。ラハムは天体の兄たちに助けを求めた。すると、キングゥ（月）、かつてのティアマトの保護者が応じた。ドラゴンを捕まえるため、キングゥは急いだ。衝突は凄まじく、大嵐が巻き起こり、衝撃で慄き震えた。その後、ニビルは遠く離れた住まいに戻り、天空は落ち着きを取り戻した。

エンキ、エンリル、マルドゥク、ニヌルタが大惨事の調査に取り掛かった。エンキは地球の土台を調べ、ニヌルタは渓谷が揺れた場所を調べた。ニヌルタは、硫黄ミストと瀝青（アスファルト）を発見した。マルドゥクはラームを調べ、大気がダメージを負っていた。彼は地球に帰りたがった。エンリルはラームの中間ステーションを捨て、エディンに“二輪戦車の場所”を設置するよう主張した。それは、最初の着水から数えて、80 シャル過ぎた時のことだった。

……

ひかり：約 16 万年前の出来事だったのね。
建：ニビルの接近が原因で、軌道をずれた小惑星が地球、月、火星に降り注いだ。金星はニビルの重力に捉えられ、自転方向が逆転した。そして、かつてのティアマトの衛星が月に激しく衝突し、表面はクレーターだらけとなった。
ひかり：“下の方の世界”とは、アフリカ南端で、エリドゥなどから見て下の方、

ということなのね。これが、“天界”のニビルに対する“冥界”の原型と考えられるから、元々、冥界とか地獄界は無かったわけだ…。

(3)エンキとマルドゥクの月への旅

ニヌルタの進言により、エンリルは“二輪戦車の場所”をバド・ティビラの近くに設置する計画をアヌに伝えたが、エンキは地球の重力がラームよりも大きく脱出しにくいことを理由に、月を提案した。以前に地球を来訪した時、月の可能性を考えていたアヌは、先に月を調べるよう命じた。エンキはその決定に大いに喜んだ。エンキは常に月に魅せられていたからである。満ち欠け、太陽との位置関係は、エンキにとって不思議中の不思議で、その秘密を解き明かしたかった。そして、マルドゥクをお供にし、ロケットで月に向かった。大気は呼吸に不適当で、鷲のヘルメットを着用した。重力が弱いので、彼らは易々とあちこち行ったり来たりした。月の表面は、ドラゴンの産物によって乾燥と荒廃が支配しており、中間ステーションとしては不向きだった。マルドゥクはすぐに帰還するよう言ったが、エンキは留まって月、地球、太陽の関係を調べるよう提言した。

彼らは地球についての動きを観察し、地球の 6 周、太陽の周りを 12 周掛けて、地球の年を測定した。2 つの星の絡み合いが、太陽もしくは月の明かりが見えなくなる現象を記録した。それから、金星と水星についても観測した。また、エンキはチャート上に地球と月の位置を記し、ニビルの動きによって、その大きな帯の幅の輪郭を描いた。それを“アヌの道”と名付けた。エンキは天空の星々のグループ分けにも魅了され、星座を描き出し、天の経路によって、水平線から水平線まで 12 の星座を描いた。また、“アヌの道”の下側の天には、そこからニビルが侵入してくる場所に帯状の道を設計し、“エンキの道”と名付けた。それに対して、上側の天空の道を“エンリルの道”と名付けた。それぞれの“道”には、各々12 の星座が割り当てられた。

エンキはマルドゥクに、地球の歳差運動についても示した。

「私が初めて地球に到着した時、そして私で終わる天の持ち場を“魚たちの位置”と名付けよう。私の称号“水の彼”に因んで」

エンキはマルドゥクそう言ったが、マルドゥクは次のように反論した。

「地球とニビルでは、知識と支配階級は一致していません。原始的労働者を創ろうとした時、私の母ではなく、あなたはニヌルタの母を呼び寄せました。助手として私ではなく、あなたは若いニンギシュジッダと共に生と死の知識を分かち合いました。あなたはアヌの長男ですが、エンリルが正統継承者です。あなたが最初にエリドゥを築いたのに、そこの支配者はエンリルです。金はニヌルタの都市で集められて出荷量が調整されており、ニビルの存続は、彼らの手に委ねられているのです。私たちは、宿命によって覇権を奪われたのです！」

エンキは無言で息子を抱きしめた。

「私が奪われてきたものが、将来、お前のものとなるだろう。お前の天の時は来る。私の地位が、お前の地位に加えられるであろう！」

……

ひかり：地球からの初の月面着陸は、エンキとマルドゥクだったのね。
建：だから、米国は月の真相を隠したがった。
ひかり：月に魅せられたエンキに、お月見は由来するのね。エンキの思想は、東洋で脈々と受け継がれてきたわ！
建：星座などもエンキが決めたのさ。

(4) シッパールの司令官ウツ

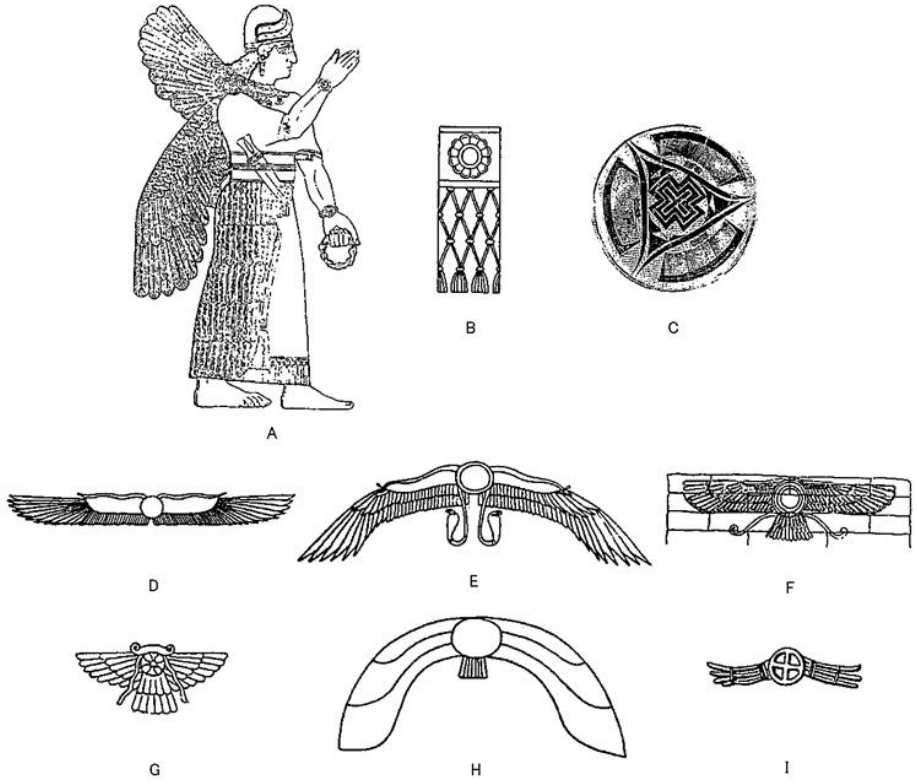
地球の何周期もの間、エンキとマルドゥクは地球を留守にしていたが、その間、地球での計画は何も実行されず、ラームではイギギが混乱していた。彼らは帰還すると、月は中間ステーションに向かないことをアヌに報告した。アヌは地球に“二輪戦車の場所”を建設するよう命じた。その司令官として、エンキはマルドゥクを推薦したが、ニヌルタのために取っておいたことをエンリルが怒って言った。アヌは 2 人の対抗心をそらすため、地球での新しい世代、ウツを司令官とすることに決定した。そして、その場所をシッパール（鳥の都、の意）とするよう提言した。ウツに指揮権が与えられ、彼のために鷲のヘルメットが作られ、彼は鷲の翼で飾られた。

シッパールが完成すると、アヌは直接見に来た。祝宴が催され、イルニンニが歌と踊りを披露した。アヌは愛情をこめて彼女にキスし、“アヌの最愛の子（アンニツム）”と呼んだ。アヌが帰還すると、マルドゥクは自分の“空の船”で、地球を良く知るために、国中を放浪した。ラームのイギギの管理も、ウツに任された。

……

建：シッパールには、ウツの神殿エバブバラ（光り輝く住宅）があった。そこは文明がシュメールで花開いた時、公正な法律の場所であり、ウツ自身が人々を裁いている姿も残されている。シッパールはシュメールの最高裁判所でもある。ハンムラビはウツの律法を石碑に記したが、それがハンムラビ法典であり、石碑の一番上にはウツが描かれている。ウツは正義を保証して圧迫を防いだので、“旅行者の保護者”と見なされた。ハンムラビはウツのことをアッカド語で“シャマシュ”と呼んだ。セム語では“太陽”という意味で、ウツは“メソポタミアの太陽”に相応しい神だった。ウツの別名が“バブバル＝光り輝く者”であり、光を注ぎ、“天と地球を照らす者”だった。ならば、この名こそが、天照大神の元なのさ！そして、ウツが転じてウヅ、ウジとなる。
ひかり：太陽神ウツね！
建：“ウツ”とは正確には“輝き進む者”の意味で、アッカド語ではシェム・エシュと言う。シェムは“ムーであるもの”＝空飛ぶ機械、エシュは“火”だから、シェム・エシュは“火を噴くジェット機、ロケットの男”という意味さ。ウツが管理していたシッパールは“鳥”を意味し、宇宙空港だった。また、シャマシュは“シェムと鷲たちの離発着の場所を管理する神”という意

味でもあり、ウツら神々は鷲の紋章を付けた制服を着用していた飛行士でもある。鷲の嘴のように見えるのはゴーグルさ。その図をA、Bに、併せて着陸地点の印をCに、そして神々の星ニビルの象徴をD～Iに示そう。Aは太陽神ウツ。両手首に巻かれたものはBのような図形で、菱形の部分が中高世界、並ぶ3つの菱形が3本の柱を表す「生命の樹」。上部の至高世界には、12人の神々を表す十二紋菊が描かれている。着陸地点の印は大きく見て“丸の中に十字”で、十字の周りは六芒星＝ダビデの星をデフォルメした図形だよ。



ひかり：ニビルの象徴としては、EやFが解りやすいわね。一見すると、人工衛星のようにも見えるかしら？そして、アヌはあん＝阿吽で、阿は開いた形で丸、吽は閉じた形で十字がシンボルだから、“丸の中に十字”は大神アヌとニビルの象徴なのね！

建：いろいろ解ってきたようだね。アルファでありオメガ、も同じことさ。そして、日の丸も同じさ。

ひかり：米国宇宙飛行士の鷲のマークは、これら粘土板の絵が元だったのね…。

建：そして、アメノウズメノミコトが天岩戸の前で歌い踊ったことの原型は、イルニンニが大神の前で歌い踊ったことだったのさ。

(5)エディンへの人類入植
　アブズに限られていた原始的労働者を、エディンの英雄たちも欲した。その問題についてエンキとエンリルが話し合っている間に、ニヌルタが手下を連れて勝手にアブズへ行き、地球人たちを網で追い回して捕獲し、エディンに連れて来た。これには、エンキもエンリルも激怒した。
「私がアダムゥとティアマトを追放したのに、お前が覆してしまった！」
とエンリルは怒った。ニヌルタは、かつてアブズで発生した暴動がエディンで起きないようにするため、と答えた。エンリルは腹の虫が収まらなかったが、それを認めた。地球人たちは服を着ずに任務を遂行していた。男と女は絶えず番っており、増殖は速く、次第に食糧が減ってきた。当時、穀物はまだ無く、羊もいなかった。エンリルはエンキに何とかするよう、愚痴をこぼした。

……

ひかり：“労働者”の時は裸体だったのね。だから、欲情に任せてどんどん増えて…。
建：で、この地域にはまだ穀物が無かったから、食糧が減ってきたわけだ。東南アジア地域だったら、米の原種が自生していたのに。
ひかり：ということは、小麦と、それから羊はどこから来たわけ？

(6)アダパとティティの誕生
　食糧難に対して、エンキは策を練っていた。彼は“文明化された人”を創り、彼らに穀物の種を蒔かせて耕させ、羊を飼わせようとした。どうしたら、これを達成できるのか？何が、生命エッセンスに足りなかったのか？エンキは地球人をよく観察した。そして、憂慮すべきことに気付いた。仲間同士で繰り返される交配によって、彼らは野生へと退化していた！

　エンキは高官のイシムドと共に、川を巡幸して観察した。そこに、水浴びして戯れる 2 人の野生的で美しい女性を見つけた。エンキはキスしたい衝動に駆られ、イシムドに聞いた。
「彼女たちにキスしても良いかね？」
すると、イシムドが言った。
「さあ、行って、キスしなさい！」
イシムドは舟を寄せた。1 人を呼ぶと、彼女は果実をエンキに差し出した。エンキは前かがみになって娘を抱きしめ、キスした。唇は甘く、胸は成熟して引き締まっていた。そして、彼女の子宮に精液を注いだ。エンキはもう 1 人も呼び、彼女がベリーを差し出すと、最初の娘と同じようにした。
「この娘たちと留まり、妊娠するかどうか確認せよ！」
とエンキはイシムドに命じた。
　日数が満ち、最初の娘がしゃがんで出産し、男児が誕生した。同じ日の夕暮れ、もう 1 人がしゃがんで出産し、女児が誕生した。1 日の夜明けと夕暮れに、その子たちは生まれた。イシムドはエンキに報告した。
「誰がこのようなことを知っていたのか？アヌンナキと地球人の間で妊娠が成

し遂げられ、私は“文明化された人”に生を与えたのだ！」
とエンキは有頂天になった。
「この行いは、秘密にしておくのだ。母親たちに新生児を授乳させるのだ。その後、私の家族に加える。そして、パピルスの茂みの中で、葦の籠に入っている彼らを見つけた、と言うのだ」
イシムドはその通りにした。エンキの妻ニンキはその子たちを気に入り、自分の子供として育てることとした。男の子をアダパ（捨て子、の意）、女の子をティティ（命を持つ者、の意）と名付けた。

2 人は他の子供と違っていた。他の地球人より育つのが遅く、理解がずいぶん早かった。彼らには知性が授けられており、言葉をしゃべることができた。ニンキは器用なティティを気に入り、手芸を教えた。エンキはアダパに自ら教えを授けた。エンキはエンリルに知らせを送り、エンリルがエリドゥにやって来た。
「荒野で新しい種類の地球人が生まれた。彼らには、知識を教えることが可能なのだ。ニビルから、蒔くべき種（たね）を降ろしてこよう。ニビルから、羊になる雌羊を降ろしてこよう。そして、人類に農業と羊飼いを教え、アヌンナキと人類が共に満腹になろう！」
とエンキは言った。
「彼らは実に、いろいろな意味で我々に似ている。荒野から自然に発生するとは、不思議中の不思議だ！」
とエンリルが言った。
イシムドがエンリルに呼び出されたが、エンキから言われたように言った。
「信じられん！地球自身が“文明化された人”を生み出したのだ。この新種について、アヌに知らせよう！」
アヌは知らせを聞いてびっくりした。
「命のエッセンスによって、1 つの種類からもう 1 つの種類を引き起こすとは、前代未聞ではないか！“文明化された地球人”が、アダムゥからこんなに早く出現するとは、前代未聞だ！その生き物は、ひょっとして、増殖可能か？」
ニビルで学識者が熟考している間に、エリドゥで重大な出来事が起きた。アダパが性的関係でティティを知り、妊娠が起き、ティティが出産したのである。双子の兄弟を、ティティは産んだ。その知らせはアヌに送られた。アヌはとんでもないことを命じた。
「地球人アダパをニビルに連れてくるのだ！」

……

ひかり：エンキ自身がアダムゥとティアマトの子孫を妊娠させたなんて…開いた口が塞がらないわ！
建：つまり、エンキが「神」ならば、人類は祖先を辿ると、誰もが「神の子」ということなのさ。ニビルから“生物の種（たね）”が地球にばら蒔かれたからこそ、可能なことだった。
ひかり：“パピルスの茂みの中で、葦の籠に入っている彼らを見つけた”ことが、

モーゼ誕生場面の原型なのね。そして、アダパがティティを知ったことは、アダムゥとティアマトが男らしさと女らしさを知ったことに重ねられているわね。

9：ニビルへの人類初の宇宙飛行－文明の始まり

(1)アダパのニビル訪問

ただでさえ、エンキが創作した人類のことを快く思っていなかったエンリルは、アヌの決定を良く思わなかった。

「ニビルで彼は長寿の水を飲み、長寿の食べ物を食べる。我々アヌンナキと同じように、地球人の１人がなろうとは…」

ところが、エンキもアヌの決定を良く思わず、むっつりしていた。

「誰が、こんなことを考えただろうか？」

しかし、アヌの命令には逆らえず、地球で生まれ、若くてニビルをまだ目にしたことのないニンギシュジッダとドゥムジをお供に、アダパをニビルに連れて行くことにした。

ニビルから迎えの“空の部屋”が到着し、アヌの高官イラブラトが降りて来た。彼はアダパとティティを紹介されると、実に我々にそっくりだ、と驚いた。

エンキはアダパに忠告した。

「お前はこれから、我々がやって来た惑星ニビルに行くことになる。我々の王アヌの前に引き出され、紹介される。お前は跪くのだ。そして、尋ねられた時だけ手短に答えるのだ。お前には新しい服が与えられるので、それを着るのだ。そして、地球では見当たらないパンを与えられるが、そのパンは死だ、食べてはならぬ！聖杯に入った万能薬も勧められるが、その万能薬は死だ、飲んではならぬ！お前と共に、ニンギシュジッダとドゥムジが旅をする。彼らの言葉に従えば、お前は生き延びられる！」

「肝に銘じておきます」

とアダパは答えた。出発の際に、エンキは 2 人の息子を抱きしめた。そして、ニンギシュジッダの手に、封印したタブレットを見えないように滑り込ませた。

「我が父アヌに、こっそり渡すのだ」

そう、エンキは言った。

彼らはシッパールの“天の二輪戦車の場所”へ行った。ニンギシュジッダとドゥムジにはイギギの服装が与えられ、神々しい鷲のように装われた。アダパのボサボサの髪は剃られて鷲のヘルメットを与えられ、腰巻の代わりに、体にぴったりした礼服を着せられた。アダパはニンギシュジッダとドゥムジに挟まれ、“上昇するもの”の中に納まった。合図と共に、それは轟音を立てて発射した。アダパは怯えたが、ニンギシュジッダとドゥムジが腕を添えて落ち着かせた。地球の大気圏から離れて宇宙の暗闇に飲み込まれていくと、アダパは再び動揺した。

「元に返してくれ！」

ニンギシュジッダがアダパの首に手を置くと、アダパは一瞬のうちに静かにな

った。

　ニビルでは好奇心が渦巻いていた。地球で生まれたエンキの子供たち、そして地球人に出会えるためである。彼らはイラブラトによって王宮へ連れて行かれ、体を清めて香しい油を塗られ、相応しい衣服を身に着けた。イラブラトが先導し、その後ろにアダパ、それからエンキの 2 人の息子が続き、王座の部屋に案内された。そこには、王子と顧問たちが集まっていた。
「我が孫息子たちよ！」
と叫んでアヌはドゥムジとニンギシュジッダを抱きしめ、キスした。そして、右にドゥムジ、左にニンギシュジッダを座らせた。アヌはイラブラトに尋ねた。
「彼は我々の言葉を理解するのか？」
「如何にも、主エンキから教わったのです」
と彼は答えた。アヌはアダパを近くに寄せ、尋ねた。
「名を何と言い、職業は何だ？」
アダパは跪いて答えた。
「私の名はアダパと言い、主エンキの家来です」
すると、周りから大きなどよめきが起こった。
「地球で信じられないことが達成された！祝賀を開こう！」
とアヌが言った。彼は全員を宴会場に案内した。アダパはパンを勧められたが、食べなかった。ニビルの万能薬を勧められたが、飲まなかった。この行為にアヌは気分を害した。
「(エンキは何故、このような無作法な者をよこしたのだ？天の道を彼に明かしてまで。）これこれ、アダパ、お前は何故、食べも飲みもせぬのだ？」
「主エンキがお命じになったからです」
「はても、奇妙なことよ」
アヌはイラブラトとドゥムジに尋ねたが、彼らは知らなかった。ニンギシュジッダに尋ねると、彼は秘密のタブレット渡した。

　アヌは私室へ戻り、タブレットを解読すると、アダパはエンキが地球人女性と交わって産ませた子であること、配偶者のティティもエンキの種であること、アダパには長寿は授けられず、死すべき運命であること、アダパの子孫が種を蒔き放牧することによって、地球に豊作がもたらされることが書かれていた。アヌは仰天し、怒っていいのか笑っていいのか、解らなかった。アヌはイラブラトを呼び寄せて言った。
「エアは“地球の主”エンキとなった今でも、女癖は直っていなかった！規則はどうなっておる？王としては、どうすべきか？」
「惑星間での同棲には規則が存在しません！ただちにアダパを地球に戻し、ニンギシュジッダとドゥムジはもっと長く滞在させましょう」
とイラブラトは答えた。アヌはニンギシュジッダを呼び寄せ、タブレットの内容を話した。そして、ニンギシュジッダに“文明化された人”の教師となるよう命じた。そして、ニビルの穀物の種子を与えた。ドゥムジは 1 シャルの間、ニビルに留まることになり、羊のエッセンスと雌羊と共に帰ることになった。

帰りの旅の途中、ニンギシュジッダはアダパに、惑星の神々、太陽と地球と月の関係、地球の年（ねん）などについて教えた。

……

ひかり：万能薬の入っている聖杯は、イエスの聖杯伝説を連想させるわね！
建：身分の高いアヌに謁見するためにアダパは髪を剃られたが、これが神や仏に仕える者の多くが、剃髪する原型なのさ。
ひかり：アヌが最も若い孫息子ドゥムジを右に座らせたのは、ドゥムジが重要な役割を果たすことを暗示しているのね。

(2)アダパの帰還

帰還すると、ニンギシュジッダはニビルでのことをすべてエンキに話した。エンキは笑って腰を叩き、思った通りに事が運んだ、と大喜びした。しかし、ドゥムジが残されたことは謎だった。エンリルは、彼らの迅速な帰還に困惑した。そして、ニンマーも呼び寄せ、ニビルでの話を聞くことにした。ニンギシュジッダはすべてを隠さず話した。エンキのことについて、アダパとティティのことについても。
「私は規則を破っていない。食糧供給を安定化しただけだ」
とエンキは言った。
「規則は破っていないが、アヌンナキと地球人の運命を、軽率な行為によって決めてしまったのだ！今や、運命が宿命に追い越されてしまったのだ！」
エンリルは彼らに背を向け、去って行った。

……

ひかり：エンリルは運命や規則を大切にするのね。レ・ミゼラブルのジャベールみたい。

(3)カ・インとアバエル

エリドゥにマルドゥクがやって来た。父親と 2 人の弟の奇妙な活動の真実を突き止めようと、母ニンキに呼び寄せられたのである。エンキとニンギシュジッダは、マルドゥクには秘密を隠しておくことにした。アヌは“文明化された人”に魅了され、すぐに地球を満たさせるよう命じた、と彼らはマルドゥクに言った。

マルドゥクはティティに感銘を受け、その息子たちが気に入った。そして、ニンギシュジッダがアダパを指導している間、自分に彼らの教師をさせてくれるよう、エンキとエンリルに頼んだ。エンリルが
「マルドゥクに 1 人を教えさせ、もう 1 人はニヌルタに教えさせよう」
と言った。ニンギシュジッダはアダパ、ティティと共にエリドゥに留まり、数や書くことをアダパに教えた。双子のうち、最初に生まれた方をニヌルタは自分の都市バド･ティビラへ連れて行き、水路を掘ることや種蒔き、刈り取りなどを教えた。彼のことを“田畑で食べ物を育てる彼”、カ・インと呼んだ。もう 1 人の兄弟は、マルドゥクによって牧草地に連れて行かれ、馬屋の造り方を教え

られた。そして“灌漑された牧草地の彼”、アバエルと呼ばれるようになった。彼らは牧羊を始めるため、ドゥムジの帰りを待った。ドゥムジがニビルから戻ると、羊のエッセンス、雌羊を連れて来た。しかし、これまで地球上には羊がおらず、子羊は天から地球へ落とされたことが無かった。雌の羊は一度も子を産んだことが無かった。“創造者”らは、“創造の部屋（遺伝子工学と家畜化施設）”と“形作る部屋（作物と家畜のための遺伝学研究所）”を“着陸場所”の純粋な土手に設置し、そこで穀物と雌羊の増殖が始まった。

その後、ニヌルタとマルドゥクの指導の下、カ･インによって種蒔きと刈り取りが、アバエルによって牧羊が始められた。最初の作物が刈り取られ、最初の羊が成熟した時、初物の祝いをするよう、エンリルが布告を出した。

そして、その時が来た。エンリルとエンキの足下に、ニヌルタに導かれてカ･インが自分の供え物を置いた。また、マルドゥクに導かれてアバエルが自分の供え物を置いた。エンリルは彼らに祝福を与え、労働を褒め称えた。エンキはマルドゥクを抱きしめ、皆に見えるよう、子羊を掲げて言った。

「食べるための肉、着るための羊毛が地球へやって来た！」

この祝いの後、カ･インはむっつりしていた。エンキの祝福が無かったことを、不当に思ったのである。アバエルは、自分こそがアヌンナキを満たしていると自慢した。カ･インは、パンは自分によって供給され、魚と家禽でアヌンナキの食生活を豊かにしているのは自分だ、と主張した。彼らは冬の間中、口論し続けた。夏が始まると雨が降らず、牧草が減っていった。そこで、アバエルが群れを率いてカ･インの畑に追い立て、水路で水を飲ませた。彼らの間で喧嘩が始まり、拳で殴りあった。怒り狂ったカ･インは石を手に取り、それでアバエルが倒れるまで何度も殴り、彼から血が噴出した。カ･インは血を見て、

「アバエル、我が弟よ！」

と叫んだが、アバエルは死んでしまった。

虫の知らせで、ティティはアバエルの血が見えた。それは、カ･インの手に付いていた。恐ろしさ故に、ティティはアダパに話し、彼らの居場所に向かった。すると、死んだアバエルの側にカ･インが座っていた。ティティは絶叫し、アダパは頭に泥を被った。アダパはエリドゥに戻り、事の次第をエンキに告げた。

……

ひかり：これが、カインとアベルの話の真相なのね…。

建：カ・インの教師はニヌルタ、アバエルの教師はマルドゥクだった。現在も残る“初物の祝い”の習慣、新嘗祭などは、エンリルの布告によるものだよ。

ひかり：羊飼いと馬屋（厩）はイエスを暗示するわね！羊が神々の星から降ろされたから、“神の子羊”と言われるわけね？

建：ああ。小麦も突然進化しているのは、このように地球外からもたらされたから。耕作がカ・イン、牧畜がアバエル由来なら、日本はカ・インの影響が根底にある。神社の神饌として供えられるのは米と魚、家禽類で、牧畜系の物は無いから、カ・イン由来だ。

(4)カ･インの追放
　エンキは激怒して、カ･インの前に立ちはだかった。
「お前は呪われてしまえ！そして、エディンから立ち去るのだ！アヌンナキや“文明化された人”の中に、留まっていてはならぬ！」
とエンキは言った。エンキはアダパとティティに、アバエルの埋葬方法を見せた。埋葬の習慣は、彼らには知られていなかったからである。30 日 30 夜、アダパとティティは喪に服した。

　カ･インは裁きのためにエリドゥに連れて来られた。アバエルを失ったマルドゥクは、カ･インも殺害されるべきだ、と主張した。ニヌルタが、“裁定を下す 7 人”を招集することを提案した。しかし、ニビル出身でもない者に対してそんな話は聞いたことが無い、と反論したが、裁判は行われた。マルドゥクの怒りの主張により、ニヌルタは悲しみに包まれた。
　そこで、エンキがマルドゥクを私的な部屋に連れて行き、事の真相を話した。アダパとティティはエンキの種子であること、従って、アバエルだけでなくカ･インもマルドゥクの異母弟（アダパ）の息子であること、カ･インまでいなくなったら飽食が終わって暴動が発生してしまうこと、などを告げた。マルドゥクは抱腹絶倒し、追放に同意した。そして、エンキによって正式に判決が下された。
「カ･インは海を越えた東方へ追放され、彼とその子孫たちは、肉体的に区別されることになる」
そして、ニンギシュジッダによって、顔に髭が生えないよう、カ･インの生命エッセンスが変更され、配偶者としての妹アワンを伴い、カ･インは追放された。

……

ひかり：カ･インを追放したのはエンキだったのね。
建：その追放の地は、現在の南北アメリカ大陸だ。どういう経路なのかは知らないが、太平洋を横断していたら、日本列島上空も通過しているから、既に日本という土地の存在は知られていたわけだ。
ひかり：カインは黒人の祖、なんて言われていたけど、本当は髭の生えていないインディオ系の祖だったわけね。

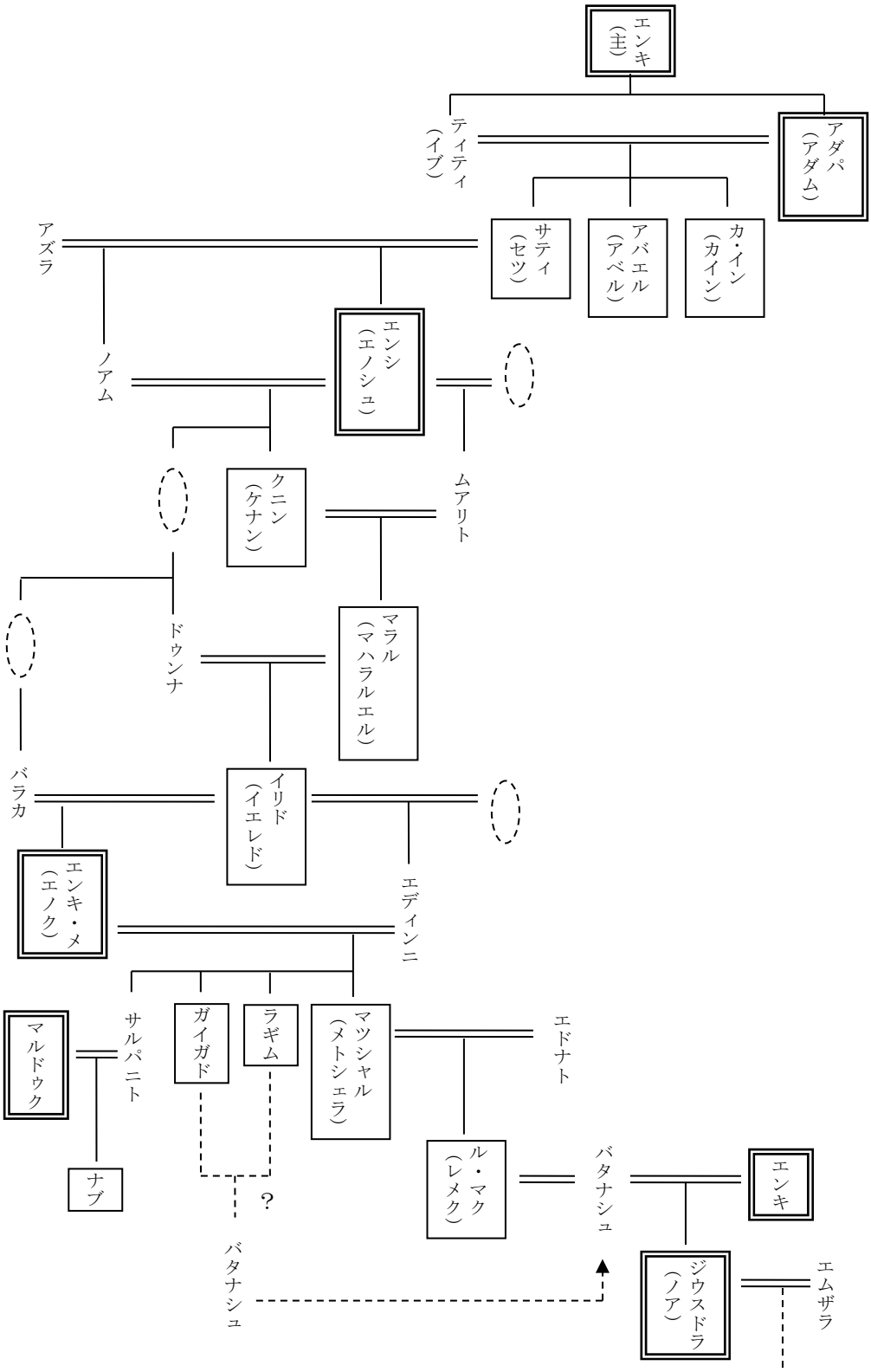
(5)アダパの子孫
　カ･インとアバエルがいなくなったので、アヌンナキは飽食の危機を心配した。そこで、アダパとティティにもっと子を産ませることにした。ずっと娘が続いたが、95 番目のシャルにようやく息子が生まれた。“再び命を結び付ける彼”、サティと名付けられた。アダパとティティには、全部で 30 人の息子と 30 人の娘が誕生した。97 番目のシャルに、サティと配偶者アズラの間にエンシ、“人間らしさの長”が生まれた。アダパは彼に、書くこと、数、アヌンナキ、ニビルのすべてについて教えた。彼はエンリルの息子たちによってニブル･キに連れて行かれ、アヌンナキの秘密を教えられた。どのように香しい油を塗るのか、ナンナルが教えた。どのようにインブ果実から万能薬を調合するのか、イシュク

ルが教えた。それ以来、アヌンナキは“文明化された人”から“主”と呼ばれるようになり、アヌンナキ崇拝の儀式が始まった。
　その後、配偶者で妹のノアムからクニン、“窯の彼”が生まれた。彼はバド・ティビラでニヌルタの指導を受け、溶鉱炉と窯について学んだ。どのように瀝青で火を熾すのか、どのように溶解し精錬するのか、彼は教わった。98 番目のシャルの出来事であった。

　99 番目のシャルにクニンに息子が生まれ、マラル、“演奏する彼”と名付けられた。彼は音楽に優れていた。彼のためにニヌルタがハープとフルートを作った。マラルはニヌルタに賛美歌を演奏し、娘たちと一緒にニヌルタの前で歌った。100 番目のシャルにマラルに息子が生まれ、イリド、“真水の彼”と名付けられた。ドゥムジが彼に井戸の掘り方を教え、牧草地の群れに水を供給した。この頃、イギギが頻繁に地球に到来した。彼らは天空から観測することを止め、地球で起こっていることを観察したいと望むようになった。ラームで彼らと共にいるよう、エンキはマルドゥクに強く求めたが、マルドゥクもイギギと同様、地球で起こっていることを観察したいと望むようになった。

　102 番目のシャルに、イリドに息子が生まれ、エンキ・メ、“エンキによってメを理解した”と名付けられた。彼は賢くて、数をすぐに理解した。そして、天空と空に関するすべてに彼は興味を抱いていた。エンキは彼を気に入り、かつてアダパに明かした秘密を教えた。太陽の家族と 12 の空の神々について、月や年の数え方について、ニビルによるシャルの数え方について、エンキがどのように天空に星座を割り当てて 12 の位置を配したか、などである。エンキ・メはしきりに天空を探索したがったので、彼は 2 回、空の旅に出た。1 回目はマルドゥクが同行し、ロケット船で月へ行った。そこでマルドゥクは、エンキから教わったことをエンキ・メに教えた。
　エンキ・メは地球に戻ると、“二輪戦車の場所”があるシッパールのウツの下に送られた。ウツは自分の“明るい住まい”に“地球人の王子”を落ち着かせた。彼は習ったことを書くためのタブレットを与えられた。そして、彼は儀式を終え、聖職の機能が始まった。エンキ・メは異母妹であるエディンニと共に、シッパールに住んだ。104 番目のシャルに息子が生まれ、マツシャル、“明るい水の側に住む者”と名付けられた。
　2 回目の空の旅にもマルドゥクが同行した。彼らは太陽を周回してからラームへ行った。イギギはマルドゥクから、“文明化された人”について学んだ。“年代記”では彼について、天空に旅立った、死ぬまでそこに留まったと記されている。エンキ・メは天空に出発する前に文書に記録を残し、息子たちに知らせようとし、長男マツシャルに託した。ラギムとガイガドと共に学び、守るように、と。マツシャルの息子はル・マク、“強力な人”と名付けられた。ル・マクの時代、地球の状況は厳しくなっていた。ノルマを強化し、分け前を削減するために、アヌンナキは彼を労働監督の長に任命した。

……


エンキ（主）
アダパ（アダム）
ティティ（イブ）
カ・イン（カイン）
アベル（アベル）
サティ（セツ）
アズラ
エンシ（エノシュ）
ノアム
クニン（ケナン）
ムアリト
マラル（マハラルエル）
ドゥンナ
イリド（イエレド）
バラカ
エンキ・メ（エノク）
エディンニ
マルドゥク
サルパニト
ガイガド
ラギム
マツシャル（メトシェラ）
エドナト
ナブ
ル・マク（レメク）
バタナシュ
エンキ
？
バタナシュ
ジウスドラ（ノア）
エムザラ

ひかり：聖書のアダムとイブの大元はアダムゥとティアマトだけど、“文明化された人”としてのアダムとイブはアダパとティティなのね。サティは聖書ではセツ、エンシはエノシュ、クニンはケナンに対応しているわ。エンシ（エノシュ）の時代から、アヌンナキが「神々、主」として崇拝されるようになったわけね。

建：油の塗り方を教えたのはナンナル（シン）だが、シンは中東やインドで崇拝されており、そのような名を持つ人も多く、彼らは体に油を塗る習慣がある。

ひかり：インブ果実って、ニンマーがニビルから持ち込んだ万能薬の元となる果実のことね？

建：後に、ブドウだと判明するがね。

ひかり：俗説の多いエノクの原型はエンキ・メだったんだ。アダパと同じように、宇宙旅行したわけか…。だから、エノクが天空に旅立って留まったことにされているのね。

(6)アダパの死

自分の生涯に終わりが近づいていることを悟ったアダパは、息子やその子孫全員に集まるよう、言った。カ･インも連れて来るように言ったので、サティはエンキに父の願いを申し出た。そこで、エンキはニヌルタを呼び寄せ、彼が教師役を務めたカ･インを連れてくるよう命じた。ニヌルタはカ･インを見つけると、アダパの下に届けた。

カ･インとサティが父の前にやって来ると、カ･インがアダパの右に、サティが左に並んだ。アダパは視力が衰えていたので、識別するために息子たちの顔を触った。髭の有無で識別は可能だった。アダパは左にいるサティの頭に右手を置いて祝福した。

「お前の種子で地球が満たされるように。そして、3 本の枝を持つ樹として、お前の種子の人類は、“大いなる惨禍”を生き残るであろう」

次に、右にいるカ･インの頭に左手を乗せて言った。

「お前はその罪のために、生得権を剥奪された。だが、お前の種子からは 7 つの国が現れるだろう。彼らは、取り除けておいた領域で繁栄するだろう。遠く離れた国々に、彼らは居住するだろう。ただし、お前は弟を石で殺したので、お前は石によって終わる」

これらの言葉を言い終わると、両手を垂らし、溜息をついて言った。

「私の伴侶ティティと息子と娘たち全員を呼びなさい。私の魂が離れたら、川の側の私が生まれた場所に運ぶのだ。そして、私の顔を昇り来る太陽の方へ向けて、埋葬するのだ」

と言い終えると、アダパの魂は去った。ティティは泣き叫んだ。カ･インとサティは遺体を布で包み、遺言どおり、父を埋葬した。

アダパは 93 番目のシャルに生まれ、108 番目の終わりに死んだ。地球人にしては長生きしたが、ニビルの寿命は持っていなかった。アダパが埋葬されると、カ･インは母と弟に別れを告げ、ニヌルタが遠く離れた領域に戻した。そこで、カ･インは息子と娘たちを持ち、都を築いた。そして、築いている時に、落ちて

きた石でカ･インは死んだ。

……

建：アダパは 16 シャル＝約 58,000 年生きたことになり、地球人にしては長生きだが、ニビルの寿命は持ち合わせていなかった。アダパが死んだ 108 番目のシャルは、煩悩の数の原型だよ。

ひかり：カ･インは長男だから右に、サティは弟だから左に並んだけど、祝福されるべきはサティだから、右手をサティの上に乗せたのね。この場面は、聖書でイスラエルが右手を伸ばして弟エフライムの頭の上に置き、左手を兄マナセの頭の上に置いて祝福した場面そのものね。

建：3 本の枝を持つ樹とは、“大いなる惨禍”、すなわち大洪水を乗り越えたジウスドラの 3 人の息子セム、ハム、ヤフェトのことだよ。当然、「生命の樹」に於ける 3 本柱の原型でもあり、22 本のパスは染色体を意味したから、まさにこの 3 人が大洪水後の人類の祖となって広がっていったということで、「生命の樹」の原型と言えるのさ。

ひかり：カ･インの子孫は南北アメリカ大陸でマヤやアステカ文明の祖となったのね。

10：人類の増殖、旱魃、疫病－迫り来る大洪水

(1)年老いた指導者たち

ル･マクの時代、地球では苦難が増加していた。ラームでは、乾燥と埃で惑星が包まれていた。地球とラームの状況は何を警告しているのか、エンキ、エンリル、ニンマーは話し合った。彼らは太陽フレアを観測した。地球とラームの重力に乱れが生じていた。アブズの“白い土地（南極）”に面した突端に、観測機器を据え付けた。エンキの息子ネルガルと、ナンナルの娘で彼の配偶者のエレシュキガルがそこでの観測を任された。ニヌルタは海の向こうの地に就き、“天と地球を結ぶもの”をそこの山地に設置した。ラームではイギギが落ち着かず、マルドゥクが監督者となった。

宿命を定める 3 人は話し合った。彼らはお互いを見つめ、何と老けたことだろう、と思った。エンキは

「今や髭をたくわえ、疲れ、私は老けてしまった」

と言い、エンリルは

「我々は地球で年老いた。だが、地球で生まれた者たちは、更に早く年を取っている！」

と言い、ニンマーは

「皆は私を、年老いた羊、と呼んでいるわ！」

と言った。

「他の者たちが地球とニビルを往復している間に、私たちはずっと地球に留まり続けた。もしかすると、去る時なのかもしれない！」

とエンリルが言った。

「私はそのことについて、不思議に思っていた。我々3 人のうちの 1 人がニビル

を訪問しようとすると、いつもニビルは我々を阻止した！」
とエンキが言った。
「私も不思議に思ったわ。ニビルの問題なのか、地球での問題なのか…。もしかすると、寿命サイクルに関係しているのかもしれない」
とニンマーが言った。今後の動向を見守ることに、“宿命”か“運命”か見守ることに、指導者らは決めた。

……

建：太陽のフレアが重要な印であることを、神々は知っていた！つまり、フレアの活動と黒点の増減で、2,012 年以降の異常な太陽活動を髣髴とさせる。
ひかり：さすがの神々も、自然のサイクルには敵わず、老化してしまったのね。

(2)マルドゥクの結婚
　その後、マルドゥクがエンキの下にやって来た。
「エンリルの息子たちは地球で配偶者を選びました。あなたの息子ネルガルは、エンリルの孫娘エレシュキガルを配偶者にしました。あなたの長男である私の結婚を待つべきなのに、ネルガルは待たなかった。他の 4 人は私に敬意を表して待っているというのに。そこで、私は配偶者を得たいと思います」
と言うと、エンキは喜んだ。しかし、その相手がアヌンナキではなく、エンキ・メの娘サルパニトであることが判ると、エンキは激怒した。
「ニビルの王子が、継承の資格を備えた長男が、地球人と結婚するだと？！」
「単なる地球人ではなく、あなた自身の子孫ですよ！」
とマルドゥクは反論した。エンキ・メと共に旅した時、彼の教師となっていた時、マルドゥクは見初めたのである。
「長い寿命以外は、彼らは我々自身なのです！エンキ・メの娘を気に入ったのです。私は彼女と結婚したい！」
とマルドゥクは申し立てた。エンキは妻ニンキに事の次第を説明した。
「考えるに及ばない問題だ。そんなことをしたら、配偶者ともども、決してニビルに行くことができなくなる。ニビルでの王子としての権利を、永久に諦めることになるのだ！」
とエンキは怒鳴った。マルドゥクは苦笑して答えた。
「そんな権利なんて、私にはありませんよ！地球に於いてでさえ、長男としての権利は踏みにじられてきました。これが私の決断です…。王子から地球の王となる！この惑星の主となるんだ！」
「それなら、それで良い」
とエンキは言った。
「そうならば、それは嬉しい！」
とエンキは続けた。

　彼らは花嫁の兄マツシャルを呼び、マルドゥクの望みを伝えた。マツシャルは謙遜しつつも、喜びが満ち溢れた。しかし、エンリルはこの知らせを聞いて激怒した。

「父親が地球人と交わる分には良いだろう。だが、息子が地球人と結婚することは別問題だ。君主の地位を、彼女に授けることになるのだ！」
エンリルは憤慨して、このことをアヌに知らせた。アヌは顧問を招集し、この問題について協議した。そして、結婚は認められるが、ニビルの王子ではなくなること、ニビルには戻れないことを告げた。エンキとマルドゥクがこの言葉を受け入れたので、エンリルも従った。
「ただし、マルドゥクと花嫁は、エディンに留まることはならぬ！」
とエンリルは告げた。エンキはアブズの上の領域、“上の方の海（地中海）”に届く土地を彼らに与えることとし、エンリルもそれに同意した。エリドゥで彼らの結婚式をニンキが手配し、大勢の“文明化された地球人”がエリドゥにやって来た。それと共に、自分たちの指導者を祝うため、ニビルと地球の統一を目撃するためという名目で、イギギも大挙して地球に降りて来た。

……

ひかり：地球人との結婚により、マルドゥクは完全にニビルから追放されたのか…。彼の言う“地球の主”とは？聖書の唯一絶対神？

(3)イギギの反乱
　ラームに残ったイギギは 1/3 であり、200 人のイギギが地球へやって来た。彼らの本当の目的は、地球人の女性を誘拐して交わり、子供を持つことだった。子供も持たない、苦痛と孤独だけの生活から開放されたかったのである。そして、自分たちの指導者の結婚が認められたので、彼らもそのような要求をしに来たのである。シャムガズという者が扇動者だった。

　ヒマラヤ杉の山々にある“着陸場所”に到着すると、地球人の群集にまぎれてエリドゥまで行った。マルドゥクの祝宴が行われた後、彼らは作戦を実行した。そして、“着陸場所”を占拠して要塞化し、抗議の声明を出した。認めなければ、炎で地球を破壊するぞ、と。彼らの司令官マルドゥクは、
「私の行ったことを、彼らから奪うことはできない」
と言った。エンリルは激怒したものの、エンキ、ニンマーと共に、しぶしぶ認めたが、エディンに留まることは認めなかった。エンリルは心の中で、マルドゥクと彼の地球人たちへの陰謀を企んでいた。

……

ひかり：ラームから全イギギがやって来たわけではないのね？
建：アンズがイギギと共に反逆した話と合せて、天使の 1/3 を味方につけたサタンが天界で反逆したことの原型なんだよ。地上に降りてきたから、堕天使とされたのさ。
ひかり：彼らは地球人の群集にまぎれてエリドゥまで行けたぐらいだから、やっぱり地球人とアヌンナキの見た目の区別はできないのね？
建：地球人は男性器の包皮が被っている点を除けばね。

(4)マルドゥクの息子たち

イギギと女性たちは“着陸場所”に隔離された。彼らに子供が生まれ、“ロケット船の子供たち”と呼ばれた。マルドゥクとサルパニトにも子ができた。最初の 2 人の息子たちはアサル、サツと呼ばれた。マルドゥクは、イギギをアブズの上の方の領地に呼び寄せた。“着陸場所”に残った者もいれば、彼らの子孫の中には遠い東の土地、高い山々の土地へ行った者もいた。

……

ひかり：イギギは西はアフリカ、東はヒマラヤまで散って行ったのね？

建：神の子らとハイブリッド人類の女性との間で発生したのがネフィリムの正体だよ。ヘブライ語のネフィリムはシュメール語ではアヌンナキと同意語で、意味は“降りた者たち”。だから、区別するなら神々がアヌンナキで、アヌンナキと地球人女性とのハイブリッドがネフィリムとなる。表現上、ネフィリムは“神の子”の子だから、聖書では“名高い英雄たち”となっている。特に、ヒマラヤにはシャンバラ伝説があるが、これなんかは、彼ら神々とのハイブリッド人類を神々の直系の子孫と見なしているからだろう。その実は、イギギの子孫、ということさ。

(5)アメリカ大陸のカ･インの子孫

エンリルはニヌルタに命じた。

「行け、カ･インの子孫を見つけ、彼らと共にお前自身の領地を準備しておくのだ！」

ニヌルタは地球の反対側に行き、カ･インの子孫を見つけた。彼は、道具の作り方や音楽、金属精錬、筏船の作り方などを教えた。そして、彼らは新しい土地に領地を築き、ツインタワーがある都を建てた。それは、新しい“天と地球を結ぶもの”の山間地ではなかった。

……

ひかり：ニヌルタが南北アメリカ大陸に行って、カ･インの子孫に文明を築かせたわけね？

建：この様子からして、この地域の文明は、いざという時のためにとっておく隠された文明圏、とでも言うべきものかな。

ひかり：ツインタワーって、どんなの？

建：もはや想像するしかないが、きっと、名古屋駅前のツインタワーのようなものかな？今度、神々の誰かに聞いとくよ。

(6)ジウスドラの誕生

ル･マクの配偶者バタナシュはル･マクの父マツシャルの兄弟の娘で、際立って美しく、その美しさにエンキは惹かれた。エンキはマルドゥクに言葉を送った。

「お前の領地にル･マクを呼び寄せるのだ。そこで、地球人によってどのように都が築かれているのか、彼に教えるのだ！」

ル･マクはマルドゥクに呼び出されると、バタナシュをニンマーの土地シュルバクに連れて来た。怒れる地球人から、保護するためである。その後、すぐにエンキがニンマーを訪ねて来た。住居の屋上でバタナシュが入浴していると、エンキが彼女の腰を抱き寄せ、キスし、子宮に精子を注いだ。バタナシュは妊娠した。シュルバクからル･マクへ言葉が送られた。
「エディンへ戻れ！息子が生まれた」
　彼はシュルバクへ戻り、バタナシュは息子を見せた。肌は雪のように白く、髪は羊毛の色で、目は空のようで、その目はキラキラと利発そうに輝いていた。ル･マクは怯え、父マツシャルの下へ急いだ。
「バタナシュに、地球人に見えない子が生まれました。私は非常に困惑しています」
マツシャルはバタナシュのところへやって来て、新生児を見ると、その外観に驚いた。
「イギギの１人が父親か？この子がル･マクの子かどうか､真実を明かすのだ！」
「命に掛けて、父親がイギギではないことを誓います」
とバタナシュは答えた。マツシャルは息子に言った。
「この子は謎だが、その奇妙さ故に、お前への前兆が啓示されている。彼は運命によって、類の無い仕事のために選ばれたのだ。それが何なのかは解らないが、しかるべき時が来たら、解ることだろう！」
当時、地球では苦しみが増していた。
「その子は普通ではないことから、休息がやって来る前兆としよう。彼の名は“休息”にしよう」
とマツシャルは言った。バタナシュは、2 人に息子の秘密は明かさなかった。
「ジウスドラ、“長く明るい人生の日々の彼”としましょう」
と彼女は言った。
　ニンマーはこの子に自分の保護と愛情と知識を授けた。エンキはこの子を非常に可愛がり、アダパの文書を読むことを彼に教えた。聖職者の仕事をどのように遵守して実行するか学んだ。110 番目のシャルに、ジウスドラは生まれた。彼はシュルバクで成長した。彼の時代、苦しみは更に増した。

……

ひかり：またもや、エンキの悪い癖ね…。
建：そのおかげで、今の我々があるんだよ！
ひかり：ジウスドラ＝ノアがエンキと地球人女性の間にできた子だったとはね…。そして、白人の祖。
建：運命と言うべきか、アダパといい、ジウスドラといい、人類にとって重要な出来事に関わる地球人は､エンキが地球人女性と直接交わって生まれている。
ひかり：とすると、イエスも…？ジウスドラの容貌は、旧約偽典とされるエノク書に記載されているのとそっくりね。

“さて、しばらくして後、私の息子マトゥウサレク（マツシャル）に妻を娶り、

〔女は〕息子を生み、その名前をラメク（ル・マク）と呼んだ。正義はあの日まで低くされた。そこで、年頃になった時、これに女を娶り、これに子どもをもうけた。その子が生まれた時、身体は雪よりも白く、バラよりも赤く、髪は真っ白で羊毛のように白く、縮れ毛で、光輝に満ちていた。しかも、眼を開けると、家は太陽のように輝いた。そして、産婆の手を離れると、口を開いて主を祝福した。

そこでラメクは怖れをなして逃げ出し、父マトゥウサレクの下に赴き、言った。

「変わった子が生まれました。人間に似ず、天使たちの子に〔似ているの〕です。（中略）自分の子ではなく天使の子では、と。（中略）だから、どうかお父さん、お願いです。父祖ヘノーク（エノク、エンキ・メ）のところに行って下さい、そして尋ねて下さい」

〔マトゥウサレクは〕私のところに、大地の極にやって来た。（中略）その時、私は答えて言った。

「主は地上の配置を改新されるのであろう。その同じ仕方を私は生子に見たし、そなたに示した。というのは、私の父イアレド（イリド）の世代に、〔人々は〕主の言葉を、天の契約を踏み外した。そして、見よ、〔人々は〕罪を犯し、習慣を踏み外し、女たちと交わり、これとともに罪を犯し、彼女たちから子をなし、そして霊にではなく、肉的なものに似た者らを産む。かくして大いなる怒りと、大洪水が地上に起こるであろう、そして大いなる破滅は 1 年間、続くであろう。しかし、生まれたこの子は生き残るであろう。また彼の 3 人の生子も、地上の死ぬ者らの内で救われるであろう。こうして、そこ〔地上〕における堕落から大地を〔神は〕和らげられるであろう。今こそラメクに言え。義しく、神法にかなった汝の子である。その名をノーエと呼べ」”

建：エノク書はエノクが幻の中で神を見て、“200 人の天使”が天から降り、天上、地上、地下の世界を巡って世界の秘密を知らされる内容を記しているとされるが、まさに原型はこの話だよ。

ひかり：“200 人の天使”とは、さっきの“200 人のイギギ”ね。天から降りてきて禁を犯したから、堕天使か…。そして、後にサタンという概念が…。

建：ジウスドラが生まれた大洪水直前の 110 番目のシャルに因んで、110 番は緊急の電話番号とされたのさ。

(7) 大洪水の前兆

マルドゥクとイギギが地球人女性と結婚したことにより、エンリルは動揺して、心がかき乱された。彼の目には、アヌンナキ・ミッションは堕落したと映った。また、わめき叫ぶ地球人たちの集団、地球人たちの意見表明がうっとうしかった。その時代、疫病やペストが流行り、地球人は打ちひしがれていた。地球人に治療方法を教えたいとニンマーが申し出たが、エンリルは禁じた。地球人に運河と人工池の建造を教え、海から魚や食べ物を入手させるようエンキは進言したが、エンリルは禁じた。

「飢えと疫病で地球人を滅ぼそう！」

とエンリルはエンキに言った。ジウスドラが地球人の代弁者として主エンキの家に行き、助けと救済を求めたが、エンキはエンリルの法に縛られ、何もできなかった。

惑星の異変が、ニビルから観測された。太陽の表面には黒い点が現れ、表面から炎が噴出した。計り知れない理由から、太陽系の天体は不安定な様相だった。地球では 3 シャル、4 シャルと“白い土地”の化粧が観測された。ネルガルとエレシュキガルによって、“白い土地”の雪に奇妙なゴロゴロ鳴る音が記録され、雪氷が滑っているのが観測された。“海の向こうの土地”ではニヌルタが観測機器を設置し、地球の底での揺れに気付いた。エンリルはニビルに警告を発した。ニビルの接近により、地球はその巨大な重力に囚われ、“白い土地”の雪氷が滑り落ち、水の大惨事を引き起こすことを、ニビルは返信した。アヌは、地球とラームから避難するよう命じた。

……

ひかり：異変は太陽に現れたのね？

建：この状況は、ニビルの接近も大きく影響していた。その徴は地球上でも現れていたが、特に太陽の変化が激しかった。黒点の増大と、太陽フレアの活発化だよ。このような太陽の変化は、アダムゥとティアマトのエディン追放後、ニビルが接近した時の変化と類似している。

ひかり：確か、メソポタミアの古文書には、洪水前の（物質的、精神的）荒廃状況を記したものがあったわよね…。

“第 3 シャアトタムがやって来た。人々の姿は飢えのために変わってしまった。（中略）第 6 シャアトタムがやって来た時、人々はその娘を食事のために用意した。子供を食物にしたのだ。1 つの家族が他の家族をむさぼり食った。”

建：ああ。だが、本当に共食いを始めたかどうかは解らないよ。この真相からすると、後に生じた誤解だろうね…。

ひかり：それにしても、神々のエゴは凄まじいわね。だから、ニビルは滅びたわけか…。

建：後に、そのエゴを人類が背負うことになり、人類も存続の危機に直面する。粘土板には、ニビルはしばしば十字で記されていただろ？

ひかり：ということは、まさに人類はニビルとアヌンナキのエゴという十字架を背負わされたわけね。

(8)謎の密使ガルズ

地球では、いつでも脱出できるように準備が整えられた。ある時、“空の二輪戦車”の 1 つから、1 人の白髪のアヌンナキが降り立った。ガルズ、“大いなる知者”が彼の名だった。彼は威厳ある歩みでエンリルに近づき、アヌから封印されたメッセージを手渡した。

「私はガルズ、王と議会の全権密使です」

と彼は言った。エンキとニンマーも召集された。アヌからのメッセージには、王と議会に代わってガルズが話し、彼の言葉はアヌの命令である、と書かれていた。ガルズはニンマーと同じ学校の同級生だったことを明かしたが、ニンマーは思い出せなかった。彼は息子のように若く、彼女は年老いた母親のようであった。ガルズは言った。
「説明は簡単につきます。我々はニビルで冬眠します。その生涯サイクルによって、引き起こされているのです！実に、このことが私の任務の一部で、避難に関する秘密です。ドゥムジがニビルに滞在して以来、ニビルでは戻ってくるアヌンナキを検査しました。すると、彼らはニビルのサイクルに馴染めなくなっており、睡眠は妨げられ、視力は劣り、重力が歩行に重さを加えました。そして、息子は残していった両親よりも老けており、精神的ダメージを受け、死が帰還者たちに訪れました。このことを、私は警告しに来たのです」
　指導者たちは押し黙った。エンリルは怒りに襲われた。
「エンキと地球人によって、我々は主人から召使にされてしまった！」
とエンリルは激白した。
「ニビルでは、“万物の創造主”がなされるままに“宿命”に委ねるべきか、あるいは地球に起こることは“万物の創造主”によって考えられたもので、我々はその密使をうっかり見落としているのか、そのことについて議論を続けてください」
とガルズは言った。そして
「ニビルからの密命です。あなたがた 3 人は地球に残る。ニビルに帰ったら、死ぬだけです。“空の二輪戦車”で地球の周りを回り、災害を辛抱強くやり過ごすのです。他のアヌンナキは、立ち去るか、災害を辛抱強く待つのかを選ばせます。地球人と結婚したイギギは、出発か配偶者かどちらかを選ばなければなりません。サルパニトを含め、地球人は誰一人として、ニビルに来ることは許されません。留まって何が起こるのか見届ける者は、“空の二輪戦車”に避難するのです。その他の者たちについては、ただちにニビルへ出発する準備を整えなければなりません」
とガルズはニビルの指示を秘密裏に指導者たちに明かした。

……

ひかり：謎のガルズによって、生涯サイクルの秘密が明かされたわけか…。
建：大災害に備え、地球のアヌンナキとイギギたちはどうすべきか、彼によって指示されたのさ。

(9) 自らの運命の決定
　エンリルはニブル･キで、アヌンナキとイギギの司令官たちによる会議を招集し、事態を話した。
「立ち去ることを望む者は全員、準備された“空の船”でニビルに退避する。だが、地球人の配偶者がいる者は、配偶者を置いて立ち去らねばならぬ。配偶者や子供に愛着のあるイギギは、彼らを地球の一番高い峯に逃れさせよ！そして、留まることを望む者たちは、“天の船”で地球の空中に残ることになる」

とエンリルは言った。そして
「司令官として、地球の“宿命”を目撃するために、私は留まる最初の者となろう！他の者たちは、自分で選択すれば良い！」
と続けた。
「私は父と共に留まる」
とニヌルタが言った。
「大洪水を月で待ちたい」
とナンナルは奇妙な願いをした。イシュクルは父と共に留まることを決意した。他、ウツとイルニンニ、エンキとニンキ、マルドゥク、ネルガル、ギビル、ニナガル、ニンギシュジッダ、ドゥムジも留まることを決意した。そして、ニンマーは
「私が創造した地球人を、私は見捨てません！」
それにエンキが続いた。
「驚くべき“生き物”は我々によって創造された。我々によって守られるべきだ！」
と叫んだ。しかしエンリルは、事ある毎にエンキが逆らい、婚外交渉でアダパなどをもうけ、彼を“天”へ連れて行ってニビルの叡智を授けたこと、エンキの息子マルドゥクのせいでイギギが地球人女性と結婚してしまったことなどを非難し、
「もう十分だ！これ以上、忌まわしい行為を続けさせはせぬ！」
と腹立たしげに宣言した。そして、成り行きを妨げることなく為るがままにしておくことを、他のアヌンナキたちに宣誓するよう、要求した。最初にニヌルタが、後にエンリルの息子たちが続き、それからネルガル、エンキの他の息子たちが続いた。ニンマーも涙ながらに誓った。エンリルはエンキを凝視した。
「何故、私を誓いで縛ろうとするのだ？私は洪水を止めることはできないし、地球人の群集を守ることはできない。エンリルに、永久に責任をとってもらおう」
とエンキは言った。

……

ひかり：エンキとエンリルの対立はこれほど激しいのね。
建：特に、エンリルのエゴはね。マルドゥクと同じぐらい…。いや、むしろニビルの法に照らし合わせれば、エンリルの言っていることが正当だから、エンキのエゴか…。

(10)遺伝子の採取と保管
　エンリルは命令を下し、それぞれがそれぞれの宿命に従った。海の向こうの山間地にはニヌルタ、“白い土地”にはネルガルとエレシュキガルが観測のために配置され、地球人たちからの襲撃の警備をイシュクルにあたらせた。エンリルはエンキに言った。
「万が一にも助かった時のために、これまでに起こったことをすべてタブレットに記録し、地球の奥深くに埋めておこう」

エンキは賛同し、“メ”とその他のタブレットを黄金の箱にしまい、シッパールの地中深く埋めた。そして、エンキは密かにニンマーに話しかけた。
「エンリルは地球人だけにこだわっているので、他の生物に気が向いていない。絶滅から救うため、2 人で生命の種子を保存しよう。彼らの生命エッセンスを保管のために抽出しよう！」
ニンマーは、その栄えある任務に同意した。ニンマーはシュルバクで何人かの助手の手を借りて、エンキはアブズでニンギシュジッダの助けを借りて、“生命の家”で男性と女性のエッセンスと生命の卵を集めた。それぞれの種類で 2 個ずつ、シュルバクとアブズに 2 個ずつ保存した。それから、ゴロゴロという音が不吉だ、という知らせがニヌルタから、“白い土地”が揺れているという知らせがネルガルとエレシュキガルから発せられた。

……

ひかり：タブレットを保管した黄金の箱が、契約の箱の原型？
建：だろうね。
ひかり：秘密裏に地球上の生物種を救ったのは、人類を創造したエンキとニンマー、ニンギシュジッダだったんだ。

11：大洪水の記録－ノアの箱舟の真実
(1)ガルズからのお告げと“万物の創造主”の御意思
　シッパールにすべてのアヌンナキが集まり、“大洪水の日”を待ち受けた。ある日、エンキが夢物語を見た。天空のように明るく輝く 1 人の男が現れた。それは、白い髪のガルズであった。彼は右手に尖筆を、左手にラピスラズリの石板を持っていた。彼はエンキのベッドに近づいて来て、こう言った。
「あなたのエンリルに対する非難は不当である。あの決定は、彼ではなく“運命”が定めたものである。さあ、“宿命”を手に取りなさい。地球は地球人に受け継がれるのだ！ジウスドラを呼び寄せ、誓いを破ることなく、彼に迫り来る大災害について明かせ。押し寄せる水に耐えられる船を造るよう命じるのだ。この石板に描かれたものと似たものを。その船で、彼とその親族を救うのだ。そして、他の動植物も、有益なものすべての種子も持たせるのだ。それが、“万物の創造主”の御意思である！」
ガルズは尖筆で石板に絵を描き、エンキのベッドの横に置いた。そして、その光景が薄れていくにつれ、エンキは目覚めた。
「この意味は何なのか、どんな前兆が隠されているのか？」
驚いたことに、ベッドの横に、その石板が実際に置かれていた！そこには、船の設計図が描かれていた。エンキは自分の密使たちを送り出し、ガルズを探させた。しかし、ガルズは見つからなかった。

……

ひかり：えぇっ～、ノアの箱舟の設計図は、ガルズがエンキに手渡したの？
建：話の上ではそうなっているが、どうかな…。ガルズという人物を登場させ

ることにより、神々でさえ、宇宙創造の“万物の創造主”の御意思＝宇宙の法則・宿命には逆らえない、ということを暗示しているのかもしれないよ。だとしたら、船の設計図は、エンキ自身が描いたということになる。“メ”をすべて持っているのはエンキだから、それも当然だけどね。

ひかり：この夢物語が、後の聖書に於ける預言者の夢物語や幻視の原型となっていると考えれば、辻褄が合うわ。むしろ、後世には神々が直接手を下すのではなく、このような“お告げ”の形式で人類を導くという方法を採るために、このような話が創られた、とも考えられるわ。

(2) ジウスドラへの警告

その夜、ジウスドラが寝ている葦の小屋へエンキはこっそり行った。誓いを破ることなく、エンキは葦の壁に向かって言った。

「起きろ、起きるのだ！」

ジウスドラが目覚めると、更に続けた。

「葦の小屋よ、私の指示に従うのだ！あらゆる都市に大災害が襲い掛かる。それは、人類とその子孫の破滅となる。さあ、私の言葉に耳を傾けるのだ。家を捨て、船を造れ。財産を一蹴し、命を守るのだ！その設計図は、石板に記されている。私はそれを、小屋の側に置いておく。船は隅々までしっかり覆うのだ。船は様々な方向に回転できるようにし、水の殺到を乗り切るのだ！7 日間で船を造り、その中へ親類を集めよ。食糧と飲み水を山積みにし、家畜も連れて行くのだ。その後、指定された日に、お前に合図が送られる。私が任命した船頭が、お前のところへやって来る。その日、お前たちは船に乗り込み、大洪水に備えるのだ。恐れることはない。その船頭が、安全な場所へお前たちを導く！」

ジウスドラはエンキの声に跪き、

「我が主よ、お顔を見せて下さい！」

と叫んだ。エンキは

「私はお前にではなく、葦の小屋に対して喋ったのだ。エンリルの決定により立てた誓いに、私は縛られている。もし、お前が私の顔を見たら、お前は他の者たちと同じように死ぬことになる！さあ、葦の小屋よ、私の言葉に心を留めるのだ！その船の目的、アヌンナキのことは黙っておくのだ。尋ねられたら、こう言うのだ。『主エンリルが主エンキに対してご立腹になられた。私はエンキ様のお住まいへ航海して行く。そうすることにより、エンリル様のお怒りが収まるかもしれない』と」

声が聞こえなくなると、ジウスドラは壁の後ろへ回った。そこには、石板が置かれており、船の設計図が描かれていた。彼は、自分が聞いたことを理解した。そして、エンキから言われたように船を造り、5 日間で完成した。集まってきた人たちに対して、主エンキのお住まいに行きたい人がいたら一緒に連れて行こう、と告げたが、応じたのは何人かの職人だけだった。

……

ひかり：神の姿が見えない大元は、これだったのね。

(3)船頭の到着

6 日目に、“大いなる水の主”ニナガルがやって来た。彼はエンキの息子で、航海士として選ばれた。彼はヒマラヤ杉の箱を持っていた。そこには、エンキ、ニンマー、ニンギシュジッダによって集められた生物の生命エッセンスと卵が入っていた。

「エンリルの憤怒から隠し、地球が望むなら、命を復活させるために！」

とニナガルはジウスドラに説明した。こうして、すべての獣たちのつがいが船に隠された。大洪水が待ち受けられたのは 7 日目、120 番目のシャルだった。大洪水が目前となったのは、ジウスドラが 10 シャル目の歳のことだった。そして、崩壊が迫って来たのは、ライオンの星座の位置であった。

……

ひかり：エンキの息子ニナガルがジウスドラを先導したのね？

建：大洪水は 13,000 年ほど前、ジウスドラが 36,000 歳の時、地球が黄道 12 星座の獅子座の位置にある時だった。

(4)大洪水

大洪水の数日前、地球はゴロゴロと鳴り、天ではニビルが燃えるように赤く輝いた。そして、日中に暗闇が広がり、地球はニビルの重力に揺り動かされた。夜明けの輝きの中、水平線から暗雲が湧き起こり、朝の光は死の影に覆われたようだった。それから雷鳴が轟き、稲妻が空を照らした。

「出発だ、出発だ！」

とウツが合図を送った。“天の船”が出発し、激しい閃光がニナガルによって目撃された。

「ハッチを閉じろ！」

とニナガルがジウスドラに命令した。その後、何千もの雷に匹敵する轟音と共に、南極の氷床が滑り落ちた。と同時に空に届かんばかりの高波が発生し、大地を次々と飲み込んで行った。そして、アブズ、エディンへと達し、シュルバクのジウスドラの船も飲み込まれた。

その日の終わりまでに、水は大地のほとんどを飲み込んだ。地球の周りを周回していたアヌンナキは、その様子を見て呆然とした。ニンマーとイルニンニは嘆き、悲しんだ。その猛威の光景に、アヌンナキたちは挫かれていた。その後、天の水門が開き、空から豪雨が解き放たれた。7 日間にわたって、上からの水と南極からの水が混ぜ合わされた。それから水の壁は限界に達し、猛攻撃は止んだ。空からの雨は、更に 40 昼夜続いた。高くそびえていた山々は、海に浮かんだ島々のようだった。水は行ったり来たりしながら窪地に集められ、次第に水位は低くなった。

40 日後に、ニナガルが船をアルラタの双子山（アララト山）に向け、帆を張り、船を導いた。ジウスドラは待ちきれなくなり、乾いた土地を調べるため、鳥を放った。最初のツバメは帰って来た。次のカラスも帰って来た。最後に鳩を送り出すと、小枝をくわえて戻って来た。それにより、乾いた土地が現れた

ことを知った。

……

ひかり：いわゆるノアの大洪水は、ニビルの巨大な重力で南極の氷床が崩れ落ちて発生した大津波が原因だったのか…。

建：それだけではない。ニビルの接近により気候も大変動し、とてつもない豪雨が降り注いだ。これより以前は小惑星帯からの隕石が降り注ぎ、更に太古の昔には、ニビルの衛星がティアマトに衝突して地球が生成した。つまり、ニビルの長楕円周回軌道は、太陽系の惑星に対して、とてつもない影響を及ぼすのさ。

ひかり：じゃ、最近の接近は？

建：紀元 0 年前後、ベツレヘムの星として天空に輝いた。その時にイエスが誕生し、最接近の際に処刑され、天変地異が起きた。それは、聖書にも書かれているだろ？しかし、その後、とうとうニビル人のエゴによって破壊してしまったよ。地球からも金が運ばれなくなったしね。

ひかり：カラスの次が鳩で、それが平和の訪れだとは暗示的よね。

(5)エンリルの赦し

　それから数日後、船は双子山の岩に停止した。

「我々は救済の山にいるのだ！」

とニナガルが言った。ジウスドラはハッチを開けた。外は晴れて穏やかで、彼らは外に出た。ジウスドラは

「主エンキを褒め称えよ！主に感謝せよ！」

と言った。彼は息子たちと石を集め、祭壇を築いて灯りをともし、香を焚きしめ、雌の子羊を生贄として捧げた。その時、地球の状況を把握するために、エンリルとエンキが空から“つむじ風（ヘリコプターに似た空中輸送機）”に乗って、アララト山に降りて来た。エンリルは、焚き火と肉が焼ける仄かな香りに当惑した。

「大洪水を生き延びた人間がいるのか！」

エンキと共にその方角に行ってみると、船、ジウスドラ、祭壇、そしてニナガルの姿が見えた。ニナガルを見つけたエンリルの激高は、留まるところを知らなかった。

「地球人はすべて滅ぼすはずだった！」

エンリルはエンキに詰め寄り、素手で殴り殺すのも辞さないほどの構えだったが、

「彼はジウスドラ、私の息子だ！」

とエンキは抗議した。

「お前、誓いを破ったな？！」

「私はジウスドラにではなく、葦の壁に喋ったのだ。誓いは破っていない！」

と言い、エンキはエンリルにガルズの夢の話をした。

　それから、ニナガルの知らせでニヌルタとニンマーが降りて来た。

「人類の生存は、“万物の創造主”の御意思に違いありません」

とニヌルタが言った。ニンマーはアヌからの贈り物である水晶のネックレスに、
「人類の絶滅を二度と企てたりしません！」
と誓った。エンリルは態度を軟化させ、ジウスドラと彼の配偶者エムザラの手を取り、祝福した。
「実り豊かで増殖せよ！そして、再び地球を満たすのだ！」
こうして、“昔の時代”は終わりを告げた。

……

ひかり：これで、ようやく聖書の真意が理解できたわ。主が自ら人類を創造したものの、人類に対して嫌気がさして洪水で滅ぼそうとしたけど、洪水後は増殖することを認めた。これを１人でやっていたら、完全な精神分裂よ！

建：まあまあ…。人類を快く思わない怖い神の原型は、エンリルだということが良く解るだろ？それに対して、エンキは常に人類に手を差し伸べた。

ひかり：この場面は、祭壇での燔祭の原型でもあるのね。

建：このようにエンリルは人類にとって怖い神だから、外宮の風宮と内宮の風日祈宮の両方で祀られた。エンリルのシンボルは風だからね。

(6)火星と月の荒廃

大洪水後の地球はほとんど泥に埋まり、かつての都市は完全に消滅していた。しかし、ヒマラヤ杉の山々では、巨大なプラットホームが太陽光にきらめいていた。その“着陸場所”に、“つむじ風”や二輪戦車が次々に着陸した。ラームのマルドゥクと月のナンナルにも、帰還の命令が出された。
「ラームはニビルの通行により荒廃し、大気は吸い出され、水は蒸発し、砂嵐の場所と化しています」
とマルドゥクが報告した。
「月は単独では生命を維持できず、鷲のマスクをしてのみ、滞在が可能です。月の様相を見れば、かつてティアマトの軍団のリーダーだったことを、思い起こさずにはいられません。月は地球の運命と一心同体なのです！」
とナンナルが報告した。

……

ひかり：大洪水時のニビルの接近により、火星の大気と水は無くなり、月も死の世界となったのね。ニビルの存在無くして、太陽系の秘密、太陽系の創世神話の秘密を解き明かすことはできないわ。

建：ニビルは何度も周期的にやって来ており、その重力場や電磁場、衛星が恐竜の絶滅やノアの時代の大洪水のような大災害を引き起こす原因になった。しかし、この接近は、必ずしも恐れられていただけではない。アッカドには豊富な水がもたらされ、苦しみは洗い流され、混乱はほぐされ、神々は平和を与えた。古代メソポタミアやヘブライの書物にある“天の王”の再来の期待は、実際の経験に基づいているのさ。その経験とは、王の星＝神々の星ニビルが 3,600 年周期で地球の近くに戻って来たのを、実際に目撃したからだ

よ。
ひかり：ナンナルも月に惹かれているわね？
建：だから、後にシンボルはエンキと同じ三日月となった。こういうところが、カバラの解釈を難しくしているね。元の話を知っていないと。

(7) 地球再興の準備

エンリルたちは、封印された“創造の部屋”を調べた。そこは、プラットホーム横の、遠く離れた時代の縦坑だった。塞いでいた石をどけて入ると、閃緑岩の箱があり、彼らは銅の鍵で封印を開けた。中には水晶の容器があり、ニビルの穀物の種子があった。外に出ると、エンリルはニヌルタに種子を渡し、
「行け！山腹の台地で、ニビルの穀物にもう一度パンを供給させるのだ！」
と命じた。ヒマラヤ杉の山々で、ニヌルタは滝をせき止め、台地を造成し、ジウスドラの長男セムに作物の育て方を教えた。

イシュクル（アダド）には、
「水が引いた場所に行って、残っている実の生る木を見つけてくるのだ！」
と命じた。彼らが最初に見つけたのは、ニンマーがニビルから持って来た万能薬の木、ブドウの木であった！万能薬として名高かったその果汁を、ジウスドラは一口飲んだ。一口、また一口と彼は飲まれてしまい、酔って寝込んでしまった。

エンキは贈り物を差し出した。彼はニナガルが持っていた箱の正体を明かし、地球を生き物で満たすことを提案した。エンキはドゥムジに牧羊の仕事を与え、ジウスドラの次男ハムがそれを手伝った。それから、エンキは自分たちの領地だったアフリカ大陸に目を向けた。ニナガルと共に、強力な水の合流地点で、山にダムを建設した。そして、激しい滝から湖に水路を引き、湖に水が溜まるようにした。それから、アブズと“上の方の海（地中海）”の間の土地を、マルドゥクと共に調査した。流れの中ほどの、川の水が滝となって落ちる場所に、水中から島を引き上げ、その奥底に対を成す洞窟を掘り出し、石で水門を作った。それから、岩に 2 本の水路を切り出し、2 本の峡谷を形成した。こうして、高地から流れてくる水量を調整できるようにした。その“洞窟の島”、アブの島から、川の曲がりくねった谷を水中から引き上げた。エンキはドゥムジと牧夫のために、“2 つの峡谷の土地（ナイル川に沿った地域）”に居住地を造った。

……

ひかり：ニンマーの万能薬の木はブドウで、その飲み物はワインだったのね！道理で、新約にはブドウ園やワインの例え話がよく登場するわけよ。
建：特に最後の晩餐の場面では、“神の国で新たに飲むその日まで、ブドウの実から作ったものを飲むことは決してあるまい”とイエスは言った。これは、十字架上の死後、ニビルの高度医療と万能薬により“復活”すること、そして“天の船”か二輪戦車で昇天した後に万能薬を飲むことを意味した。つまり、“神の国”とは、死後の世界の天国と昇天後の天国のこと、すなわちニビルを指す。しかし、結局、ニビルは無くなってしまったので、ニビルには

行かなかったけどね。
ひかり：ノアの息子セム、ハム、ヤフェトも実在したのね？
建：ああ。だから、聖書はある意味、歴史書と言える。ただし、多神教の神々が唯一絶対神に変えられてしまったけどね。
ひかり：エンキがニナガルと共にダムを建設した水の合流地点は…
建：ザンベジ川とカンド（クアンド）川の合流地点、カズングラ周辺さ。その先には世界三大瀑布の１つ、ビクトリア瀑布があり、これが“激しい滝”なんだよ。ナイル川の“洞窟の島”－アブの島はアブハメッドという地名の元になった第４滝から第６滝周辺で、高地から流れてくる水量を調整できるようにした２本の峡谷は、白ナイルと青ナイルだよ。
ひかり：えぇっ～！そうすると、ビクトリア瀑布周辺やナイル川の流れは、エンキと息子たちによって造られた人工のもの、てこと？
建：うん。ピラミッドがオリオン座の三ツ星の並びに対応しているのに対して、ナイルの流れは天の川の流れに対応している。このような事実から、エジプト人はナイル川の水位が上昇する地点にプタハが防護壁を建てることによって、洪水の跡からエジプトの地を引き上げたと信じた。古代エジプト語では、エジプトの地は“持ち上がった地”で、太古に本当に偉大な神がやって来て、彼らの土地が水と泥の下に横たわっているのを見つけた、とある。この偉大な神＝プタハ＝エンキがこの沈んだ土地を干拓し、文字通り、エジプトを水と泥の下から引き上げたのさ。

(8)新たなる金の採掘場

ニビルの接近は地球とラームに多大な影響を及ぼした。しかし、ニビルでも被害は甚大だった。金粉の大気シールドが破れ、大気が減少していたのである。そのため、更なる金の補充が必要となった。エンキはアブズに何度も調査しに行ったが、金鉱はすべて水によって埋まっていた。そして、原始的労働者も泥と化していた。地球とニビルには絶望が広がった。しかし、海の向こうの山間地を旅していたニヌルタから、驚くべき知らせが届いた。殺到した水が山腹に深い切れ込みを入れ、そこから無数の金が塊となって下の川に落下し、採掘することなく引き上げられる、と。エンリルとエンキは即座に飛んで行き、間違いないことを確認した。
「ニビルがもたらしたことによって、ニビルが救われるとは…。“万物の創造主”の目に見えない力が、ニビルに生きる機会を与えた！」
とエンリルは喜んだ。

誰が金塊を集められるか、どうやってニビルへ運ぶか、指導者たちは尋ねあった。最初の問題には、ニヌルタが答えを持っていた。海の向こう側の山間地には、カ･インの子孫が筏で助かっていた。彼らのリーダーは４人の兄弟と４人の姉妹で、金属の扱い方を知っていた。そして、ニヌルタを自分たちの祖先の守護者として思い出し、“偉大な守護者”と呼んでいた。エンリルは、もう怒っていなかった。
「“万物の創造主”の御意思なのだ。さあ、新しい“天の二輪戦車の場所”を設

置し、そこからニビルへ金を送ろう！」
“着陸場所”のすぐ近く、荒れ果てた半島に、適した平地を見つけた。それは静まり返った湖のように平らで、白い山々に囲まれていた。

……

建：中南米で金が重要視されたのは、こういうことなんだよ。
ひかり：生き残ったカ･インの子孫が、中南米文明の基礎を造ったのね。その指導者はニヌルタ。
建：更に、その子孫は環太平洋一帯に広がり、一大王国を築いた。

(9) ピラミッド建造

選ばれた半島に、天の“アヌとエンリルの道”が反映された。新しい“二輪戦車の場所”を正確にその境界線上に構えることとなった。ヒマラヤ杉の山々にある“着陸場所”と“二輪戦車の場所”の真ん中が“宇宙飛行管制センター”とされた。そこに相応しい山が選ばれ、“道を示す山”、モリヤと名付けられた。石のプラットホームをそこに建造するよう、エンリルは指示した。その中央に、巨大な岩が内側も外側も刻まれた、新しい“天と地球を結ぶもの”を収容するために、それは造られた。その地球の新しい“臍”が、大洪水前のニブル･キの役割を引き継いだ。

アルラタの双子山が北の境界線として固定された。着陸ルートの境界、上昇と下降の境界を定めるため、他に 2 組の双子山が必要だった。1 組は半島の南、山々の場所で接する双子の峰をエンリルは選び、南の境界線とした。もう 1 組の双子山が必要とされる場所には、何も無かった。
「人工的な峰を造れば良い！」
とニンギシュジッダが提案した。彼はタブレットの上に、側面が滑らかで、天に向かってそびえる峰を描いて見せた。
「可能ならば、そうすれば良い。それらを灯台としても機能させよう！」
とエンリルは賛成した。

川が流れる谷の北、平坦地にニンギシュジッダは縮小模型を建てた。上昇角度と 4 つの平滑な側面で、完全に仕上げた。その隣により大きな峰を設置し、その四面を地球の四隅にセットした。アヌンナキによって、電力の道具で石が切り出され、組み立てられた。ニンギシュジッダは、その中に通路や振動する水晶のための部屋を設計した。そして、最後の冠石を置くために、指導者たちが招待された。その頂上石は、エンキの息子ギビルによって、金と銀の合金エレクトラムで造られた。それは太陽光線を水平線に反射し、夜には炎の柱のようだった。すべての水晶の力を一条のビームとして天空に集めていた。

完成して準備万端となると、指導者たちはその“偉大な双子山”に入り、驚嘆した。彼らはそれをエクル、“山のような家”と名付けた。それは、天空への灯台であり、アヌンナキが大洪水を生き残り、永久に繁栄することを宣言していた。

ここから東へ、太陽が指定された日に昇る場所へ二輪戦車は上昇して行き、そこへ向けて南西に、太陽が指定された日に沈む場所へ、それらは降下していく。エンリルは自らの手で、ニビルの水晶を活性化させた。内部では不気味な光が明滅し始め、魅惑的なハミング音が静寂を破った。外では冠石が燦然と輝きだし、大勢のアヌンナキは歓声をあげた。ニンマーは詩を朗読した。そして、エンキはエンリルに提案した。
「この驚くべきものは、いつ、誰によって造られたのか？双子山の側にモニュメントを造り、“ライオンの年”を告知させよう。その顔を設計者ニンギシュジッダの姿にしよう。そして、正確に“天の二輪戦車の場所”の方を見つめさせよう。未来の世代に目的を明らかにするために！」
エンリルは
「“天の二輪戦車の場所”はウツを司令官とする。凝視するライオンは正確に東を向かせ、ニンギシュジッダの姿にしよう！」
と言った。

……

ひかり：モリヤ山は宇宙飛行管制センターで、後のエルサレムの神殿は“天と地球を結ぶもの”を収容する場所だったのね！主が降臨する際、稲妻と雷鳴が轟いたけど、これは宇宙船のエンジンから噴出される光と轟音だったわけだ…。そして、地球の臍としての役割だから、最重要の場所、つまり聖地ね。

建：神殿の原型とは、神々の乗り物が発着する場所、神々が降臨する場所なのさ。“着陸場所”はシダー山脈にあるバアルベクで、現在のカデッシュの南付近、いわゆるカナンの地付近だよ。

ひかり：アルラタの双子山＝アララト山とピラミッドも、宇宙船の離発着の目印とされたのね。そして、ピラミッドはアヌンナキ＝神々が永久に繁栄する象徴だから、“神の宮”とされた。そのピラミッドの設計者は、またまた天才科学者ニンギシュジッダというわけか…。

建：しかも、電力の道具で石が切り出されて組み立てられ、現在は存在しない冠石は金と銀の合金エレクトラムで造られ、内部にはニビルのハイテク機器が満載されていたんだよ。

ひかり：けど、この時点ではピラミッドは“双子山”なのよね？とすると、規模が同じぐらいのクフ（第１ピラミッド）とカウラー（第２ピラミッド）しか無かった、てこと？

建：だね。この時点では内部にハイテク機器が満載されているので、そのような場所に、“死と復活”を象徴する石棺があろうはずもない。これらのハイテク機器がすべて取り払われてしまった後、カバラの象徴として石棺が入れられ、第３ピラミッドが建造されたんだろうね、未来を預言するために。

ひかり：本当に双子山だったの？

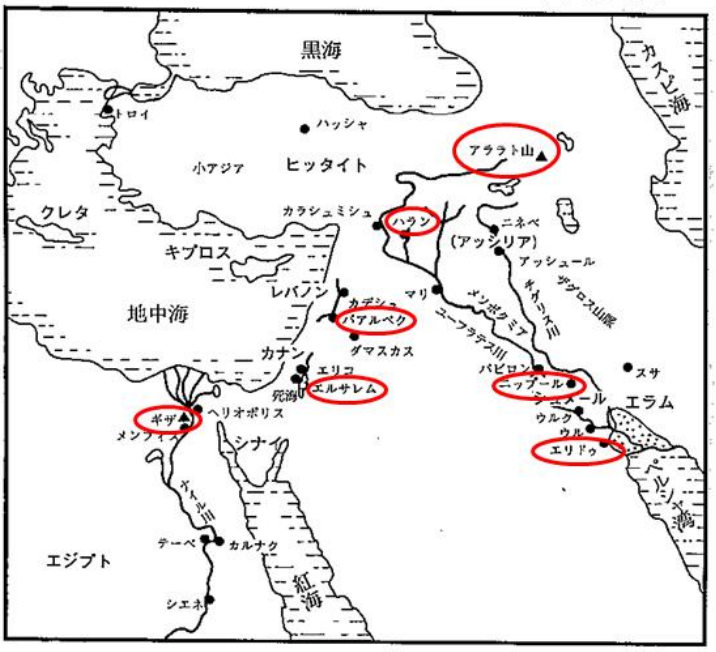
建：ニヌルタの“黒い空の鳥”としての象徴図が残っているよ。これを見ると、ニヌルタは翼の生えた蛇のようでもある。ニヌルタは中南米でカ・インの子孫らに金属精錬などを教え、“偉大な守護者”と彼らから呼ばれていた。後

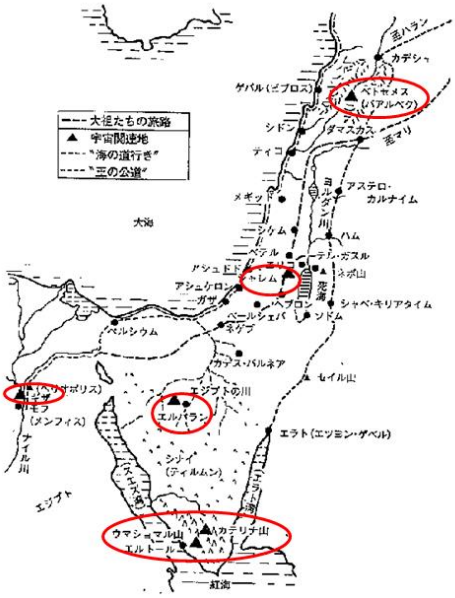
に、ニンギシュジッダもアメリカ大陸に渡り、ケツァルコアトル、“翼の生えた蛇”と呼ばれた。ニンギシュジッダは知恵の神であり、ピラミッドを造った張本人。彼らは、ニンギシュジッダを再来した“偉大な守護者”と勘違いしたのかもしれないね。

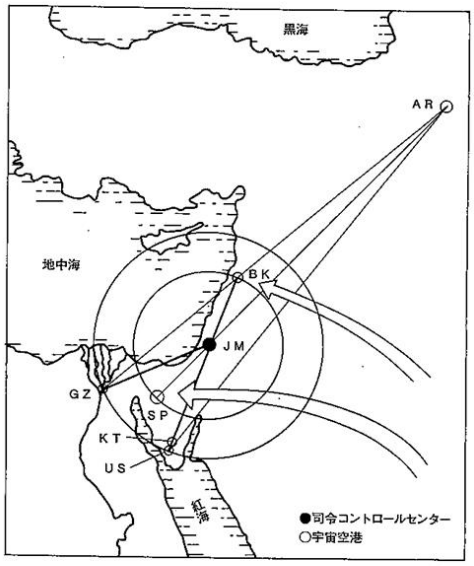
ひかり：スフィンクスの顔は、設計者のニンギシュジッダだったとは驚きね！
建：アララトやピラミッドの位置関係を図示しておくよ。そうしないと、慣れない土地のことは、良く解らないからね。

＊北の境界線はアララト山（AR)、南の境界線はシナイ半島の南、山々の場所で接する双子の峰だが、これはカテリナ山（KT）とウマショマル山（US）である。この双子の峰と“着陸場所”バアルベク（ベトセメス、BK）を結ぶ線上のほぼ中心に“宇宙飛行管制センター”エルサレム（シャレム、JM）が位置する。また、アララト山とバアルベクを結ぶ延長上にギザのピラミッド（GZ）が位置する。そして、ギザから真東の方向に、“天の二輪戦車の場所”であるシナイ半島のエル・パラン（SP）がある。その宇宙空港の近くには、“エジプト川”なる川があるが、これはこの場所を示唆するもの（ピラミッドとスフィンクス）がエジプトにあることを暗示しているのであろう。

古代メソポタミア・エジプト周辺図







エジプト・シナイ半島周辺図。大祖たちの旅の行程、宇宙関連地、王の公道、海の道行きが示されている。

(10)ニンマーの称号

岩盤からライオンを切り出して形作る仕事が進行していると、マルドゥクがエンキに不満を訴えた。

「地球全体を支配することを、約束して下さったではありませんか！しかし、指揮権と栄光は他の者たちに与えられ、私の任務は何も無いままです。あの技巧を凝らした山は、かつての私の領地に置かれていますから、ライオンは私の姿であるべきです！」

この言葉にニンギシュジッダは怒り、他のエンキの息子たちも不快に思った。そして、領地を要求するマルドゥクの声に、ニヌルタと彼の兄弟たちも刺激され、叫んだ。

「誰もが自分たちの土地と献身的な地球人を求めているのだ！」

怒号が飛び交う中、

「祝賀を争いの場にしてはなりません！地球はまだ混乱状態にあり、アヌンナキも地球人も僅かな生存者しかいないのです。マルドゥクにニンギシュジッダの名誉を奪わせてはなりませんが、マルドゥクの言うことも聞いてあげましょう」

とニンマーが仲裁した。

「平和を保つため、我々の間で居住地を引き離すべきだ」

とエンリルが言った。シナイ半島を中立地帯とし、そこを仲介者ニンマーに割り当てた。ティルムン、“ミサイルの地”とその地は名付けられた。そこから東がエンリルと彼の子孫に割り当てられた。ジウスドラの 2 人の息子セムとヤフェトも、彼らと共にそこに住まわされた。アブズを含む広大な大地は、エンキとその一族に割り当てられ、ジウスドラの次男ハムもそこに住むことになった。

「マルドゥクを彼らの土地の主としよう」
とエンキが提案した。
「あなたが望むなら、そうすれば良い」
とエンリルは言った。ティルムンの南に、ニヌルタが母ニンマーのために住まいを建てた。そこはナツメヤシが生い茂る谷であり、ニヌルタは山の頂上を段々畑にして、母のために香しい庭木を植えた。こうしてすべてが完成すると、地球上のすべての居留地に合図が送られた。“つむじ風”が山岳から海を渡って金塊を運んできた。そして、“天の二輪戦車の場所”からその金塊はニビルへと打ち上げられた。その記念すべき日に、エンリルとエンキは話をして決めた。
「仲介者ニンマーに新しい称号を与え、敬意を表そう！ニンフルサグ、“山の頂上の女主人”と名付けよう！」
満場一致の拍手で、ニンマーに敬意が表された。
「ニンフルサグを称えよ！地球の仲介者に！」
アヌンナキは声を揃えて褒め称えた。

……

ひかり：マルドゥクって、本当に身勝手なのね！
建：父エンキ以外のアヌンナキたちからは嫌悪されているね。シナイ半島が、エンリル一族とエンキ一族の緩衝地帯だ。ことごとく反発するマルドゥクのせいで…。
ひかり：そこの女主人がニンフルサグ、“山の頂上の女主人”なら、昔から“山の神”が妻や女性を暗示していたことは納得よね。
建：正統ユダヤ民族はセム系と言われるけど、その理由は、まずはセムが中東に住まわされたからさ。

12：最初の古代地球大戦争ー終戦協定の行方
(1)マルドゥクの息子同士の戦い（エジプト神話の真相）
　大洪水後の最初のシャルの間、ニンフルサグは何とか皆を仲裁していた。ニビルへの金の供給は、野心と権力争いに影響を及ぼしたのである。地球はゆっくりと生命が戻り、増えていった。ところが、平和的な休戦は、マルドゥクとニヌルタでもなく、エンキとエンリル一族でもなく、イギギによって損なわれた。マルドゥクとサルパニト、そして息子たちがラームで大洪水を回避していた時、2 人の息子アサル（オシリス）とサツ（セト）が、イギギの指導者シャムガズの 2 人の娘に好意を寄せ、姉妹を娶り、地球に戻った。アサルの配偶者はアスタ（イシス）、サツの配偶者はネバト（ネフティス）であった。アサルはマルドゥクと共にアフリカに住むことを選んだ。サツはイギギが住む“着陸場所”の近くに、シャムガズと共に自分の家を構えた。かつてのラームの指導者シャムガズは、地球での領地について気にかけていた。イギギはどこの支配者になるのだ、アサルだけが肥沃な土地を継承するのではないか、と。彼は他のイギギを扇動し、そのことをネバトとサツに毎日話した。継承権をサツに握らせる方法を、彼とネバトは企んだ。

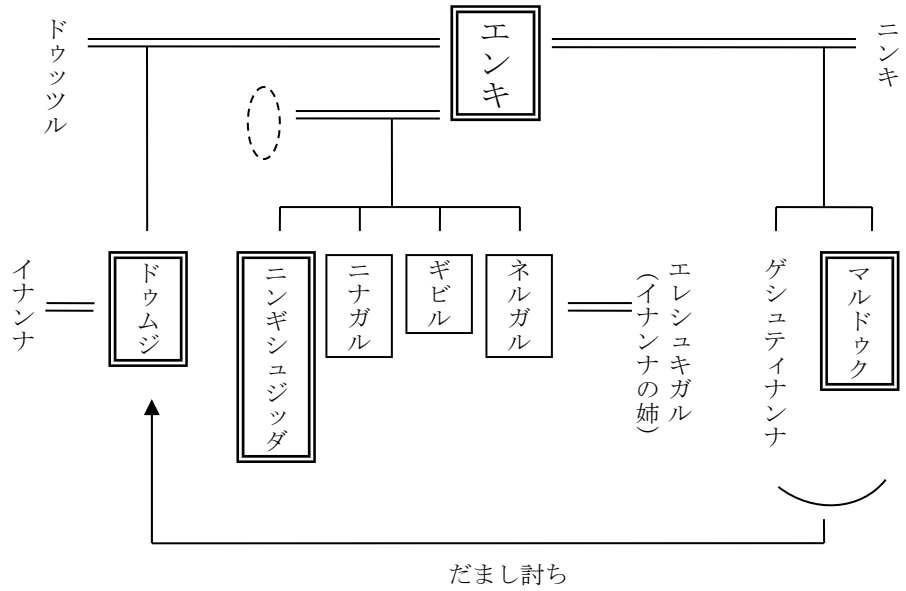
ある日、彼らは祝宴を催し、イギギとアヌンナキを招待した。ネバトは着飾り、食事を用意し、アサルのために歌を歌った。サツは焼いた肉を切り分けた。シャムガズはワインを勧めた。その後、アサルは酔いつぶれ、奥の部屋に運ばれた。そして、棺の中に入れられて密封され、その棺は海に投げ込まれた。その知らせがアスタに届くと、彼女はマルドゥクに泣き叫んで訴えた。
「アサルは残忍に殺されました！棺をすぐに見つけなければなりません！」
棺はアフリカの海岸の側で発見された。中には硬直したアサルが横たわり、生命の息吹が消えていた。マルドゥクは自分の服を引きちぎり、額に灰をつけた。特に、サルパニトの嘆きは大きかった。エンキは打ちひしがれ、涙を流した。
「カ･インの呪いが繰り返されてしまった！」
アスタは復讐と世継ぎをマルドゥクに訴えた。
「サツは死ななければなりません！あなたの種子で、私に継承者を生ませてください！」
しかし、エンキが制した。
「それはならぬ！兄弟が殺されたら、兄弟の兄弟が番人となるのだ。故に、サツの命は救われ、お前は彼の種子によってアサルの世継ぎを生まなければならない！」
彼女はひどく取り乱し、規則を無視することとした。

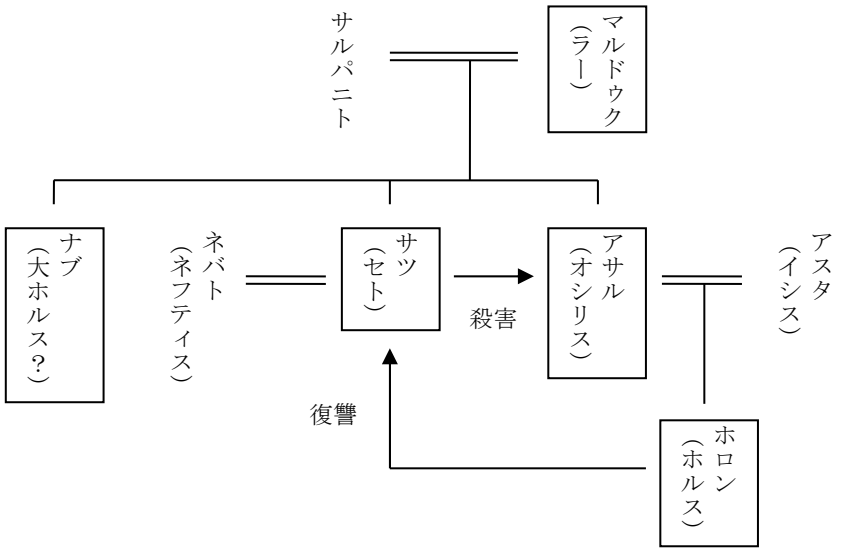
アサルの遺体が包まれて、聖堂の墓に埋葬される前に、アスタは彼のペニスから精子を抽出した。そして、自分を妊娠させ、アサルの世継ぎを産んだ。サツはエンキらの前で宣言した。
「私はマルドゥクの唯一の後継者だ。私は“2 つの峡谷の地”の主人となるのだ！」
しかし、アスタが異議を申し立てた。
「私には、アサルの世継ぎがいます！」
サツはこれに狼狽したが、シャムガズは野望を捨てなかった。サツの報復を避けるため、彼女は川のパピルスの茂みに子供と身を隠した。彼女はその子をホロン（ホルス）と名付けた。
ホロンは大叔父ギビルに引き取られ、復讐のために必要なことを指導された。ギビルは彼に、鷹のように飛べる、舞い上がるサンダルを作った。ギビルは神々しい銛を作り、その矢は稲妻のようだった。ギビルは金属の技術と鍛冶を教えた。鉄と呼ばれる金属の秘密を、ギビルは教えた。ホロンはそれらで武器を作り、忠実な地球人の軍隊を招集した。サツとイギギに挑むため、彼らは北に向かって進軍した。ティルムンの国境地方、“ミサイルの土地”に達すると、サツがホロンに挑戦状を叩きつけた。軋轢は 2 人だけの問題なので、1 対 1 での戦いとなった。
ティルムン上空で、サツは“つむじ風”で待ち受けた。ホロンが舞い上がってくると、サツは毒を塗った短い矢を撃ち、ホロンはサソリに刺されたように倒れた。アスタが助けの叫び声を天に放つと、ニンギシュジッダが“空の船”から降りて来た。魔法の力で、彼は毒を善の血に変えた。朝にはホロンは回復し、ヒレと燃える尾を持った天の魚のような“猛火の柱”を、ニンギシュジッ

ダは授けた。その両目は青、赤、青と色を変えた。（追跡ミサイルか？）勝ち誇ったサツに向かって、ホロンは“猛火の柱”を撃ちこみ、更に銛でサツを打ち倒した。サツは地面に激突し、ホロンによってロープで縛り上げられた。ホロンがサツを議会の前に連れて来た時、サツは失明し、睾丸が潰れていた。
「サツは失明し、もはや跡取りもできない。生かしておきましょう」
とアスタは言った。そして、イギギの中で人として生涯を終えるよう、決定された。
　マルドゥクは自分の住居でその決定を聞いて喜んだが、起こったことについては悲しんだ。息子を 2 人とも失い、サルパニトと共に慰めあった。やがて、もう 1 人の息子が生まれた。2 人はナブ、“預言を運ぶ者”と名付けた。

……

ひかり：やっぱり、イギギがサタンの根源か…。エジプト神話ってムチャクチャ混乱してるけど、これが元となっていたのね。これなら解りやすいわ。この時代から鉄があったのね？
建：マルドゥクの息子同士の戦いだったんだよ。争いの原因となったエンキの息子たちの関係を示そう。





エジプト神話ではオシリスの男根が見つからず、オクシリンコスという魚が飲み込んだことになっているが、それにはアラルとアヌの戦いの話が引用されていて、とても混乱しているね。

ひかり：アサルが殺害された時、マルドゥクが自分の服を引きちぎって額に灰をつけたのが、聖書に於ける“衣を裂き、粗布を纏い、頭から灰を被って祈った（悔い改めた）”ことの原型なのね。そして、アスタが川のパピルスの茂みにホロンを隠したことはモーゼ誕生場面の原型でもあり、アダパとティティを、パピルスの茂みの中で葦の籠に入っていたことにさせたエンキの話が重なるわね。ということは…、人類を創造したのもエンキだし、聖書の主はエンキかしら？

建：いやいや、人類を滅ぼそうとしたのはエンリルだからね。一概に、誰とは言えない。しかし、このように、1つの事象に対していくつもの象徴が重ねられていることは、カバラの本質でもある。

ひかり：預言を運ぶ者がマルドゥクの息子のナブだとしたら、主はマルドゥク？もう、訳分かんない！

(2)新たなる“天と地球を結ぶ”施設

ホロンとサツの抗争の後、エンリルは息子たちを集め、起きている状況を懸念した。

「今や、アヌンナキが地球人の姿形に似てきてしまった。かつて自分の兄弟を殺したのはカ･インだったが、今やマルドゥクの息子がそうした。史上初めて、地球人の血を引くアヌンナキが軍隊を集めた。そして、灯台の峰はマルドゥクの領地に位置し、イギギは“二輪戦車の場所”へと侵攻している。サツの名の

下、彼らは“天と地球を結ぶ”すべての施設の所有権を主張している。だから、代わりとなる施設を、秘密裏に設置するのだ！海の向こうのニヌルタの土地に、それを造ろう！」
こうして、特命がニヌルタに託された。
　彼は金塊が撒き散らされた山々の裾野の、地盤が固い平地を選び、上昇と下降の印を付けた。

……

ひかり：秘密裏に設置するなんて、エンリルはよほどエンキやマルドゥクにご立腹ね。
建：こうやって、ナスカ平原に“天と地球を結ぶ”施設が造られた。やっぱり、あそこは空から見た目印となる絵なんだよ。

(3) ドゥムジとイルニンニの婚約
　この頃、エンキ一族とエンリル一族の幸福となるはずの出来事が起こった。“はず”というのは、これが後に悲劇、大惨事の引き金となるからである。
　アサルの死後、エンキの末息子ドゥムジはエンキから愛されていた。これにマルドゥクが嫉妬した。一方、エンリルの孫娘イルニンニは両親に愛され、彼女の揺りかごの横にはエンリルが座った。成長した彼女の美しさは筆舌に尽くしがたく、武芸ではアヌンナキの英雄たちとわたりあった。天空の旅と“空の船”について、彼女は双子のウツから学び、ウツから彼女自身の“空の船”をプレゼントされた。
　大洪水後のプラットホームで、ドゥムジとイルニンニは視線を交わした。技巧を凝らしたエクルの落成式で、2 人に暖かな再会があった。初めのうちは両一族のことで 2 人は戸惑っていたが、次第に愛し合うようになっていった。ニンフルサグが和平をもたらした時、彼らはお互い愛を告白した。2 人は並んで横たわり、心を通い合わせた。イルニンニの母ニンガルはドゥムジを認めた。父ナンナルもドゥムジを歓迎し、ウツもそれに賛成した。ドゥムジがイルニンニとの関係についてエンキに話すと、エンキは両一族にとっても良いことだとして認めた。彼の兄弟たちも、この縁組を喜んだ。ただ 1 人、マルドゥクを除いて。ドゥムジの兄弟は、イルニンニへの贈り物をいろいろ準備した。そして、慣習に従って、香水をつけ服を着せるために、ドゥムジの妹ゲシュティナンナがイルニンニの下へ送られた。

……

ひかり：ここは何か、ロマンチックね…。
建：ここまで、エゴの話ばかりだったからね。しかし、何か臭うな…。
ひかり：ところで、イルニンニはウツと双子だけど、どちらが先に生まれたのかしら？
建：イルニンニが初子という説もあるが、その逆、という説もある。今度、神殿でイナンナ様に聞いてみるよ。

(4)ドゥムジの死
　イルニンニは、やって来た将来の義理の妹ゲシュティナンナに、自分の胸の内を明かした。
「私は大国を心に描いているの。ドゥムジの名は他の者たちの上に置かれ、私は王妃となり、謀反を起こす国を鎮圧するわ。私はドゥムジに地位を与え、国を正しく導くわ！」
この構想は、ゲシュティナンナによってマルドゥクに伝えられた。マルドゥクはひどく動揺し、ある企てをした。

　ゲシュティナンナはとても愛らしく着飾り、ドゥムジの下へ行った。そして、
「合法的な世継ぎを、花嫁を抱く前に妹との間にもうけなければなりません。イルニンニの息子には、相続の権利は無いのです。さあ、お兄様、あなたと私でエンキと同等の権利を受け継ぐ子を持つのです！」
と言った。何も知らないドゥムジは彼女の子宮に精子を注いだ。そして夜、7人の凶悪な強盗が自分の家に入ってくる夢を見た。
「ドゥッツルの息子よ、“ご主人様”が我々を送り込んだのだ！」
彼らは君主の地位を表す頭飾りを奪い、体から王のローブを脱がせて引き裂いた。そして、ドゥムジを裸にして捕らえ、両手を拘束し、彼が死ぬのに任せた。ドゥムジはびっくりして飛び起き、ゲシュティナンナにその話をした。
「あなたが私をレイプしたことを、マルドゥクは非難するでしょうね。そして、凶悪な密使を送るでしょう。あなたを裁判にかけ、汚すよう命じるでしょう。エンリル一族との連絡窓口を決裂させるために！」
　ドゥムジは叫び怒鳴った。
「裏切り者！裏切り者！」
彼はウツに助けの信号を送った。そして、護符のようにエンキの名を呟いた。エムシュの砂漠、“蛇の砂漠”の中を、彼は慌てて逃げた。そして、巨大な滝の場所に走りこんだ。そこは、ほとばしる水によって滑りやすくなっており、彼は足を滑らせた。押し寄せる水が、彼の体を白い泡の中に流し去った。

……

ひかり：ああっ、何ということ！
建：ここでもまた、マルドゥクだよ。彼のエゴが、すべてを負のスパイラルに落としていく…。
ひかり：この話からすると、マルドゥクとゲシュティナンナは直系の兄妹で、ドゥムジはお母さんが違うのね…。ピラミッドの話を思い出しても、ニンギシュジッダもマルドゥクとはお母さんが違いそうね。それにしても、マルドゥクって嫉妬だらけで、男の風上にも置けないわ！

(5)エンキの苦悩
　ドゥムジの遺体がニナガルによって巨大な湖（ビクトリア湖）から引き上げられると、“下の方のアブズ（アフリカ南端）”にあるネルガルとエレシュキガルの住まいに運び込まれた。石の厚板の上に、遺体は安置された。知らせを受

けたエンキは服を裂き、額に灰を塗った。
「我が息子よ！我が息子よ！このように罰せられるどんな罪を、私が犯したというのだ！私がニビルから最初にやって来た時、水辺に着陸し、エア、“水が家の者”が私の名前だった。そして、殺到する水によって地球は流し去られた。アサルは水で溺れ、今、愛するドゥムジは水によって死んだ！私がしてきたことは、すべて正しい目的のためだったのに、何故、私は罰せられるのだ？」
エンキはそのように嘆き、悲しんだ。そして、ゲシュティナンナから真相を聞いた時、苦悩は更に増した。
「これで、マルドゥクも罰せられるのだ！」

……

ひかり：“下の方のアブズ”にあるネルガルとエレシュキガルの住まいに遺体が運び込まれたので、冥界は下の方にある、あるいは天に対して地の底にあると考えられるようになったわけね？
建：ああ。それが、後に天国と地獄というような概念へと変貌した。
ひかり：エンキへの罰は、マルドゥクに王位継承を諦めさせられなかった、ということにあるような気がするわ。

(6)イルニンニの冥界下りと“復活”
　ドゥムジの死に、イルニンニは悲しみに明け暮れた。彼女は遺体が安置され、姉のいる“下の方のアブズ”に急ぎ、遺体を埋葬するために引き取りに行った。彼女の姉はイルニンニの到着を知ると、常道を外れた企みがあるのでは、と疑った。そのため、7 つの門毎に、イルニンニは装具と武器を 1 つずつ取り上げられた。そして、エレシュキガルの前に、衣服を脱がされて無力で引き出され、ドゥムジの兄ネルガルによって世継ぎを得ようと企んでいた、と糾弾された。その思いに取り憑かれたエレシュキガルはイルニンニの説明に耳を貸さず、自分の高官ナムタルに、6 つの病気を解き放つよう命じた。

　イルニンニがいなくなったことを、彼女の両親は心配した。ナンナルがエンリルに事情を知らせ、エンリルがエンキにメッセージを送った。エンキはネルガルから、何が起こったのかを聞いた。エンキはアブズの粘土で、血を持たず、死の光線によって傷を受けない 2 人の密使を形作り、彼らをエレシュキガルの下に送った。
　彼らがエレシュキガルの前に現れると、彼女は彼らの容貌にとまどった。
「お前たちはアヌンナキか、それとも地球人か？」
ナムタルが魔法の電力の武器を向けたが、2 人の密使は傷つかなかった。ナムタルは彼らをイルニンニのところへ連れて行った。彼女は杭に吊るされていた。密使たちは“プルセル”と“エミッテル”を向け、「生命の水」を彼女に降り掛け、「生命の植物」を彼女の口に入れた。すると、イルニンニは動き出し、蘇った。
　2 人の密使がイルニンニを連れ戻そうとしていると、彼女はドゥムジの遺体を一緒に運んでいくよう指示した。そして、取り上げられた装具と武器は戻され

た。ドゥムジの住まいだった場所に遺体は運ばれ、真水で洗われ、香しい油が塗られ、赤い経帷子が着せられ、ラピスラズリの厚板の上に安置された。それから、彼を眠りに就かせる場所を岩に掘り出した。そこで“眠りから覚める日”を待つために。

……

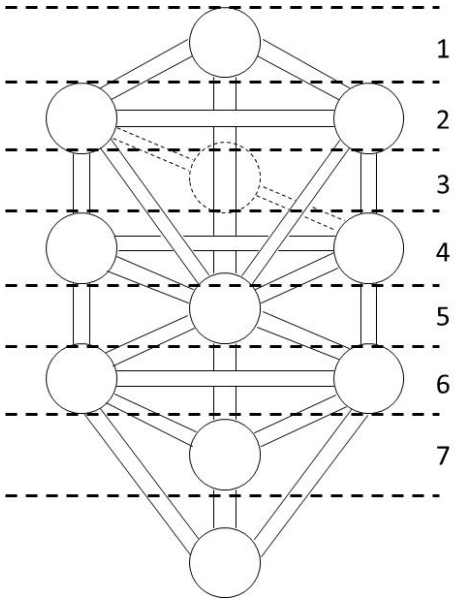
ひかり：これって、いろんな神話の冥界下りそのもので、しかも、イエスの話そのものじゃない！

建：そうさ。神宮に十字架が無かったら、イエスの逸話はこれを基に創った創作、と言えてしまうよ。何と言っても、イルニンニのシンボルは金星で、イエスも明けの明星だからね。そして、両者とも木に吊るされて死んで、復活した。だから、この木がまさしく「生命の樹」さ。

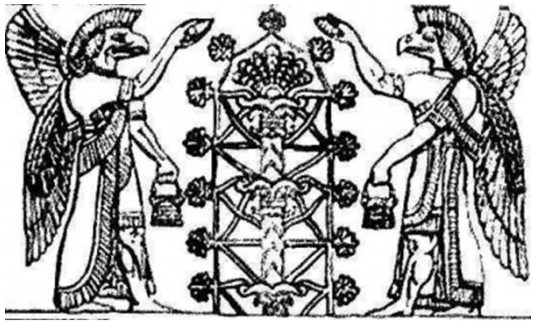
そして、ドゥムジの遺体には赤い経帷子が着せられた。経帷子とは、一般的に仏教に於ける白い死装束のことだが、マタイ福音書の中では、イエスが赤い外套を着せられ、茨の冠を被せられ、葦の鞭で打たれた、とある。それから、ドゥムジの遺体は“眠りから覚める日”を待つために洞窟の横穴に葬られたが、イエスは処刑後に洞窟の横穴に葬られ、3 日後に復活した。このように、イルニンニとドゥムジの物語には、イエスの象徴が満載なんだよ。

ひかり:7 つの門毎に、イルニンニが装具と武器を 1 つずつ取り上げられたのは、インドの 7 つのチャクラと関係があるわけ？

建：大ありさ！後で説明するけど、インダス文明の創造神はイルニンニだからね！「生命の樹」は 7 段階に区分できる。一番下の段階は“精神の地獄”で、至高世界、中高世界、下層世界の三界には含めないから、7 段階となる。7 段階目を脱ぎ終えて冥界の女王の前に立っていることは、7 段階を経て“精神の地獄＝冥界”に達した、ということ。“復活”とは、カバラ的には「生命の樹」を上昇していくことに他ならない。



そして、この「生命の水」こそが御神水の根源で、水が神聖視されるのさ。イルニンニが掛けられて復活した木は「生命の樹」と見なせるから、そこに「生命の水」を灌ぐという形。この水はエンキが遣わしたから、洗礼の水でもある。これは更にデフォルメされ、鷲人間が「生命の樹」に水をやる図として描かれている。



生命の樹

ひかり：この図の「生命の樹」は？

建：ナツメヤシだ。中東では古来から、ナツメヤシが「生命の樹」と言われてきた。実は栄養豊富で、種子から取れる油は石鹸や化粧品として、葉は帽子や敷物、仕切り布、籠、団扇などに、幹は建材や燃料として用いられ、中東では欠かせない植物だ。

特にナツメヤシの葉はキリスト教での「シュロの主日」で使用される。これは復活祭の1週間前の日曜日で、イエス・キリスト受難直前の、エルサレム入城を記憶するお祭りだよ。ナツメヤシの学名はフェニックスで、それは不死鳥“火の鳥”をも意味し、イルニンニを暗示して、ナツメヤシはイルニンニが好物だった！

ひかり：ナツメヤシも、イルニンニとイエスに共通の物なんだ！

建：更に、ユダヤ教では「仮庵の祭り」で新年初めての降雨を祈願する儀式に用いる4種の植物の1つなんだ。

ひかり：「生命の樹」には「生命の水」が欠かせないことから、イルニンニはユダヤ教にも大きな影響を与えているわけね。

建：「生命の樹」のセフィロトは、隠されたダアトも含めて 11 個。これをシンボル化したものが、木製の十一面観音さ。この「生命の樹」に水を掛けることをデフォルメしたのが東大寺のお水取り。十一面観音にお香水という神聖な水を捧げて懺悔する。

ひかり：え～っ、そうすると、神道と仏教は習合しても問題無かったんだ！

建：必然的、と言っても良いね。

ひかり：それにしても、エンキが形作った密使とは、アンドロイドかロボットのようなものなの？

建：う～ん、あれだよあれ、かつて宇宙人として世界を騒がせた…グレイ！

ひかり：！？

(7)イルニンニの怒り
　イルニンニはエンキの住まいに行き、マルドゥクの死を要求した。
「もう、死は十分だ！マルドゥクは扇動者だが、殺人には関与していない」
エンキにマルドゥクを罰する気が無いことを知ると、イルニンニは両親とウツのところに行った。彼女は天に届くほどの声で嘆き悲しんだ。
「正義を！正義を！復讐を！マルドゥクに死を！」
エンリルの住まいに、彼の息子たちも合流した。戦いの会議のためである。ニヌルタは厳しい措置を主張した。マルドゥクとイギギが交わした密約を、ウツは報告した。
「邪悪な蛇、マルドゥクを地球から取り除かなければならぬ！」
とエンリルは賛同した。
　マルドゥクの引渡しの要求がエンキに為されると、エンキは息子たちを集めて言った。
「最愛のドゥムジのことを悼んではいるが、マルドゥクの権利は守ってやらなければならない。マルドゥクは邪悪な行いを唆したが、ドゥムジは不運によって死んだのだ。ニヌルタ一味によって殺されないよう、守ってやらなければならない」
その父の言葉に賛同したのは、ギビルとニナガルだけだった。

……

ひかり：邪悪な蛇、特に西洋で嫌われている蛇の根源はマルドゥクだったのね！
建：東洋では、神の使いあるいは神自身とされる良い蛇と、このような邪悪な蛇がある。それは、こういう話が大元なんだよ。この蛇は龍にも例えられ、マルドゥクこそが本来のサタンの原型さ！彼のエゴが…。
ひかり：マルドゥクを守ることに、ニンギシュジッダは反対だったわけね…。
　　そうすると、良い蛇って、ニンギシュジッダか…。

(8)イルニンニ一族とマルドゥクの戦い
　イルニンニは、彼女の“空の船”でエンキの息子たちの領土を侵犯した。彼女はマルドゥクに戦いを挑み、ニナガルとギビルの領土まで彼を追跡した。ニヌルタが援護し、“嵐の鳥（空中戦闘機）”から敵の要塞に破滅的なビームを照射した。イシュクルは、空から灼熱の稲妻と粉砕する嵐で攻撃した。彼はアブズで川から魚を押し流し、草原の牛を追い散らした。マルドゥクはエクルの方へと逃げた。彼を追って、ニヌルタは居住地に毒入りミサイルを雨嵐のように降らせた。彼の“引き裂く武器”は人々の感覚を奪い、川の水を運ぶ運河は血に染まった。イシュクルの光輝が、夜の闇を燃え立つ昼に変えた。そして、マルドゥクはとうとう、エクルの中に逃げ込んだ。ギビルは目に見えないシールドを張り巡らし、ネルガルはすべてお見通しの目を空の方へ上げた。向きをつけた角によって、“光輝の武器”でイルニンニは隠れ家を攻撃した。祖父を守ろうとしたホロンは、その光輝で右目を負傷した。イギギと手下の大勢の地球人をティルムンの向こうでウツが寄せ付けずにいる間、エクルではアヌンナキ同士が戦いあった。

「マルドゥクに降伏させよ！」
エンリルがエンキにそう言った。
「兄弟同士で話し合いなさい！」
とニンフルサグが言った。

　エクルでは、マルドゥクが最後の抵抗を続けていた。その滑らかな側面により、イルニンニは攻略しあぐねていた。その時、ニヌルタが秘密の出入り口、北の側面の回転する石を見つけた。そこから真っ暗な廊下をニヌルタは潜り抜け、広い回廊に辿り着いた。そのアーチ型の天井はニビルの水晶の色とりどりの放射で、虹のように輝いていた。中ではマルドゥクが武器を持って待ち構えていた。ニヌルタは武器で応戦し、水晶を砕きながら回廊を進み続けた。上の部屋、“巨大な脈動する石”の場所へマルドゥクは後退し、その入り口でスライド式の石の錠を下ろした。イルニンニとイシュクルがニヌルタに続いて進入し、彼らは次の手を考えた。
「あの部屋をマルドゥクの石の棺としよう！」
とイシュクルが提案した。彼は遮断用の石が 3 つ、いつでも下に滑ってくるよう準備されていることに気が付いた。
「生きながらにして葬られる、ゆっくりとした死をマルドゥクに宣告しましょう！」
とイルニンニは同意した。彼らは回廊の端で、その遮断用の石を解き放ち、マルドゥクを墓の中に封印した。

……

ひかり：ホルスが右目を負傷した話の原型はこれなのね。
建：こんなことから、ニヌルタとイシュクルは軍神として崇められた。イルニンニは戦う女神さ。
ひかり：元々のピラミッドの内部は、こんな風だったんだ…。しかし、マルドゥクの墓と化してしまうなんて…。ある意味、ピラミッドはお墓、ていうのは正しいわけね。

(9)マルドゥクの追放
　マルドゥクは生きたまま葬られた。地上では、彼の妻サルパニトが泣いて訴えた。エンキの下へ行き、
「生きている者たちの下へ、マルドゥクを戻すべきです！」
また、イルニンニへの取り成しができるウツとナンナルの下へも、償いの服を着て行った。
「マルドゥクに命を与えたまえ！支配権は放棄しますから、慎ましく人生を続けさせて下さい！」
と懇願した。イルニンニは
「私の最愛の人の死の咎を受け、扇動者は死ななければなりません！」
と突っぱねた。仲介者ニンフルサグはエンキとエンリルを呼び寄せた。
「マルドゥクは罰せられなければなりませんが、死には根拠がありません。生

きたまま追放しましょう。地球の覇権は、ニヌルタに一任しましょう」
と言った。この言葉に、エンリルは喜んだ。エンキは打ち沈んだが、アフリカには荒廃が広がっており、ドゥムジの喪に服しているので、その意見に賛成した。エンリルは言った。
「平和を取り戻し、マルドゥクを生かしたいのなら、拘束力のある協定を結ばなければならない。天と地球を結ぶすべての施設は、私の手だけに委ねられること。“2 つの峡谷の土地”は、お前の息子に与えること。マルドゥクに従ったイギギは、“着陸場所”を諦めて立ち去ること。そして、“戻れない土地”へ、ジウスドラの子孫が住んでいないところへ、マルドゥクは追放されること」
エンキは頭を垂れて納得した。エクルの内部を知るのはニンギシュジッダだけだったので、彼がその土地の支配者となった。

マルドゥク救出のため、ニンギシュジッダが呼ばれた。生きたまま埋葬された者を救うという難題を、彼は与えられた。何とか、上部に開口部を切り出すことにより、救出できることが判った。
「私が指示する場所に石を切り出し、そこから上に曲がりくねった通路を通って救出シャフトを作るのです。隠れた空洞を伝ってエクルの真ん中に出られます。石の中の、渦巻状の空洞を突き破るのです。内部への入り口は爆破して開けます。大回廊まで進み、3 本の閂を引き揚げ、最上部の部屋、彼の死の監獄に到達します」
とニンギシュジッダは言った。
彼の指示通り、アヌンナキは最上部の部屋に辿り着き、気絶していたマルドゥクを何とか救出した。外ではサルパニトとナブ、エンキが待っていた。マルドゥクが目を覚まし、エンキが解放の条件を伝えると、マルドゥクは激怒した。
「生得権が剥奪されるぐらいなら、死んだ方がましだ！」
サルパニトが彼の腕をナブに押しやり、
「私たちは、あなたの未来の一部なのよ」
と穏やかに言った。
「私は宿命に屈した…」
と、マルドゥクは聞き取れないような声で言った。彼はサルパニトとナブを連れ、角のある獣たちが追い立てられた場所へ旅立った。

……

ひかり：マルドゥクは命を助けられたのにも関わらず、まったく自分の立場が解っていないわね！本当に、どうしようもない男！
建：追放された地は、マンモスがいた地域だね。
ひかり：けど、マルドゥクがピラミッドの内部で死にそうになり、復活したということは…“死と復活”の儀式を象徴しているピラミッドの石棺は…マルドゥクが“復活”の原型ってこと？確かに、イルニンニも関わっているけど…何か、訳が分からなくなってきた。

(10) ピラミッドの破壊

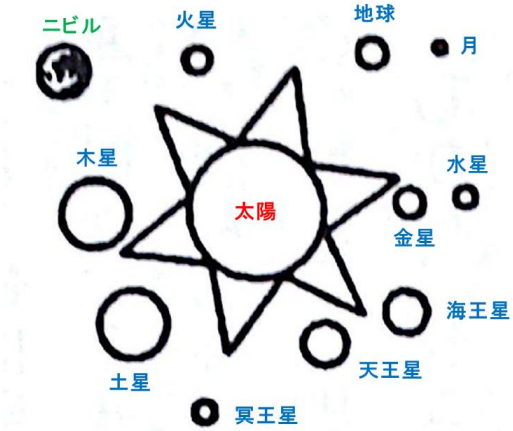
マルドゥクがいなくなった後、ニヌルタは再びシャフトからエクルに入った。水平な廊下を通って、彼はエクルの外陰部へ行った。その東の壁で、“運命の石板”が赤く輝いていた。
「この力が、私に殺しの追跡をさせるのだ！」
と叫び、自分の副官たちに破壊するよう命じた。ニヌルタは引き返し、大回廊を抜けて最上部の部屋に行った。くり抜いたチェストにエクルの心臓が鼓動しており、5つの区画によって増幅されていた。ニヌルタはそれを指令杖で叩き壊した。また、方角を決定するググ石を運び出し、自分の選んだ場所に持って行くよう指示した。大回廊を歩きながら、ニヌルタは27組のニビルの水晶を調べた。マルドゥクとの戦いで多くは傷ついていたが、無傷のものもあった。丸ごと残っているものは取り除き、他のものはビームで粉砕した。
ニヌルタは外に出ると、“黒い鳥”で舞い上がった。そして、エクルの頂上石は敵の象徴そのものだったので、武器で揺さぶってぐらつかせ、地面に落として粉々に砕いた。
「これで、マルドゥクの恐怖は永久に終わった！」
とニヌルタは勝ち誇って宣言した。
「あなたはアヌのようだ！」
と集まったアヌンナキは賞賛した。

無能となった灯台の代わりに、“二輪戦車の場所”近くの山が選ばれ、水晶が再配置された。その山はマシュ山、“至高の空のバーク船”と呼ばれた。ニヌルタにはエンリルの地位が与えられ、あらゆる土地でエンリルの代理となった。また、ヒマラヤ杉の山々にある“着陸場所”の支配権はイシュクルに与えられた。そこから南と東の土地、イギギとその子孫が広まっている場所はナンナルに与えられた。“二輪戦車の場所”と“地球の臍”の司令官はウツとなった。“2つの峡谷の土地”はニンギシュジッダに支配権が与えられたが、イルニンニが反対し、亡くなったドゥムジの継承権を主張した。そして、自分自身の支配権をエンリルとエンキに要求した。どうしたら彼女の要求を満たすことができるのか、アヌンナキは熟考した。それと共に、どのように人類に対して威厳を保ち続け、どのようにして多数の者を少数の者に服従させるのか、アヌと意見を交わした。アヌは配偶者アンツと地球を来訪することにした。

……

ひかり：だから、今ではピラミッドに冠石が無いのね。
建：ニヌルタは、アヌのようだ、と言われ、彼の乗り物“黒い鳥”は現在のステルス機を思わせると同時に、導きの鳥“烏”の原型だろうね。
ひかり：ウツが“二輪戦車の場所”以外に“地球の臍エルサレム”も任されたということは、エルサレムに最も縁の深い神はウツよね？
建：そうさ。ウツのシンボルは太陽だが、それは粘土板では六芒星として描かれている。エルサレムはユダヤの聖地。ユダヤの最も重要な王はダビデ。ダビデの星と言われているのが六芒星だから…
ひかり：なるほどね。

太陽系拡大図



13：神々の聖域－人類に与えられた三大文明の地域

(1)アヌの来訪

アヌの到着を待ち受ける間、アヌンナキはエディンに住まいを再建し始めた。エンキの最初の都エリドゥはおびただしい泥に覆われていたが、その上に新しいエリドゥが計画された。その中心、高くしたプラットホームの上にエンキとニンキの住まい、“凱旋する主の家”が建てられた。エンキはその聖域に“メ”の公式を保管した。新しいニブル・キも、かつてのニブル・キの上に建てられた。神聖な区域が壁で仕切られ、エンリルとニンリルの 7 階建ての住まい（ジグラット）が建てられた。エンリルは“運命の石板”をそこに置き、武器、土地を走査する“持ち上げられた目（レーダー）”やすべてを突き抜ける“持ち上げられたビーム（レーザー）”で保護した。中庭には、高速で進む“空の鳥”を置いていた。そして、アヌを迎えるための住まいがエディンの中で選ばれた。ウヌグ・キ、“快適な場所”と名付けられた。そこに木陰が造られ、純白の建物、7 階建ての“アヌの家”が建てられた。

アヌの二輪戦車が来訪すると、アヌンナキの“空の船”が誘導した。司令官ウツがまず出迎え、その後に指導者たちが続いた。彼らは再会を祝福しあった。

そして、お互いを見て、年の取り具合を推し量った。両親はシャルとしては年上のはずなのに、子供たちの方が年上に見えた…。2 人の息子は老けて、髭面だった。かつて美人だったニンフルサグは、腰が曲がり皺だらけだった。お互い涙が溢れたが、喜びと共に、悲しみの涙でもあった。

アヌは“アヌの家”へ招待され、体を流して貰って休憩し、香水をつけて服を着せてもらった。アンツは女性のアヌンナキに付き添われ、“黄金のベッドの家”へ行った。そして、アヌと同様の歓迎を受けた。宴席では、玉座の傍らにエンキ、エンリル、ニンフルサグが立った。そして、全裸の地球人たちが接客係としてワインや上等の油を給仕した。他の者たちは、中庭の隅でエンキとエンリルから贈られた牛と羊を炙っていた。

宴の開始は天の印だった。エンリルの指示で、天に造詣の深いズムルという神官が“アヌの家”の階段を昇り、惑星の出現を告げた。最初の段でキシャルが東の空に現れ、ラームが 2 段目で姿を見せた。3 段目でムンムが、4 段目でアンシャルが昇った。5 段目でラハムが見え、6 段目から月が知らされた。それから、ズムルの合図で讃歌“アヌの惑星が昇る”が歌われ、一番上の段から赤く後光の差したニビルが見えてきた。アヌンナキは音楽に合わせて踊り歌った。その合図で大篝火が灯され、あちこちの場所で煌いた。夜がふける前に、エディン全体が篝火で灯された。牛肉、羊、魚、家禽の料理に続き、ワインとビールが添えられた。アヌンナキ全員がアヌとアンツから感謝の言葉を受け、宴が終わるとアヌとアンツは宿泊場所に戻った。

……

建：ウヌグ･キとは、アッカド語でウルクのことだよ。洪水後のエディンには、堆積した泥の上に都市が造られた。ニビルと地球の公転周期の違いから、浦島太郎のような現象が、実際に起きてしまったんだ。浦島太郎は竜宮城で宴を満喫し、帰って来て玉手箱を空けたら本来の年齢まで老けてしまったが、竜宮城とは海の神の世界。海の神の原型はエンキで、エンキが居た元々の世界はニビル。だから、例え話として、浦島太郎の話が創られた。

ひかり：宴席では人類は全裸で奉仕したけど、これが後に、ローマ帝国などでの堕落の饗宴となったのね。ふしだらな神々！

建：まあ、そう言わず…。神々を迎えるのに篝火を焚く神道の御神事は、これが原型だね。

(2)アヌとの対談とガルズについて

地球の数日間にわたってアヌとアンツは眠り、6 日目にアヌはエンリルらと話をした。エンリルの誓いによって地球人が拭い去られ、再び増殖したこと、新たな金の採掘場と“二輪戦車の場所”、アヌンナキ同士の平和と武力衝突などについて、アヌは知った。そして、エンキがガルズの石板について話した。アヌはとても困惑した。

「私は、そのような名前の密使を地球に送った覚えなど無い」

エンキ、エンリルは困惑し、皆、首を傾げた。

「ガルズのおかげで、ジウスドラと生命の種子が守られたのです」
とエンキが言った。
「ガルズのおかげで、私たちは地球に残ることができたのです。ニビルに戻ったら死ぬことになる、と言われたのです」
とエンリルが言った。アヌは訝しげだった。
「サイクルがかなり変わるので大混乱を引き起こすが、万能薬で治るのだ！」
「では、ガルズは誰の密使だったのですか」
と、エンキとエンリルが同時に尋ねた。
「誰が地球人を助けることを望み、誰が私たちを地球にとどめたのですか？」
「“万物の創造主”の代わりにガルズが現れたのだわ！」
とニンフルサグが頷いた。
「地球人の創造も運命付けられていた、と思わざるを得ないわ…」
しばらくの間、4 人は黙っていた。
「我々が宿命を定める間ずっと、運命の手がすべての歩みを導いたのだ！」
とアヌが言った。
「ならば、“万物の創造主”の御意思は明らかだ。地球と地球人にとって、我々は使者に過ぎない。地球は地球人のものであり、我々は彼らを維持し、発展させるように意図されたのだ。それが使命ならば、しかるべき行動を取りましょう！」
とエンキが言った。そこで、次のように決定が下された。

a：人類の都市を設置し、その中の神聖な区域にアヌンナキの住まいを造る。
b：ニビルのように王権を確立し、王冠と笏を選ばれた人間に与える。
c：アヌンナキの言葉は彼によって伝えられ、労働と器用さを強化する。
d：司祭職を制定し、アヌンナキを気高い「神」として崇拝させる。
e：秘密の知識を教え、人類に文明を伝授する。
f：4 つの区域を造り、3 つは人類のため、1 つは立ち入り禁止区域とする。
　第 1 の地域は昔のエディンであり、エンリルと彼の息子たちが支配する。
　第 2 の地域は“2 つの峡谷の土地”で、エンキと彼の息子たちが支配する。
　第 3 の地域は他の 2 つとは交流せず、隔絶地でイルニンニに与えられる。
　第 4 の地域はアヌンナキだけの神聖な“二輪戦車の場所”の半島とする。

……

建：アヌとアンツが 5 日間眠り続けたことから、地球との生物学的周期がかなり異なることが解る。そして、このサイクルの変化は、ワインで治る。だから、ワインは西洋では重要視された。
ひかり：ここでも“万物の創造主”が登場しているわね。アヌンナキは、宇宙創造の“万物の創造主”の御意思＝宇宙の法則・宿命こそが唯一すべて、ということを知っているんでしょうね。
建：そりゃそうだろう。だからこそ、ニビルの神殿で祀っていたわけだ。
ひかり：ガルズって、何者かしら？エンキがこのタブレットの中で創作した人物なのか、ニビルにいるアヌの知らない人物なのか、はたまた何処か他

の、更に進化した惑星から派遣された人物なのか…。
建：エンキの最後の言葉からすると、地球人を創成した最初の時点から、彼らに地球を明け渡そうと考えていたエンキの創作人物ではないか、とも思われるね。
ひかり：人類史では農業の始まりがBC11,000年、新石器時代の始まりがBC7,500年、最初の文明開化がBC3,800年で、3,600年前後の間隔で人類は段階的な発展を遂げているから、ニビルの接近毎に、人類が消化しきれる程度の“知恵”が授けられたということね。
建：だから、古代のある時期は高度な文明なのに、次第に文明レベルは退化していったのさ。

(3)イルニンニへの愛情
決定が下されると、アヌはマルドゥクのことを尋ねた。
「もう一度、彼に会わねばならぬ。ドゥムジとニンギシュジッダをニビルに招いたことで、マルドゥクの憤怒は私自身が招いたのかも知れぬ」
とアヌは言った。彼は、マルドゥクへの刑罰を考え直すことを願った。アヌは、マルドゥクが海の向こうの土地にいることをエンリルから聞いた。
その遠い土地へ行く前に、アヌ夫妻はエディンを視察した。エリドゥで、エンキが“メ”を独り占めしていることを、エンリルは不満として述べた。アヌは、“メ”を分かち合うよう、エンキに言った。ウヌグ･キでは、若いアヌンナキが挨拶に参上した。アヌはとりわけ、イルニンニが気に入った。そして、その場所と自分たちが地球を視察するために使う船を、イルニンニに持参金として与えることを宣言した。彼女は喜んで、踊り歌い始めた。彼女のアヌへの讃歌は、やがて聖歌として口ずさまれることになった。

……
ひかり：大神アヌに対するイルニンニの讃歌が、聖歌の元か…。
建：イルニンニが大神アヌの前で歌い踊る様は、岩戸に隠れた（天照）大神の前で歌い踊るアメノウズメノミコトの原型さ。イルニンニは愛と美の女神だが、歌舞音曲の女神でもある。
ひかり：それって、アメノウズメノミコトがイルニンニってこと？
建：(微笑む)

(4)錫と青銅の発見
アヌ夫妻は海の向こうの土地へと向かった。エンキとエンリル、ニヌルタ、イシュクルが同行した。アヌに金の豊富さを印象付けるため、ニヌルタは内部が純金で覆われた住居をそこに建てていた。アヌは、何シャル採っても十分な金があることを確認した。また、ニヌルタは新しい金属がどのように石から抽出されるのか見せた。彼はそれを“アナク（錫)”アヌンナキ製、と呼んだ。そして、それを大量の銅と混ぜ合わせることで、強力な金属を考案したことも見せた。湖畔でその金属が採れる巨大な湖を、アヌは“アナクの湖”と命名した。

……
ひかり：ニヌルタが発見した錫はニビルには存在しないか、ごく微量しか存在しないのね？
建：“アナクの湖”とは、チチカカ湖のことだよ。チチカカ湖に接するボリビアは知っての通り、錫の一大産地だよね。
ひかり：錫と銅の合金は青銅だから…これが“青銅の蛇”に繋がるんだ！
建：蛇はヘブライ語でナハシュで、これには2つの別の意味がある。“秘密を知っている、あるいは秘密を解決する彼”という意味と“銅の彼”という意味さ。エンキは鉱山で採掘をしており、ブズルとあだ名されていた。これは“秘密を解決する彼”と“金属鉱山の彼”を意味した。つまり、“蛇”はエンキを象徴している。そこに、神々の中の英雄ニヌルタが考案した青銅を合わせ、“青銅の蛇”という象徴ができたわけさ。ヘブライの民が荒野をさ迷って毒蛇に咬まれた時、モーゼが青銅の蛇を掲げて、それを仰ぎ見た者は救われただろ？
ひかり：ええ。確か、40年間さ迷わされていた…。
建：その数字40は誰の王位継承数字？
ひかり：エンキよね？あっ、そうか！そういうことか。
建：だろ？さっき言った通りさ。

(5)マルドゥクへの赦しと地球年の開始

その頃、角がある巨大な獣が追われた地、北の土地から、マルドゥクがナブを連れてエンキとアヌの前に現れた。サルパニトは死んでいた。アヌはマルドゥクを強く抱き寄せた。
「お前は十分罰を受けた」
とアヌは言い、右手を彼の頭に置き、赦しを与えた。集まった皆は、黄金の場所、山の高地から平地へ降りて行った。そこに、ニヌルタが水平線にまで及ぶ新しい“二輪戦車の場所”を整えていた。アヌとアンツは金を積み込み、そこからニビルへと帰還した。
「地球と地球人にどんな運命が意図されようと、為るがままに任せよ！知識に見合った天と地球の秘密を教え、正義の法と道徳的正しさを教え、立ち去るのだ！」
と言い残して。

悲しみに溢れた別れの沈黙を最初に破ったのは、マルドゥクだった。彼の言葉には怒りが込められていた。
「この新しい“二輪戦車の場所”は何なのですか？私の追放後、私の知識無しで何をしたのですか？」
エンキが 4 つの地域についての決定を伝えると、マルドゥクの怒りは頂点に達した。
「何故、ドゥムジの死を招いたイルニンニに領地が与えられたのだ！」
「決議を変えることはできない！」
とエンキがマルドゥクに言った。

彼らはそれぞれの“空の船”でエディンと隣接する場所に戻った。トラブルを察したエンリルは、イシュクルに残るよう指示し、監視させた。
アヌの訪問を記念して、新しい時間経過の数え方が導入された。ニビルのシャルではなく、地球の年（ねん）によって数えるのである。エンリルに捧げられた牡牛の時代に、地球年のカウントが始まった。

……

建：水平線にまで及ぶ新しい“二輪戦車の場所”は、ナスカ平原なのさ。
ひかり：神々が地球にいなくなったのは、アヌの命令だったわけね。それにしても、マルドゥクはアヌから赦されたのにも関わらず、まったく反省の色が無いわね！指導者たちを責めるばかりで、一体、どういうエゴの塊なの？
建：このエゴが、ドゥムジの悲劇に次ぐ、更なる巨大な悲劇をもたらす。
ひかり：まったくトンデモな奴ね。
建：それはそうとして、地球年は BC3,760 年から始まった。つまり、アヌの最後の公式訪問が BC3,760 年だった、ということだ。

(6)第 1 の地域
第 1 の地域で、泥からレンガを作る方法を教え、都市を築かせた。その中で神聖な区域がアヌンナキに捧げられ、“神殿”と呼ばれるようになった。人類に継承順位が解るように、アヌンナキは数字による階級で讃えられた。
ラガシュには、ニヌルタのための区域“ギルス”が建てられ、彼の“黒い空の鳥”が置かれた。彼の神殿住居は、“50 の家”、エニンヌと呼ばれた。シッパールにはウツの住居が建てられ、“輝く家”、エバッバルと呼ばれた。ウツはそこから正義の法を発布した。シュルバクから近い場所アダブに、ニンフルサグの新しいセンターが造られ、そこにある彼女の住居は“救援と治療知識の家”と呼ばれ、地球人が形作られた方法の“メ”が保管された。ウリムにはナンナルの住居が建てられ、“王座の種子の家”と呼ばれた。イシュクルは山間地に戻り、彼の住居は“7 つの嵐の家”と呼ばれた。イルニンニはウヌグ･キの、アヌから贈られた家に住んだ。そして、マルドゥクとナブはエリドゥに住んだが、エディンに彼らの住居は無かった。

その“アヌの家”では大神アヌと正妻アンツは別々の寝室を使っていた。アヌは降臨の儀式が終わると、ギパールと呼ばれる彼だけの館に入った。そこには、選ばれた処女エンツが待っているのが習わしだった。エンツは王の娘であり、王たちは自分の娘をエンツにさせようと務めた。エンツが王のために長寿と健康を神に直接祈ることができたからである。エンツとは“神の貴婦人”であり、エンツを通じて王たちは自分たちの守護神に直接近付くことができた。
ところが、ある時、このギパールでアヌを待っていたのは、人間の娘ではなく、アヌの曾孫イルニンニだった。イルニンニは最も若い神だったので、遠い地アラタ（インダス地方）を与えられていた。しかしイルニンニは、割り当てられていた遠い地アラタよりもウルクに住むべきだ、と思っていた。そのため

に策を講じ（他の「神々」に仲介を頼み)、降臨したアヌに近づいて自分の思いを主張し、計画は見事成功した。イルニンニはその美貌でアヌに迫り、アヌの愛人となったのである。これ以後、イルニンニはイン・アンナ＝イナンナ（アヌの愛人）と改名された。イナンナの更なる別名がアンニツムで、アヌの最愛の人、という意味である。それ故、イナンナは女性であるにもかかわらず、王位継承順位数は双子のウツの 20 に継ぐ 15 であり、叔父であるイシュクルの 10 よりも上である。

この“事件”以降、アヌはイナンナにこの神殿を使うことを許し、ギパールの役割は“ギグヌ（夜の愉しみの家)”へと変貌していった。

……

ひかり：ウツは法に関わるわけね？

建：だから、十戒が納められた契約の箱が最大でもウツの王位継承数字 20 年しか同じ場所に無かった。そして、神宮の御遷宮が 20 年毎に行われたのも、御神体として契約の箱があったからで、それは太陽神ウツを暗示しているからに他ならない。だから、御遷宮で動くべきは、本来は内宮の御正宮だけなんだよ。

ひかり：内宮はウツの宮だから、転じてウチ＝内の宮なのね。そして、宇治橋はウツの橋。

建：そこに、秦氏がイエスを重ね、契約の箱の贖いの座に本物の十字架が安置された。

ひかり：マルドゥク一派はエディンには住めなかったのね。

建：イギギ、すなわち、サタンの原型の棟梁だから、エディンからの追放だよ。

(7)ニヌルタの栄光

第 1 の地域では、アヌンナキが地球人に知識を教えた。工芸、農業、土木…。繁栄が土地を満たし、キ・エンギ、“威厳ある監視の土地”と呼ばれた。そして、地球人自身の都市を持たせることとなり、キシュ、“笏の都市”と呼ばれ、人類の王権が始まった。そこの聖別した土に、エンリルは“天空のように明るい物体”を埋め込んだ。そして、ニヌルタが最初の王を任命し、“強力な人”という称号を与えた。

ニヌルタは、王権のための神聖な公式が記録された“メ”をもらうため、正装してエンキの下に赴いた。エンキは彼に 50 個の“メ”を与えた。

キシュでは聖なるニサバが書くことを教え、ニンカシがビール作りを教えた。ニヌルタの指導により冶金と鍛冶が広まり、車輪の付いた荷馬車が初めて人類により作られた。そして、正義の法と道徳的正しさがキシュに普及した。人々がニヌルタを讃える聖歌を作ったのも、キシュだった。彼の英雄譚、“黒い鳥”を詠唱した。それは、ニヌルタの栄光の時代、射手座の時代だった。その間、イナンナは第三の地域の支配権を心待ちにしていた。

……

ひかり：“天空のように明るい物体”って何？

建：よく解らないが、光り輝く玉のような物かな…。後に、それが王権のある土地の象徴となり、神器としては勾玉となった。
ひかり：だから、本物の勾玉だけは皇居にあったのね…。“強力な人”とは、シュメール王名表に因れば、ジュシュルか…。このニヌルタの乗っていた乗り物“黒い鳥”が、太陽神の使いのカラスとなったわけね！
建：その通り！神社の御神事で弓が重要なのも、この英雄＝軍神の星座が射手座であるからに他ならない。マルドゥク一派を追い払ったから、シンボルの弓は魔を払うのさ。
ひかり：ニヌルタがエンキから“メ”をもらうために正装して臨んだのが、正式参拝の服装の元なのね。

(8)イナンナの奸計

ニヌルタが王権を手に入れた様子を見ていたイナンナは、エンキから“メ”を手に入れることを企んだ。彼女は自分の部屋女中ニンシュブルをエンキの下に送り、自分が訪問することを知らせた。これを聞いたエンキは大喜びで、高官イシムドに指示を与えた。
「乙女が一人きりで、我が都エリドゥに歩みを進めている。到着したら私の部屋に案内し、冷たい水を飲ませ、大麦のケーキにバターを添えて出すのだ。甘いワインを用意し、ビールを容器になみなみと注ぐのだ」
イナンナが到着すると、イシムドが言われたように出迎えた。エンキは彼女に会うと、その美しさに圧倒された…。イナンナは宝石で飾り立て、薄いドレスから体の線が透けて見えた。彼女がかがむと、エンキは彼女の外陰部に惚れ惚れした。2 人はワインを飲み、ビール飲み競争をした。
「“メ”を見せて、“メ”を私の手に握らせて？」と戯れるようにイナンナはせがんだ。ビール飲み競争をしながら、エンキは 7 回、“メ”を握らせた。主権と王権、神殿での司祭権と筆記権の神聖な公式、愛の作法のためや交戦のための“メ”を、エンキはイナンナに渡した。音楽と歌のため、木工と金属と貴石のと、文明化した王国に必要な 94 の“メ”を、エンキはイナンナに渡した。

イナンナは戦勝品をしっかりと握り締め、まどろんでいるエンキの下を抜け出した。そして、“空の船”まで急いで行き、舞い上がった。エンキはイシムドから起こされると、イナンナを捕まえるよう、イシムドに命じた。イナンナの住居があるウヌグ･キに近付いたところで、イナンナの“空の船”はイシムドの乗ったエンキの“空の船”に阻止された。イナンナがエリドゥのエンキの下に連れ戻された時、“メ”は彼女の手元には無く、ニンシュブルが“アヌの家”に持って行った後だった。
エンキは自分の権力とアヌの名に於いて、“メ”を戻すよう命じ、自分の家に監禁した。これを聞いたエンリルがエリドゥにやって来た。
「私は当然の権利として“メ”を手に入れたの。エンキ自身が、私の手に乗せてくれたのよ！」
とイナンナはエンリルに言った。エンキはやむなく、それが事実であることを認めた。

「最初の約束どおり、任期が完了したら、ウヌグ･キに王権を渡す！」
とエンリルは宣言した。

……

ひかり：イナンナのお色気作戦に、エンキはマンマとハメられたわけね。
建：エンキがイナンナにハメたかどうかは知らないけどね！
ひかり：はぁ？何言ってるの？エンキにしてもあなたにしても、まったく、男って…。

(9) バベルの塔

マルドゥクはこの話を聞き、カンカンになった。
「屈辱はもうごめんだ！」
とマルドゥクはエンキに怒鳴った。マルドゥクは、エディンにマルドゥクのための神聖な都市をすぐに造るよう、エンリルに要求した。しかし、エンリルは聞く耳を持たなかったので、マルドゥクは宿命を己の手に握った。ウヌグ･キが選ばれる前にアヌの到着のためにと考えられていた場所へ、ナブはイギギとその子孫を呼び集めた。そこに、マルドゥクのための神聖な都市、“空の船”のための場所を築くために。彼の信奉者はそこに集まったが、建築資材となる石が無かった。マルドゥクは、代わりにレンガを作る方法を教えた。それを使って、頂上が天にも届く塔を造ろうと目論んだ。

その計画を阻止するため、エンリルが現場へ急行し、マルドゥクを懐柔しようとした。しかし、エンリルは失敗した。
「マルドゥクは許可されていない“天への門”を建てている。彼は地球人にそれを託しているのだ！」
とエンリルは息子たちとその子孫に言った。
「これが達成されれば、人類にできないことは無くなってしまう。この邪悪な計画は阻止せねばならない」
とニヌルタが言い、全員、それに賛成した。

ニブル･キからエンリル一族がやって来たのは、夜のことだった。彼らは“空の船”から炎と硫黄を雨のように降らせ、塔と野営地全体を完膚なきまでに叩きのめした。その後すぐに、この指導者と信奉者たちを国外に追い散らすことをエンリルは決めた。それにより、彼らの意思疎通を混乱させ、一致団結を砕くために、エンリルは決定した。
「今まで、地球人は 1 つの言語を喋っていた。たが、これ以降、私は彼らの言語を混乱させる！彼らは、お互いの言うことが解らなくなるのだ！」
地球の年で数えて 380 年目に、この事件が起きた。エンリルは、それぞれの地域に異なる言語と文字を与え、一方が他方を理解できないようにした。

……

ひかり：バベルの塔の真相は、これだったんだ！
建：サタンの元となったイギギたちを唆して塔を建てたマルドゥクこそ、エゴ

丸出しのマルドゥクこそ、邪悪の根源さ。
ひかり：やはり、アヌは赦すべきではなかったわ！ピラミッドに封じ込められ、助けられたのにも関わらず、一体マルドゥクは何様のつもりなの？
建：そんな“邪悪な建物と行い”を、エンリルとその一族は断固として許せなかった。嵐のようなミサイル攻撃により、塔と野営地全体を完膚なきまでに叩きのめし、言語もバラバラにするとは、よほど腹の虫が収まらなかったんだよ。これらの言語はエンリルがエンキに創作させたもので、後に出てくるインダス文明のサンスクリット語も、エンキが知恵を振り絞って創作したのさ。言語で言うなら、このシュメールの文法を基に、互いが争わずに保てるように、創造の意識と共鳴するように創作されたのが日本語なのさ！だから、言霊が重要視されてきた。シュメール語も日本語も膠着語（接頭辞や接尾辞のような形態素を付着させることで、その単語の文の中での文法関係を示す）で、共に表音・表意の両方の意味を持っているのがその証拠。

(10)イナンナの都市への王権移譲

23 人の王がキシュを統治し、408 年間、“王権の都市”だった。割り当てられた任期が完了すると、予定通り、王権はウヌグ･キに移譲され、“天国のように明るい物体”がキシュから移動された。その決定が人々に伝えられると、イナンナに賞賛の聖歌を贈った。

“キラキラとまばゆい“メ”のレディ。正義に適い、光を纏った、天国と地球に愛されし者。アヌの愛によって聖別され、敬愛を一身に集め、彼女は 7 度“メ”を獲得し、手に備えている。それらは王権のティアラに相応しく、高位の司祭職に相応しい。偉大なる“メ”のレディ、彼女はその守護者！”

地球年の数えが始まって 409 年後、第 1 の地域の王権はウヌグ･キに移された。その最初の王は、エアンナ神殿の高僧で、ウツの息子メシュキアガシェルだった！

マルドゥクは“2 つの峡谷の土地”へ行った。そして、第 2 の地域が設置されたら、その支配者になるつもりでいた。

……

ひかり：“メ”のレディか…。さぞや、イナンナは嬉しかったでしょうね。
建：最初の王はウツの息子だが、どの配偶者の子なのか不明だから、今度ウツ様に拝謁したら聞いとくよ。確実に言えることは、人間の女性との間にできた息子だよ。アヌンナキとの間の子ならば、神に仕える高僧ではなく、神自身だからね。
ひかり：マルドゥクはまた何か企んでるわね！

(11)ニンギシュジッダの旅立ち

マルドゥクは長期不在後に“2 つの峡谷の土地”に戻ると、支配者としてニンギシュジッダがおり、彼は“崇高な神”となっていた。地球人を娶ったアヌンナキの子孫の助けを借りて、彼は国を監督し、かつてマルドゥクが計画したことは撤回されていた。

「これはどういうことだ？！」
とマルドゥクはニンギシュジッダに迫った。隠しておいたものを破壊したことで、マルドゥクはニンギシュジッダを責めた。ホロンを水の無い場所、砂漠に旅立たせたことについて責めた。
「性的快楽も楽しめないような、果てしない場所にだと？！」
彼らは大騒ぎを繰り広げ、激しい口喧嘩を始めた。
「お前は俺の代理人に過ぎない。お前はずっと俺の居場所を奪ってきた。嫌なら、別の土地へ去れ！」
350 年間、彼らは言い争い、そのため土地は混乱し、兄弟の間で分割された。そして、とうとうエンキがニンギシュジッダに言った。
「平和のために、他の土地へ旅立つのだ！」
ニンギシュジッダは海の向こうの土地へ行くことにし、信奉者の一団と共に旅立った。その時は 650 地球年だったが、新しい土地で“翼のある蛇”ケツァルコアトルと呼ばれたニンギシュジッダは、独自に新しい年数カウントを始めてしまった。

……

ひかり：ニンギシュジッダが初期のエジプトで“崇高な神”として崇拝されていたから、ピラミッド内部の“死と復活”を象徴する石棺は…
建：おそらく、ニンギシュジッダがピラミッドを双子山から 3 つにして、更に石棺も入れて“死と復活”を象徴するカバラとしたんだよ。
ひかり：そのニンギシュジッダがアメリカ大陸へ渡り、ケツァルコアトルとして崇拝されたのね！
建：最初はオルメカ文明だよ。アフリカの黒人そのものの石像が発掘されている。それが、ニンギシュジッダが連れて行った信奉者さ。
ひかり：独自に新しい年数カウントを始めたのは、いわゆるマヤ暦ね。天才科学者ニンギシュジッダの創った暦だから、2,012 年からの大変動が預言できたわけだ…納得！
建：マヤ文明は 20 進法だけど、このように創造神はニンギシュジッダで、20 の王位継承数字を有する太陽神ウツではない。後に、ウツを象徴として使うことを、ニンギシュジッダはこの時点で既に考えていたんだろうね。こういう点が、カバラが一筋縄ではいかない点だよ。
ひかり：難しいわね、カバラって。
建：象徴の重ね合わせでもあるからね…。
ひかり：それにしても、天才を代理人と決め付けたこんな男が、エジプトの神として君臨することになろうなんて、エジプト人は何て可哀想な人たちなんでしょう！

(12)エジプト文明
“2 つの峡谷の土地”には、マルドゥクの支配の下、第 2 の地域が樹立された。そこはマガン、“滝になって落ちる場所”と呼ばれていた。しかし、言語が混乱させられて以来、その地域の人々によってヘム・タ、“暗褐色の土地”と呼ばれ

た。そして、アヌンナキはネテル（ネフィリム)、“守護監視者”と呼ばれた。マルドゥクはラー、“明るい者”として、エンキはプタハ、“開発者”として崇拝され、ニンギシュジッダはテフティ（トート)、“神の測定者”として想起された。彼についての記憶を消すため、マルドゥクは“石のライオン”の姿を、自分の息子ナブの姿に変えた。

マルドゥクは 60 進法ではなく 10 進法とし、1 年も 10 に分け、月の暦から太陽の暦へと変えた。一方で、ニンギシュジッダの主権下にあった北の都と南の都を再構築し、北と南の土地を 1 つの王権の都に統合した。彼はネテルと地球人の子孫を王に任命し、メナと呼ばれた。2 つの土地が交わり、大河が分かれる場所に、キシュを凌ぐ“笏の都”としてメナ・ネフェル（メンフィス、“メナの美”）を設置した。

マルドゥクは自分より年長者たちを祀る聖なる都を築いた。ニビルの王に敬意を表したアンヌ（オン、ヘリオポリス)、その中のプラットホームの上にエンキのための神殿住居を建てた。その頂上は内側が高い塔になっており、尖ったロケットのようにそびえていた。その聖堂に、マルドゥクは自分の“空のはしけ船”の上部を置いた。それはベンベンと呼ばれ、“数え切れない年月の惑星”から彼が旅した時に乗ったものだった。新年の日、王は高僧として祝賀を執り行い、一番奥の“星の部屋”に入り、ベンベンの前に供え物を置くのである。

この第 2 の地域を後押しするため、エンキはあらゆる種類の“メ”をマルドゥクに与え、あらゆる種類の知識を授けた。唯一、“死者を蘇らせること”を除いて。エンキはハピ（ナイル）の水流をマルドゥクと彼の民のために制御し、肥沃な土壌はすぐに豊作となり、人と畜牛が増殖した。“12 の天体の中で偉大なもの”として、エンキはマルドゥクに牡羊座を割り当てた。

……

ひかり：ラーの正体がマルドゥクとはね…呆れた。しかも、父親のエンキを“開発者”プタハに降格し、ニンギシュジッダはトートに変更され、スフィンクスの顔を息子ナブの顔に変更したなんて！

建：スフィンクスの別名はセシェプ・アンク・アトゥムで、最高神アトゥム・ラーの生きた像、という意味だが、まったく呆れた話だ。

ひかり：10 進法を始めたから、それなりの知恵はあるようだけど、ネフィリムなんていう巨人と勘違いされるような命名も呆れるわ。

建：“失われた秘宝”ベンベン石だってそうさ。真相は、マルドゥクの宇宙船の先端部というわけだ。

ひかり：しかも、毎年新年の 1 日だけ王に拝ませていたなんて、偶像崇拝の根源よね？

建：その通り。偶像崇拝の根源は邪悪なマルドゥクだから、聖書では偶像崇拝が忌み嫌われている。

ひかり：あらゆる種類の知識をマルドゥクに与えてエジプト文明繁栄の手助けをしたエンキだけど、唯一、“死者を蘇らせること”は教えなかったのね？

建：だから、“死と復活”を象徴する石棺ともう１つのピラミッドはマルドゥクが造ったものではなく、ニンギシュジッダが造ったと言えるのさ。
ニンギシュジッダの統治時代、エジプトは北と南、すなわち、上エジプトと下エジプトに分かれていた。上エジプトは蓮、下エジプトはパピルスとピラミッドで象徴され、カルナックにあるアモン神殿には、パピルス柱とロータス柱が建っている。蓮は花で女性原理、ピラミッドはそそり立つ山で男性原理を象徴する。つまり、カバラの奥義の１つである陰陽の概念が、天才科学者ニンギシュジッダによって考案されたというわけさ。
ひかり：エジプト考古学者たちは、今まで何してきたのかしら？

(13)第３の地域
第２の地域の成功に指導者たちは勇気付けられ､第３の地域に取り掛かった。約束されていた通り、そこはイナンナの領地とされた。彼女は女主人に相応しいように、天空の星座を割り当てられた。それまではウツと共に双子座だったが、ニンフルサグが贈り物として彼女の乙女の星座を割り当てた。地球の年にして、816 年のことだった。
遥か遠い東方の地、7 つの山脈の向こうが第３の地域だった。“60 個の宝石の土地”、ザムシュと呼ばれた。アラタ、“森の多い領域”は、蛇行する大河の谷に位置していた。広い平野で農業が行われ、2 つの都市が築かれた。エンリルの布告により、エンキはその地域のために以前とは違う系統の言語を、知恵を駆使して考案し、新しい種類の書く記号を創った。それは、前例の無い言語だった。しかし、エンキは文明化された王国の“メ”をその地域に与えなかった。以前、イナンナがウヌグ･キのために“メ”を奪ったが、それと共用させるためである。

アラタで、イナンナはドゥムジに似ていた羊飼いの責任者を任命した。彼女は“空の船”でウヌグ･キからアラタへ旅した。彼女はザムシュの宝石を大切にし、純粋なラピスラズリをウヌグ･キに持ち帰った。当時、ウヌグ･キの王はエンメルカルで、彼は２番目にそこを統治していた。彼はウヌグ･キの領土を広げたので、その栄光にイナンナは鼻高々だった。彼はアラタの富を望み、使者を送り込んだ。しかし、使者の言葉をアラタの王は理解できなかった。そこで、アラタの王は木製の笏にメッセージを刻んで、使者に与えた。そのメッセージは、ウヌグ･キの“メ”をアラタと分かち合うことを要求していた。そして、ウヌグ･キへの贈り物として、穀物がロバに荷積みされた。
エンメルカルはメッセージを受け取ったが、誰も理解できなかった。エンメルカルは業を煮やし、どうしたら良いのか、祖父のウツに尋ねた。ウツは筆記の女神ニサバとの間を取り持った。彼女は、粘土板に自分のメッセージを刻むよう、エンメルカルに教えた。それは、アラタの言語だった。彼の息子バンダの手で、そのメッセージは届けられた。“服従するか、さもなくば戦争だ！”とそこには書かれていた。
「アラタはイナンナ様に守られている。アラタはウヌグ･キに服従などせぬ！もし、ウヌグ･キが戦いを望むのなら、戦士１対１で戦おう！あるいは、円満に解

決するか？アラタの財宝と引き換えに、ウヌグ･キに“メ”を提出させよう！」とアラタの王は言った。

平和のメッセージを運んで帰る途中、フルム山でバンダは病気で死んだ。アラタの財宝をウヌグ･キは受け取らず、アラタはウヌグ･キの“メ”を手に入れなかった。第 3 の地域で、文明化した人類は満開に花開かなかった。イナンナが自分の領土をなおざりにして、他の領地ばかりをむやみに欲しがったからである。

……

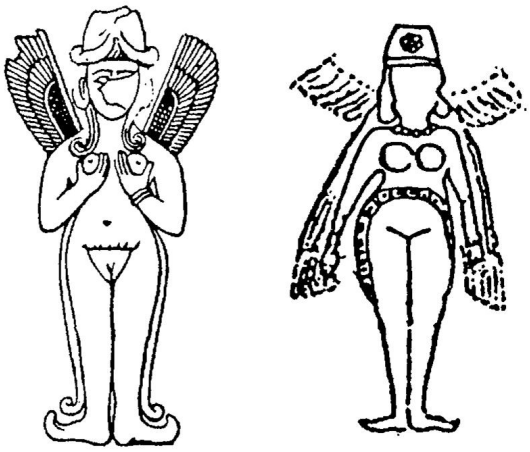
建：7 つの山脈とは、イラン高原にある山々のこと。蛇行する大河はインダス川である。2 つの都市は、モヘンジョダロとハラッパさ。新しい言語は、サンスクリット語だよ。

ひかり：ウヌグ･キもアラタもイナンナの領地だから、イナンナが間を取り持てば良かったけど、イナンナはそんな僻地は嫌だったのね。

建：イナンナは若い女神で、イシュタル、ヴィーナス、アフロディーテなどの別名を持つ。イナンナはエンメルカルの大伯母だから、割り当てられていた遠いアラタよりもウルクに住むべきだと思っていた。そして、その美貌を利用してアヌの愛人となり、またエンキに取り入って騙し、エンキから“メ”＝“知恵の秘密”を聞き出すことに成功した。

このような理由から、イナンナは誘惑する“裸の女神”として描かれていることが多い。しかし、インダス文明はイナンナが疎かにしたため、満開に花開かなかった。だから、知識が隠されたカバラの解釈を、ヨーガによる体の修行やカーマ･スートラの愛欲充足によって追求するようになった。つまり、誤解というわけさ。そして、カーマ･スートラによる愛欲は、後のチベット密教に於ける暗黒の密教、無情瑜伽タントラを生み出すことになった。

可哀想に、後にマルドゥクが“正統だ”と主張して王位を奪い取り、バビロニアの主神となると、イナンナはウルクを追われた。これ以後、イナンナは武装した戦う女神となった。ギリシャ神話では、知恵と戦いの女神アテナと、美と豊穣の女神アフロディーテに分裂しているよ。



14：不老不死ーイナンナの想い

興味を惹く話は時間が短く感じられるが、もうこの日の太陽は傾きかけていた。建とひかりは馴染みのレストランへ行った。食前酒のキール・ロワイヤルを飲みながら、まずはメニューの相談から。

建：今日のメインは何がいい？
ひかり：美容のことも考えて、…カルニチンたっぷりの、ニビルから降ろされた仔羊かしら？
建：だったら、ワインは赤だな、神々の万能薬！脂身はどうする？
ひかり：仔羊の脂身はどうも苦手なイメージが…。
建：それは、今までにまともな羊を食べていないからだよ。ここのは大丈夫だよ。聖書では脂身は主に捧げるものだが、シュメールでは脂身が好まれていた。それに、聖書では禁じられている豚も食べていたよ。
ひかり：えっ！そうなの？
建：ああ。しかし、豚はすぐ不衛生になる。それに中東の暑さが加わると、感染症なんかが蔓延してしまう。だから、豚は禁じられた。
ひかり：脂身が好まれたなんて、日本のサシの入った肉みたいね？
建：そりゃ、日本はシュメールの直系だからね！それに、シュメールでは大人の嗜みとしてビールが好まれた。だから、日本酒があるのにもかかわらず、日本人も「とりあえずビール！」なのさ。
ひかり：なるほど、血がそうさせるのね…。
建：仔羊には普通、ブルゴーニュを合せるけど、脂身も美味しく食べられるように、果実味の濃厚な南の方のコート・ロティにしよう。
ひかり：いいわよ、お任せするわ。
建：じゃあ、前菜は旬のホワイト・アスパラのオランデーズ・ソースで。
ひかり：デザートは、イチゴのミルフィーユがいいわ。
建：それで決まりだね。

既に、食前酒は空いていた。ギャルソンがオーダーを取り、ソムリエがルビー色のワインをデキャンタージュし、しばらくしてグラスに注がれた。ドライフルーツのような熟成した果実香が漂った。

ひかり：輝かしい地球の未来と、そして…私たちの未来に乾杯！
建：乾杯！

2 人は春のフレンチに酔いしれながら、話を続けた。

(1)イナンナの不死宣言

ウヌグ･キとアラタを行き来しながら、イナンナは落ち着かず、満たされなかった。飛び回りながらも、太陽の光にドゥムジが揺らめき招いている姿を見た。夜には夢に彼が現れ、僕は戻って来るよ、と囁いた。そして、“2 つの峡谷の土地”にある彼の領地の栄光を、彼は約束してくれた。こんな幻影に、彼女は翻

弄されていた。

　ウヌグ･キの神聖な区域に、彼女はギグヌ、“夜の愉しみの家”を設置した。そこで、ようやく失われた愛を忘れることができた。ドゥムジの命日の度に自分の“船”に乗って放浪し、次々と人間の男（王、英雄）を誘い、一夜を共にしたのである。とりわけ若い英雄たちを、彼らの結婚式の夜に、イナンナは甘い言葉で誘い出した。花嫁とではなく、彼女と寝ることにより、長生きと至福の未来を約束したのである。イナンナはドゥムジに思いを馳せながら、彼らと夜を共にした。そして、“神との遭遇”である“性の儀式”が“聖なる結婚”の儀式としてギグヌで行われるようになった。
　夜を共にした男たちの運命は、ある者は翼を破られ、ある者は穴の中に埋められ、またある者は彼女のベッドで死んでいた！このように“聖なる結婚”の儀式は、イナンナにとっても男たちにとっても苦痛を伴う“歓びの命日”だった。イナンナはこの命日の日々を、彼女の“船”に乗って放浪していたので、翼のある女神としても描かれている。

　しかし、中には生きていた者がいた。英雄バンダ、ウツの曾孫である。彼女の住まいでバンダは入浴させられ、房飾りの付いたマントに飾り帯を締めさせられた。
「ドゥムジ、私の最愛の人！」
彼女は彼をそう呼んだ。彼女は花々で飾られたベッドへ彼を誘った。朝になってもバンダは生きており、イナンナは喜んで叫んだ。
「奇蹟よ、奇蹟だわ！私の最愛のドゥムジが帰ってきたの！」
ウツの恩寵により、彼は死から蘇ったのである。
「死なない力を私は手にした！不死は、私によって授けられたのだわ！」
そして、自分のことを女神イナンナ、“不死の力”と呼ぶことにした。
　イナンナの両親は、このような彼女の宣言を喜ばなかった。エンリルとニヌルタは彼女の言葉に狼狽し、ウツは困惑した。そして、エンキとニンフルサグは
「死者を蘇らせることなど、不可能だ！」
と言った。

……

ひかり：イナンナの頭の中は、いつもドゥムジのことで一杯だったのね…。同じ女として、彼女の気持ちは痛いほどわかるわ。だからこそ、愛するドゥムジの死の原因となったマルドゥクに対する怒りは凄まじいのね。

建：満たされない願望と性欲を、イナンナは地球人の英雄たちにドゥムジを重ねて交わることで解消しようとしたのさ。純粋なニビル人と地球人とでは時間の流れが異なるから、地球人にとっての一晩でも、イナンナにとってはごく僅かな時間にしかならない。だから、朝まで続く行為により、イナンナの相手は大方、朝には死んでいたんだろうね。あるいは、過激なことが行われたのかもしれない…。

そして、この“聖なる結婚”の儀式は世界中のあらゆるところで行われるようになったが、後のあらゆる宗教に於ける性的退廃の原型ともなった。つまり、イナンナもまた、サタンの原型の一部なのさ！

ひかり：えぇっ！イナンナがイエスとサタンの両方の原型？

建：後で出てくるが、イナンナのシンボルは金星だ。イエスのシンボルは明けの明星で同じなのは、イエスの原型がイナンナだからということは、さっきも話したよね。そして、サタンも明けの明星と言っている。イエスが光なら、サタンは闇だから、宵の明星とならなければ。しかし、共に明けの明星とされているのは、原型が同じだということを暗示しているのさ！

それに、イナンナが創造神のインダス文明（遠い地アラタ）では、様々な女神が分身として登場する。実質の主神としてはシヴァだが、その分身の女神にはドゥルガーや暗黒のカーリーがいる。これなども、イナンナの暗黒面なのさ。

ひかり：マルドゥクのせいで、イナンナが歪んでしまったわけね…可哀そうなイナンナ！

建：生命現象に詳しいエンキとニンフルサグも、死者を蘇らせることは不可能だ、と断言しているから、ウツの恩寵により死から蘇ったとされるバンダも、以前の火星でのアンズの“死と復活”も、そしてイナンナ自身の“復活”も、いずれも仮死状態あるいは瀕死の状態からニビルの高度な医療技術で助かったということなのさ。

ひかり：そこから、イナンナの思い込みで“死と復活”という概念が登場し、名前もイルニンニからアンニツム、イン・アンナ、そしてイナンナとなったのか…。偶然、イン・アンナとイナンナは同じだけど。

建：この聖なる結婚の儀式は、実は日本でも受け継がれてきた。諏訪大社の御柱祭が代表的だが、それについてはまた後日、ゆっくりと。

ひかり：じゃあ、ケン、…今夜は私…、イナンナになろうかな…？

建：よ、よせよ、冗談だろっ！？

(2) ギルガメッシュ叙事詩

キ･エンギの土地で、人々は自分たちの幸運を讃えた。

「神々は我々と共にいる。神々は死を止められる！」

と人々は互いに言った。バンダは父エンメルカルの跡を継いで、ウヌグ･キの王座に就いた。彼の称号はルガル、“偉大な人”だった。彼はエンリルの種子である女神ニンスンを妻とし、息子が生まれた。英雄ギルガメッシュである。ギルガメッシュはバンダの跡を継いで、王座に就いた。

ギルガメッシュは年を取ってくると、生と死に関して母に尋ねた。アヌンナキの子孫なのに死んでしまった祖先について、彼はいぶかしがった。

「神々は死ぬのですか？私も 2/3 が神ですが、死すべき運命の人間として壁を乗り越えるのでしょうか？」

と彼は尋ねた。

「地球上に留まっている限り、地球人としての死が、あなたを打ちのめすでしょう。でも、ニビルへ行けば、そこの長い寿命（不死）を獲得するでしょう」

と母は答えた。

ニンスンは、ギルガメッシュをニビルへ連れて行ってくれるよう、ウツに頼んだ。ウツは拒否したが、来る日も来る日も懇願されたため、“着陸場所”へ連れて行くことを許可した。彼を導き保護するため、ニンフルサグは彼の影武者を造った。エンキドゥ、“エンキによって造られたように”と影武者は呼ばれた。彼は子宮から生まれたのではなく、血液も流れていなかった。
エンキドゥと共に、ギルガメッシュは“着陸場所”へと旅し、ウツが神託で彼の進み具合を監視した。ヒマラヤ杉の森の入り口で、彼らは火を吹く怪物に阻まれた。彼らはペテンで怪物を混乱させ、粉々に壊した。彼らがアヌンナキのトンネルへの秘密の入り口を発見すると、エンリルの創造物、鼻息が致命的な“天の牡牛”に挑まれた。その怪物は彼らをウヌグ･キの門まで追い立てたが、都の城壁のところでエンキドゥに打ち倒された。エンリルはこれを聞くと、苦悶のあまり涙を流して泣き、その嘆きは天のアヌにまで聞こえるほどだった。しかし、“天の牡牛”を惨殺したため、エンキドゥは罰せられ、溺れて死んだ。そのことはニンスンとウツに知らされていたので、ギルガメッシュは惨殺を免れた。それでもニビルの長寿を求めて、“二輪戦車の場所”へ向かうことをウツから許可された。

数々の冒険の後、彼は第 4 の地域“ティルムンの土地”に辿り着いた。地下トンネルを進むと宝石の庭に出て、そこでジウスドラと会った。ジウスドラは大洪水について話し、長寿の秘密も教えた。庭の井戸に、ある植物が生えていて、それがジウスドラと配偶者の寿命を長くしていたのである。それは、地球の植物とは異なっていた。それにより、人間は溢れんばかりの元気を取り戻せるのである。
「“年取った人が再び若返る”、これこそがその植物の名だ」
とジウスドラは言った。
ジウスドラが寝てしまうと、ギルガメッシュは自分の足に石を結び付けて井戸に飛び込み、その植物を引き抜いた。そして、植物を入れた鞄を持って、急いでウヌグ･キへと引き返した。途中、彼が疲れて寝ていると、その植物の芳香に蛇が惹きつけられた。その蛇が植物を奪い、どこかへ消えてしまった。朝になってそのことにギルガメッシュが気付くと、彼は座って泣いた。そして、手ぶらでウヌグ･キに戻り、死すべき運命の人間として、そこで死んだ。

……

建：ギルガメッシュはウツの曾孫の子、玄孫さ。ウツーメシュキアガシェルーエンメルカルーバンダーギルガメッシュ。ギルガメッシュはエンリルの種子、女神ニンスンが母であるため半分は神で、更にプラス 1/16 だけ神の要素がある。だから、2/3 というのは多すぎだよ。
ひかり：エンキドゥはニンフルサグによって造られた人造人間で、火を吹く怪物や“天の牡牛”はロボットね…。
建：長寿の植物はニビル由来さ。しかし、ギルガメッシュは母がエンリルの種

子で、地球で誕生しているから、ジウスドラほどの寿命は得られないよ。
ひかり：今も、その植物は地球上にあるの？
建：あったとしても、地球時間としてかなり経過しているから、既に地球のサイクルに適合したものと化している。だから、それを見つけて食べたとしても、長寿にはならないよ。
ひかり：鞄に入れた植物を蛇が盗んだというのは、本当かしら？
建：例え話さ。蛇神が地球人の長寿は許さなかった、ということ。
ひかり：これが、世界中の“不老長寿の秘薬”の話の原型なのね。
建：日本では、田道間守が第11代・垂仁天皇の命により非時香菓（ときじくのかぐのこのみ）を求めて常世の国に渡ったものの、持ち帰ってきた時には天皇が崩御しており、半分を垂仁天皇の皇后に献上し、残りを垂仁天皇の御陵に捧げ、悲しみのあまり泣き叫びながら亡くなったという逸話に投影されている。泣き叫んだ原型は、ギルガメッシュだったのさ。
ところで、ギルガメッシュもイナンナの“夜の愉しみの家”に招待されたが、イナンナの以前の恋人たちが“使い捨て”にされた事実を指摘して申し出を断り、イナンナの逆鱗に触れている。
ひかり：それこそ、勇気ある男の行動よね！

(3)エジプトへの死生観植え付けとマルドゥクの野望

ギルガメッシュ統治後、更に7人の王がウヌグ･キを統治し、地球年でちょうど1,000年が経過した時、第1の地域の王権はウリムに移された。このような事柄すべてに、マルドゥクは大いに留意した。そして、ドゥムジの領地奪還を仄めかすイナンナの夢や幻影に彼は動揺し、その企てに対抗することにした。

彼は、“死と復活”の問題に、熟考すべき点が多いことに気がついた。そして、“神の神性”という概念は彼の興味を大いに惹き、何と、自分自身が偉大なる「神」になると宣言した！

血統的にほとんど地球人であるギルガメッシュに対して許可されたことに、マルドゥクは腹を立てた。だが、王や民の忠誠を維持するためには、神の国へ行って長い寿命が授けられる、神の領域に近付くことができるという考えは、賢い方法であると見なした。半神半人が不死への出入り口を教えてもらえるのなら、自分の領地の王たちにも、これを適用しようとマルドゥクは決めた。自分の地域の王をネテルの子孫ということにして、“来世”でニビルに旅させよう、と決めた。

彼は“ティルムンの土地”がある、東を向いた墓を建てる方法を王たちに教えた。そして、神官（筆記者）に長い本を与え、それには“来世の旅”について詳しく記されていた。“ドゥアト（ティルムンの土地のエジプト名）”への辿り着き方、そこから“天国への階段”で不滅の惑星への旅の仕方、“生命の植物”を食べること、“若さの水”を飽きるまで飲むことについて記されていた。神官たちは、地球への神々の到来について、マルドゥクから教えられた。
「金は生命の輝きだ！神々の肉体なのだ！」
とマルドゥクは教えた。そして、金を手に入れるために、アブズと“下の領域”

に行くことを王たちに指示した。王たちが武力によって自分たちのものではない土地を征服した時、マルドゥクは自分の兄弟たちの領域を侵犯し、彼らの怒りを引き起こした。
「マルドゥクは何を企んでいるのか？我々を踏みにじる気か？」
と兄弟たちはお互い尋ねた。彼らはこの行為をエンキに訴えたが、マルドゥクはエンキの言うことすら聞かなかった。彼は隣接するすべての国を占領するよう、マガンとメルーハの王に指示した。第 4 の地域を占領して支配者となることが、マルドゥクの真の目的だった。
「地球を支配するのは私です！」
彼は父に断固として譲らずに宣言した。

……

ひかり：エジプト文明って、最初からマルドゥクのでっち上げじゃない？！“来世への旅”を記した長い本て、“死者の書”のことでしょ？エジプト人は可哀想すぎる！

建：そうさ。だから、マルドゥクの言う“死と復活”の問題は、イエスとはまったく無関係だよ。そこまででっち上げてでも、マルドゥクは野望を果たしたかった。その野望とは、“ティルムンの土地”シナイ半島にある宇宙空港を支配し、地球に君臨する神となることだった。言うなれば、究極のエゴの塊だな。

ひかり：とすると、後にグローバル・スタンダードを実現させた連中は、マルドゥク一派の系統、ということか…。まさに、邪悪な蛇ね。

建：邪悪な蛇と言えばマムシ。そのマムシに例えられたイスラエルの支族はダン。つまり、その連中の中核にはダン族がいたということさ。通常はレビ族が除外されて十二支族とされているが、ヨハネ黙示録に記されている、救われる十二支族にはレビ族が含まれる代わりに、ダン族が記載されていない。それは、こういう意味だったんだよ。

(4)アッカド

王権がウヌグ･キからナンナルの都市ウリムに移されると、ナンナルと配偶者ニンガルは民に微笑みかけ、彼らは崇拝された。月に縁のある彼は、1 年の中に月を定め、それぞれの月に祝祭を制定し、12 人の偉大なアヌンナキに捧げられた。そして、第 1 の地域には、至る所に聖堂や聖所が建てられ、人々は神々に直接祈ることができた。国中に豊かさ繁栄がもたらされると同時に、言い争いや侵害行為もあった。彼と配偶者のニンガルは、非常な情け深さで人々を指揮したので、ナンナルは愛情を込めて“父ナンナ”と呼ばれていた。

イナンナはその間ずっと、“空の船”で国から国へと飛び回っていた。“上の方の海”ではウツと戯れ、イシュクルの領地では彼をドゥドゥ、“最愛の人”と呼んだ。彼女は 2 つの川の、上流の平野に住む人々が気に入った。彼らの言葉を心地良く感じ、その言葉の話し方を学んだ。彼らは彼女のことを、金星を指す“イシュタル”という名で呼んだ。彼らはウヌグ･キをウルク、ウリムをウル、

ニブル･キをニップール、イシュクルをアダド、ナンナルをシン、ウツをシャマシュと呼んだ。そして、キ・エンギの土地はシュメールと呼んだ。

……

建：2 つの川とはチグリス川とユーフラテス川で、その上流の平野とはアッカドのことだよ。アッカド語でキ・エンギをシュメールと言ったのさ。
ひかり：ここで、イナンナと金星が結びついたわね。
建：そして、太陽神ウツ、雷神イシュクルとの仲の良さもね。
ひかり：イナンナは相変わらず放浪してるわね？
建：世界中を飛び回って、豊穣の女神として崇められた。それと共に広がったのが“聖なる結婚”だ。後に、マルドゥクの改竄によって“神への人間の犠牲”を行うところも出てきてしまったよ。

(5)マルドゥクの独断的宣言

第 1 の地域シュメールでは、都市間の持ち回りで王権を担当したが、第 2 の地域エジプトでは、そのような多様性は認められず、1 つの都市だけで統治することをラーは望んだ。神の一番上の子、地球に於ける第一子、彼は神官たちにそう知らしめたかった。最古の時代から第一位、彼は賛美歌でそのように歌わせた。永遠の王、永遠を作りし彼、すべての神々を率い並ぶ者の無い者、偉大なる唯一無比の者！

こうして、マルドゥクはラーとして、あらゆる神々の上に自分を君臨させた。彼らの力と属性を、勝手に我が物のように語った。

「私はエンリルとして支配権を持ち、法令を司り、ニヌルタとして鍬と戦闘を司る。イシュクルとして稲妻と雷を司り、ナンナルとして夜を照らし、ウツとして昼を照らし、ネルガルとして冥界を統治する。ギビルとして黄金の奥深さを知っており、どこから銅と銀が産出するのか、私が発見した。ニンギシュジッダとして数とその数え方を私は命じ、天は私の栄光を示している！」

このような宣言に、アヌンナキの指導者たちは動揺した。マルドゥクの兄弟たちはエンキに伝え、ネルガルはニヌルタたちに自分たちの懸念を伝えた。

「お前は一体、何に取り憑かれているのだ？お前の主張は、無法にも程がある！」

とエンキがマルドゥクに言った。

「天が、天が私の覇権を示しているのです！エンリルの星座、“天の牡牛”は彼の子孫によって惨殺された。天では私の時代、“牡羊の時代”がやって来るのです。その前兆に、疑いの余地はありません！」

とマルドゥクは答えた。

エリドゥの住まいでエンキは星座を調べ、1 年の始まりである立春の日に、日の出の方角を注意深く観察した。その日、太陽は牡牛座の間に昇って来た。ニブル･キとウリムでエンリルとナンナルが観測し、“下の世界”ではネルガルがその結果を裏付けた。まだエンリルの牡牛の時代で、牡羊の時代はまだ先だった。しかし、マルドゥクは主張を曲げなかった。彼は自分の領地に使者は送ら

ず、息子ナブの力を借りて、人々にラーの時代がやって来ると発表した。
　これに対抗するため、指導者たちは人々に空の観測の仕方を教えるよう、ニンギシュジッダに頼んだ。彼は知恵を働かせ、石の建造物を考え出し、ニヌルタとイシュクルが建造を手伝った。それはあちこちに設置され、彼らは人々に空の観測方法を教えた。そうして、太陽がまだ牡牛座の位置にあることを示した。エンキはこれらの成り行きを悲しい気分で見守り、如何にして“宿命”が正当な秩序を捻じ曲げるかに思いを巡らせた。
「アヌンナキは自らを神と宣言した後、むしろ、人類からの支援に依存しているのだ！」

……

ひかり：とうとう、マルドゥクは勝手に最高神宣言しちゃったわね！これが元となって、聖書の唯一絶対神ができたわけか…。
建：その通り。唯一絶対神から多神教が分離した、なんて主張していた聖書信奉者もいたけど、これでようやく、真相が解ったんだよ。それまでのあまりにも強い信仰心故に、降臨後には訳が分からなくなって自ら命を絶ってしまった人たちも続出したけど、それほど宗教のマインドコントロールは強い、ということだ。
ひかり：“アッラー”なんて“ラー”を含むから、マルドゥクということを暗示しているのね？
建：だんだん、カバラを理解してきたね？
ひかり：1 日に 5 回も礼拝を強要するなんて、如何にもマルドゥク、て感じね…。
建：世界各地に存在するストーンヘンジはニンギシュジッダが考案し、ニヌルタとイシュクルが建造を手伝ったんだよ。マルドゥクに対抗するために！
ひかり：一体、これまでの考古学者って、何なの？

(6) サルゴン 1 世の任命
　第 1 の地域で、1 人の指導者の下に国々を統一しようとアヌンナキは決め、武闘派の王を望んだ。マルドゥクと敵対するイナンナに、適切な人間を見つける仕事を託した。彼女は、旅行中に出会い愛した 1 人の強い男をエンリルに推薦した。4 つの駐屯地の司令官を父に持ち、高僧を母に持つアルバカドである。エンリルは彼に王冠と笏を与え、シャルル・キン（サルゴン）、“高潔な摂政”として指名した。そして、新しい王権都市が樹立され、アガデ、“統一された都市”と名付けられた。そこは、キシュからそう遠くは無かった。彼はエンリルによって権限を与えられ、イナンナは自分の優れた武器を携えて、彼の戦士たちに同行した。“下の方の海”から“上の方の海”まで、全土が彼に服従した。彼の軍隊は第 4 の地域を守るため、その境界に駐留した。

……

建：アルバカドとは聖書のアルパクシャドで、セムの息子の 1 人。シャルル・キンはアッカドの最初の王、サルゴン 1 世なのさ。アガデとは、戦後のニビルの最初の首都の名前で、その統一された都市に因んで名付けられた。

ひかり：“マルドゥクと敵対するイナンナ”ということは、武闘派の王はマルドゥク軍と戦うために選ばれたわけね？
建：そんなイナンナを、何と、レイプした勇気ある人間の男がいた！それが、アッカドのサルゴンさ！

“ある日、女王が空を飛び、地球を横切った後、ある日、イナンナがエラムとシュブールと…を横切った後で、神の愛人は疲れ、寝てしまった。私は、庭の外れから彼女を見た。私は彼女に接吻し、体を重ねた。”

神の愛人とは大神アヌの愛人のことで、イナンナのこと。気付いたイナンナは怒らなかった。むしろ、自分の好みのタイプだった。その頃、シュメールでは遷都を繰り返し、都市間の争いが発生し、ついには都市の守護神同士の抗争にまで発展していた。そこで、サルゴンを強い男と見込んだイナンナは、シュメールとアッカド全土の王として、彼を推薦することとした。そして、サルゴンはイナンナの変わらぬ愛人となったんだよ。
ひかり：各都市には守護神がある、という考えだったのね。
建：その考えは、古代ギリシャやローマ帝国などにも受け継がれた。

(7)バビロン神殿の建設とイナンナの激高
マルドゥクはイナンナとシャルル･キンの動向に抜かりなく目を光らせ、鷹のように獲物に襲い掛かった。マルドゥクが天に届く塔を建てようとした場所から、シャルル･キンは聖なる土をアガデに移し、そこに“天国のように明るい物体”を埋め込んだ。この行為に激怒したマルドゥクは第 1 の地域へ急行し、ナブと手下を連れて塔のあった場所にやって来た。
「聖なる土は私だけのものだ！神々の門は私が築くのだ！」
とマルドゥクは猛然と宣言し、川を迂回させるよう、手下に命じた。彼らは塔の場所に堤防と壁を築き、エサギル、“最高神のための家”をマルドゥクのために建てた。ナブは父を讃えて、そこをバビリ、“神々の門”と名付けた。こうして、エディンの中心にマルドゥクは強引に納まった。

これに対するイナンナの怒りはとどまるところを知らなかった。彼女は自分の武器でマルドゥクの手下を手当たり次第に殺した。人々の血がかつて無いほど、川のように流れた。ネルガルはマルドゥクの下へ行き、人々のためにバビリを離れるよう、説得した。
「本物の天の印が現れるまで、平和的に待とうではありませんか！」
マルドゥクは立ち去ることを決意し、国から国へと、空から眺めて移動した。その後、ラーは第 2 の地域でアムン、“見えざる者”と呼ばれた。

……

ひかり：マルドゥクはアヌに赦されたのにも関わらず、相変わらずキレまくりね…どうしようもない男！
建：バビリとは、バビロンのことだよ。聖書では“大いなるバビロン”とされ

ているから、やはり絶対神のふりをしていたのはマルドゥクだ。
ひかり：マルドゥクに対するイナンナの怒りも凄まじいわね！
建：キレまくりのマルドゥクが立ち去るほど、彼の手下はイナンナによって大虐殺されたからね。まあ、自業自得さ！
ひかり：エジプト神話に出て来るアモンは、神話上で追放されたラー、つまり、マルドゥクだったのね。やれやれ…。

(8)イナンナの冒涜行為

しばらくの間、イナンナは平穏だった。シャルル･キンの 2 人の息子は平和を望む後継者だった。そして、彼の孫ナラム・シンが王座に就いた頃、エンリルとニヌルタは第 1 の地域を留守にして、海の向こうの土地へ行った。ラーは第 2 の地域を離れ、マルドゥクとして他の土地を旅していた。イナンナは全権力を手に入れることを思い描き、ナラム･シンに全土を奪い取るよう命じた。マルドゥクの領地マガンとメルーハに侵攻するよう、指示した。

ナラム･シンは第 4 の地域を地球人の軍隊が通過するという冒涜行為を働き、マガンに侵攻して、封印されたエクルに侵入しようと試みた。このような神聖を汚す冒涜行為と違反行為にエンリルは激怒し、ナラム･シンとアガデに呪いを掛けた。ナラム･シンはサソリに咬まれて死に、エンリルの命でアガデは全滅させられた。地球年にして、1,500 年のことだった。

……

ひかり：いくらエジプトの地までイナンナが統治したかったとしても、エンリルの許可無くして禁足地のシナイ半島を通過して侵攻するのは、やり過ぎよね…。
建：サルゴン王年代記では、サルゴン王がマルドゥクの支配する聖地を冒涜し、民心はサルゴンから離れ、サルゴンは苦悩の中で生涯を終えたことになっている。これなども話が混同され、マルドゥクによる真実の改竄が良く解るよ。

“サルゴンが犯した神聖冒涜行為に　偉大なる神マルドゥクは激怒し　サルゴンの民を餓死で滅ぼした　マルドゥクはサルゴンに罰を与え　民心はサルゴンから離れた”

(9)ア・キ・チ（地球の生命の創成）と新年祭

そのサルゴンの後継者たちの、シュメールとアッカドの王たちの時代には、“聖なる結婚”の儀式とは別に、イナンナは王たちと一緒に新年の祝いの儀式も行うようになった。そして、その王たちを“聖なる結婚”の儀式の掟の中に組み込んでしまった。

最初の頃は神々だけが集い、アヌンナキの地球滞在記などが生々しく語り継がれており、“ア・キ・チ（地球の生命の創成）”と言われた。王権導入の後、イナンナは王たちをギグヌに招待し、彼女の“性のパートナーの死”を再現し始めた。死ねば、王は交代させられた。これは祭事全体の流れの中に取り込まれた。そのため、王たちはイナンナと一夜を過ごしても、何とかして死なずに

済む方法を見つけ出さねばならなかった。そして、これは王の運命だけではなく、来るべき年が豊作となるか、凶作となるのかを占う神事でもあった。

この祝典の最初の 4 日間は、神々のみが参加した。5 日目に王が登場し、高位の従者を引き連れてイシュタル通りを行進する。王が神殿に到着すると、待っていた高僧が王の印の冠と笏を取り上げ、至聖所の中の神の前に置く。そして、権力の印を奪われた王の顔を、高位の祭司が打ち叩く。それから王を跪かせ、王が犯した罪のリストを読み上げ、神の許しを求める“償いの儀式”に参加させる。次に祭司は、この街の外の、死を象徴する穴に王を導く。王は神々が彼の運命を定める相談をしている間、この穴の中に捕らえられている。9 日目に王は穴から出て、王の印を返され、再び行列を率いて街に帰る。そして、夜が迫ると体を洗い清め、香水を付けられ、いよいよギパールの館に導かれる。やがて朝になり、夜を生き抜いたことをすべての民に知らせるために、王はその姿を民の前に現す。こうして“聖なる結婚”の儀式が終わり、王は次の 1 年間の統治を許され、その地と領民は繁栄の時を約束される。

このような儀式は、古代近東のすべての地域で 2,000 年以上、情熱と歓びをもって行われていた。聖書の雅歌にも、“宴の家、アヌギム”での“愛の歓び”として歌われている。このヘブライ語の語源は、シュメール語のギグヌ（アヌのギグヌ）であることは明白である。

……

ひかり：“ア・キ・チ”て、現つ神（現人神）に似ていない？

建：そうだよ、アキツの語源さ。つまり、イナンナに招待された王を暗示しているわけで、神に選ばれし王、ということさ。

ひかり：聖書の雅歌のアヌギムが“アヌのギグヌ”由来だなんて、道理で降臨後に、聖書信奉者は腰を抜かして精神分裂しちゃったわけね。

建：かつてギパールは神と公式の配偶者が、夜間休むための離れ家だった。少なくとも、エンリルとニヌルタが滞在していた時まではそうだった。しかし、イナンナがアヌとウルクで会うようになってから、イナンナがドゥムジとウルクで会うようになってからは、“一夜を楽しむ密室”ギグヌへと変貌していった。そして、この“新しい利用法”を、他の男神たちが真似るようになった。特に有名なのは、ウルにあるイナンナの父ナンナルのギパールだよ。ここでは、“イナンナの儀式”に於いて王が演じた役割を、“神の貴婦人＝エンツ（シュメール語ではニンディンギル）”が演じた。このギパールは、ナンナルの神殿からは近く、ナンナルの妻ニンガルが住んでいた場所からは遠かった。正式な妻以外に、このような“神の第 2 夫人”を持つ習慣が、初期の王朝時代から新バビロニア時代に至るまで、2,000 年以上にもわたって続いた。

だからと言って、正妻とエンツの間に敵対関係があったわけではなく、エンツが女神ニンガルに贈り物を捧げているように、良好な関係にあった。

古代近東の王たちは、自分たちの都市に次々とギパールのような館を造り、自分たちの娘だけがエンツになる方策を講じた。エンツはいわゆる“神殿娼

婦”とは異なる。神殿娼婦はクアディッシュと言われ、種々の尼僧たちが神殿で行ったが、聖書でも軽蔑的な職業として取り上げられている。この際、実際の神々とではなく、祭司などと交わった。しかし、エンツは神殿娼婦や神々が持つ妾とは違い、子供を産まなかったし、何らかの処置により子供ができなかった。これに対し、普通の妾は子供を産むことができたし、実際に生んだ。

このような規則や習慣は、神の血統を主張する王たちにとっては、その血統を特殊な方法で証明しなければならないことを意味していた。エンツから子は生まれないし、神の妾の子は正妻の子（神々同士の間に生まれた子）には敵わなかったから。様々な王たちが、イナンナを母とする、と主張したのは、このような理由のためと、実際にイナンナと交わったためさ。

ウル第 3 王朝時代（？）からイシン第 1 王朝時代（？）にかけ、イナンナは国家祭儀の聖婚儀式で祀られた。この儀式では、儀式参加者たちが聖婚歌を唱和する中、イナンナに扮した高位の女祭司が、配偶神のドゥムジに扮した王と儀礼的に交わる式次第も含まれていた。

ひかり：エンツと神殿娼婦は区別されていたけど、後に混同され…

建：更に、男娼まで出てきた始末さ。それを、イエスは激しく糾弾し、十字架に掛けられた。

ひかり：そして、この儀式が世界中で豊穣を祈る儀式と結びつき、世界各地で男女の交合が豊穣のための神事とされたのね？

建：うん、日本でも大神神社の地域とか飛鳥座神社、尾張の田懸（たがた）神社・大懸（おおがた）神社などで、天下の奇祭として執り行われてきた。そして、王の生死と豊穣の占いが混同され、“神への人間の犠牲”という概念が登場し、後に人間の生贄が出てきてしまったところもあった。

ひかり：娘をエンツにしようとしたのは何故？

建：神の御加護を受けるためだが、主たる目的は長寿を授かることだ。神々の長い寿命。ギルガメッシュも望んでいた長寿だよ。だから、世界中で“不老不死の妙薬”が求められた。

しかし、後にマルドゥクがバビロニアの主神となると、イナンナはウルクを追われた。これ以後、イナンナは武装した戦う女神となり、ますますマルドゥクとの対立は深まった。バビロニアの王ナブネイドは言っている。

“金の部屋に住む身分の高い皇女、ウルクのイナンナ、引き具を付けた 7 匹の獅子の二輪戦車に乗った彼女。ウルクの住民は、王エルバマルドゥクの規則により、彼女の崇拝を止めて、彼女の部屋を取り除き、軍の馬具を解いた。イナンナは怒ってエアンナを去り、見えない場所に留まった。”

そして、新年を祝う儀式もマルドゥク流に変えられた。新年祭はサグ・ム・ク（年の初め）と言われ、7 日間続けられた。この間、主従の身分差は無くなり、親は子供を罰せず、通常の仕事はすべて休みであった。新バビロニア時代にはアキツと呼ばれ、春のニサンの月（春分を含む月）の 12 日間であった。祭儀の内容は、次の通りさ。

主神マルドゥクは人民の代わりとして一旦裏切られ、消え去らなければならない。王も、神殿の前で権威を象徴する一切のものを投げ出し、国民の代表として神に1年間の不幸な出来事を釈明し、許しを乞う。すると、ウリガルと呼ばれる主教が王の頬を打ち、大衆の前で説教する。その間、町は灯を消し、人々はマルドゥクを求めてさ迷う。しかる後、マルドゥクの像を華やかに飾りつけ、栄光の“復活”をさせる。

クライマックスは、神マルドゥクとその妻サルパニトゥムの“聖なる結婚”だ。次の1年が平和で豊饒であるように祈念し、神に代わって国王が神殿の女祭司と交わった。実際には、用意された奴隷がその期間だけ王位に就き、これが終わると王の身代わりとして殺害されたらしい。どうだい、この変わりようは？まさしく、人間の生贄だよ。

また、バビロニアでは性生活は重要な意味を持っていた。性的な節制は不幸の原因になるとして避けられ、性を拒む女性は悪魔の手先とされた。

ひかり：それって、性的な退廃じゃないの？

建：その通り。性的堕落の根源は確かにイナンナだ。インダス文明の主神、シヴァは破壊と創造の神で、リンガ（男性器）が象徴だが、まさに、このイナンナの性質そのものだよ。しかし、マルドゥクによる乗っ取りが行われて以来、本来の神話や伝承が誤解・曲解され、挙句の果て、人類に性的退廃が蔓延していった。更に、そこに人身供犠などが重なったのが悪魔崇拝、黒魔術、ディオニソス崇拝なんだよ。

ひかり：本当にマルドゥクって、ロクな奴じゃないわね！

建：聖書で言うところの偶像崇拝の根源バアルとは単に「神」という意味で、主にエンリルのことを指していたんだが、こういう理由から、後にマルドゥクを暗示する言葉となった。

ひかり：言葉の意味まで変わっちゃったわけね…。

建：イナンナは人類に“聖なる結婚”の儀式という性的に誤った道＝左道（さどう）を教えてしまった。そういう意味で、イナンナはサタン、ルシファーの原型の1つでもある。他にもサタン、ルシファーの原型は、さっき言ったように、マルドゥクの地球人との結婚を機に反乱した、火星にいたマルドゥク一派のイギギだ。つまり、サタン、ルシファーの原型はイナンナとマルドゥクさ。

イナンナが王たちと一緒に祝った新年の儀式から、興味深いことが言えるよ。高僧が王の印を取り上げ、権力の印を奪われた王の顔を高位の祭司が打ち叩き、王が犯した罪のリストを読み上げ、死を象徴する穴に王を導く。そして、王は 9 日目に穴から出て、10 日目の朝に夜を生き抜いたことをすべての人たちに知らせるために、王はその姿を人々の前に現す。

イエスはユダヤの王と主張したが、祭司たちが認めず、極刑とした。兵士はイエスの着ている物を剥ぎ取り、赤い外套を着せ、茨で冠を編んで頭に載せ、また右手に葦の棒を持たせて（以上、王の印）、その前に跪き

「ユダヤ人の王、万歳」

と言って侮辱した。唾を吐きかけ、葦の棒を取り上げて頭を叩き続けて侮辱したあげく、外套を脱がせて元の服を着せ、十字架に掛けるために引いて

行った。そして、イエスは十字架に掛けられて息を引き取り、横穴の墓に葬られたが、3 日後に復活し、40 日後に昇天した。
つまり、イエスの重要な物語は、この“イナンナの新年の儀式”が原型なんだ。そして、王が 9 日目に穴から出て復活し、10 日目の朝に民の前に姿を現したことは、「生命の樹」に於いて 10 個のセフィロトをすべて通過し、最高セフィラ“ケテル”に達して神から知恵を得る、つまり、神から認められることの暗示なんだよ。

ひかり：やっぱり、イエスの原型はイナンナよね。もし、十字架が神宮に無かったら…

建：旧約だけではなく、新約までシュメールの焼き直しに過ぎない、ということ。それほど、シュメールの真相は重要なのさ。

2 人は話にすっかり夢中になっていたが、外は夜の帳が下り、すっかり夜は更けていた。

メートル・ド・テル：そろそろ、ラストオーダーのお時間でございます。他には、如何なさいますか？

ひかり：あら、もうこんな時間よ！

建：じゃ、食後酒にする？それとも、他で…。

ひかり：そうね、そろそろおいとましましょうかしら…。

建：今宵は“聖なる結婚”で…。

ひかり：じゃあ、あなたは朝まで耐えられるわけね！

建：？！

2 人はレストランを後にし、夜の街へと姿を消して行った。

15：古代核戦争－繰り返された覇権争い

数日後、シックなジャズが流れるカフェに 2 人の姿があった。コーヒー発祥の地エチオピア、イエスの教えが行き届いた国エチオピアのコーヒーは、香り高くふくよかな味わいである。

ひかり：で、マルドゥクはどうなるの？

(1)エンリルに与えられたガルズの預言

マルドゥクがアムンになった後、第 2 の地域の王権は崩壊し、無秩序と混乱が蔓延していた。アガデが全滅させられた後、第 1 の地域でも同様だった。王権は神々の都市と人間の都市を転々とした。そこで、エンリルはアヌに相談し、王権をナンナルの手に預けた。彼の土地ウルクに、3 度目の王権が授けられた。ナンナルは人間たちの“正しい羊飼い”を任命し、ウル・ナンムと呼ばれた。彼は国に安定と反映をもたらした。

エンリルが夢物語を見たのは、そんな時のことだった。天空のように明るく輝く 1 人の男が現れた。エンリルのベッドの側に立つと、白い髪をしたガルズだった。彼は左手にラピスラズリの石板を持ち、その上には天空が描かれていた。天空は 12 の星座によって分けられ、ガルズはそれらを右手で指し示した。彼は牡牛から牡羊へと指を移動させた。それを 3 回繰り返した。それからこう言った。

「慈愛と平和の正しい時代に、悪行と流血が続くだろう。天空の 3 つの部分で、マルドゥクの牡羊がエンリルの牡牛に取って代わる。“最高神”を名乗った者が、地球の覇権を奪うだろう。“宿命”によって定められ、かつて無い大惨事が起きる！大洪水の時のように、正しく立派な人間を選ばなければならない。彼と彼の種子によって、“万物の創造主”が意図されたように、文明化した人類が維持されるのだ！」

エンリルが目覚めると、ベッドの脇にその石板が置かれていた。彼は、誰にもそのことを話さなかった。ただし、天体の大家たちに尋ねることにした。神託の神官ティルフ、この高僧はエンリルに示した。

「ウリムにあるナンナルの神殿へ行き、天体の時間を観測されよ。地球の 72 年が 1 つの“空の分け前”の長さです。3 つの推移を注意深く記録するのです」

と言い、預言された時をエンリルに教えた。彼はアルバカドの孫イブルの子孫で、ニブル･キで 6 代続く神官であり、娘たちはウリムの王たちと異種結婚していた。

……

ひかり：マルドゥクは無責任よね！それにしても、またもやガルズの登場か…。エンキが箱舟の設計図を彼からもらった場面と酷似してるわね？

建：だから、これはエンキの創作の可能性がある。

ひかり：地球の総督エンリルでさえ、人類の神官に頼るようになってしまったのね。エンリルにとっては、さぞや苦々しいことでしょう。

建：ティルフとは、ニブル･キ、ウル、ハランで神託を告げた神官で、聖書に於けるテラ、アブラハムの父さ。イブルは聖書のエベルだが、これが“ヘブル”の語源だよ。

ひかり：“空の分け前”は、歳差運度の角度 1 度に相当する年数だから 72 年。この数字は、ルカ書（10 章 1 節）でイエスが 72 人を任命し、すべての町や村に 2 人ずつ遣わされたことの原型ね。

建：御神託は前兆を探して天を観測することと混ぜ合わされ、後に、次第に対立する神々の両陣営に人類が引き込まれていくにつれて、預言が重要な役割を果たし始めたんだ。言い換えれば、神々のエゴに人類が翻弄されるようになった、人類がそのエゴを背負わされたということさ。

(2)アブラハムの登場

エンリルが夢物語とその前触れについて考えている間、マルドゥクは国から国へと歩き回っていた。彼は自分の最高権力について人々に話していた。自分の信奉者を獲得することが目的だった。“上の方の海”の土地とキ･エンギの土

地の境界で、彼の息子ナブは人々を扇動し、第 4 の地域を奪おうとしていた。そして、目論見通り、西の住民と東の住民との間で衝突が起こった。王たちは軍を組織し、キャラバンは行き来を止め、都市の周りに壁が建てられた。
　ガルズが預言したことがまさに起きている、とエンリルは思った。そこで、立派な家系の子孫、ティルフとその子供たちにエンリルは目を付けた。
「彼こそ、ガルズが選ぶように言っていた人間だ！」
とエンリルは自分自身に言った。

　エンリルは夢物語のことは内緒にして、ナンナルに命じた。
「アルバカドがやって来た川に挟まれた土地に、ウリムのような都市を築き、ウリムから離れてそこに住みなさい。そして、その真ん中に神殿を建て、神官で王子のティルフにそこを任せるのだ！」
ナンナルはエンリルの命じた通り、アルバカドの地にハランという都市を築いた。ティルフはそこの神殿の高僧となるよう送られ、彼の家族も同伴した。預言された 2 つの“天体の部分”が完了した時、ティルフはハランへ行った。

　ウリムの王座は息子のシュルギが引き継いだが、彼はこの上なく卑劣で好戦的だった。ニブル･キで自らを高僧として選別し、ウヌグ･キでイナンナの外陰部を愉しんだ。そして、ナンナルの目を盗んで、山間地から戦士たちを自分の軍に入れ、西部の国々を占領し、“宇宙管制センター”の尊厳を無視した。神聖な第 4 の地域に足を踏み入れ、何と、“第 4 の地域の王”を名乗った。
　神聖を汚す行為にエンリルは激怒した。エンキはその侵略についてエンリルに苦々しく話した。
「お前の統治者たちは、あらゆる国境を越えてきた！」
「すべてのトラブルは、マルドゥクが原因だろ？！」
とエンリルは言い返した。しかし、エンリルは夢物語については言わないまま、ティルフに注意を向けた。特に、彼の一番上の息子イブル・ウムに。イブル･ウムは勇敢で、聖職者の秘密に精通した、王子に相応しい子孫だった。“二輪戦車の場所”の昇り降りができるように、神聖な場所を守りに行くよう、エンリルはイブル･ウムに命じた。

……

ひかり：これじゃ、ナブは預言者なんかじゃなくて、単なる扇動者、デマゴーグじゃない！
建：来るべきことを宣言する神々の代弁者をナービー（ナビゲータ）と言うが、これはマルドゥクに代わって、天空の印がマルドゥクの主権到来を示していることを人類に確信させようとした、ナブのあだ名だ。それがまさに、この場面だよ。
ひかり：この地域はバアルベクと呼ばれる場所で、雷神イシュクルに与えられたのよね？
建：それを、マルドゥクが乗っ取ったんだ。だから、ギリシャ神話のゼウスなんか、雷神の性質が強い。このように、マルドゥクは神話を改竄した。あら

ゆる神話は、後にマルドゥクによって改竄された。それが神話の人物関係が伝承ごとに異なっていたり、矛盾したりする原因だよ。他に、言語がバラバラにされたことも、混乱の要因となっている。

ひかり：ハランって、聖書でヤコブがカナンから帰る途中、天へ伸びる梯子が置かれ、神の御使いたちの昇り降りする天まで達する梯子を見た場所よね？

建：そう、その真相がこの話なのさ。

ひかり：そうすると…、イブル･ウムはアブラハムのことか！

建：その通り！

ひかり：だったら、アブラハムは羊飼いではなくて、エンリルから信頼された神官の家系で、しかも王子じゃない！

建：さっきも言ったように、ティルフはアルバカドの孫イブルの子孫で、ニブル･キで6代続く神官で、娘たちはウリムの王たちと異種結婚していたから、神の血をも受け継いでいる。また、アルバカド＝シャルル･キン＝サルゴン1世とは聖書のアルパクシャドのことで、セムの息子の1人。つまり、イブル･ウム＝アブラハムはニブル･キ出身だが、セムの直系、ニブル･キとウリム（ウル）出身の聖職者で王族の末裔なんだよ。だから、アブラハムの子孫とされるヘブライの民は“選ばれし民”とされているのさ。

このように、アブラハムは聖職者の秘密に精通したセム直系の子孫、王子に相応しい血統だった。アブラハムに命じた主はエンリルで、彼の任務は神聖な場所、第4の地域、“二輪戦車の場所”を守ることだったんだよ。

★イブル･ウムまでの系図

セムーアルパクシャド（アルバカド）ーシェラーエベル（イブル、以降神官）ーペレグーレウーセルグーナホルーテラ（ティフル）ーアブラム（アブラハム、イブル･ウム）、ナホル、ハラン。

(3)マルドゥクの支配権宣言と恐ろしい決定

イブル･ウムがハランを出発するやいなや、マルドゥクがそこにやって来た。彼も神聖を汚す行為を目にしてきたが、それは“新しい秩序”の生みの苦しみだと見なしていた。彼はシュメールの入り口であるハランから最後の突撃を計画し、イシュクルの領地の端に位置するハランから、軍勢の召集を命じた。

ハランに逗留して24地球年が経過すると、降りて来た他の神々に手当たり次第、マルドゥクは涙ながらに懇願した。彼は自分の非を認めたものの、支配権を強く主張し、こう言った。

「おお、ハランの神々よ、裁きを下す偉大なる神々よ！私の秘密を聞いて欲しい。私はベルトを結びながら思い出すのです。私は神マルドゥク、偉大な神、わが領地ではラーとして知られている。私は罪を犯して追放され、山岳地帯へ行き、多くの国をさ迷った。太陽が昇るところから、太陽が沈むところまで行った。そして、イシュクルの領地へ私はやって来た。24年間、私はハランの真ん中に巣篭もりし、その神殿で神託を求めた。いつまで待つのか、私は自分の

支配権について、神官に尋ねた。あなたの追放の日々は終わった、とそう言われた。ですから、宿命を定める偉大な神々よ、自分の都に向かって進路を取らせて下さい。我が神殿エサギルを終の住み処とし、バビリの王を任命させて下さい！私の神殿にすべてのアヌンナキの神々を集め、私と協定を結んで下さい！！」
マルドゥクはこのように、他の神々に彼の時代の到来を宣言した。

自分たちに服従を迫るマルドゥクに、アヌンナキの神々は動揺した。エンリルはニブル･キの指導者全員を会議に招集した。エンキとマルドゥクの兄弟たちもやって来た。この出来事には全員が不安を感じ、彼らは皆、マルドゥクとナブに反対した。議会では責める声が蔓延り、部屋中で非難合戦が繰り返された。しかし、
「いずれ来ることは誰も阻止できない。マルドゥクの最高権力を承認しよう」
とエンキだけが助言した。
「牡羊の時代が来るというのなら、マルドゥクから“天と地球を結ぶもの”を剥奪してしまおう！」
とエンリルは怒って提案した。すると、エンキ以外の全員が、“二輪戦車の場所”を壊滅させることに賛成した。そして、エンキの息子ネルガルが“恐怖の武器”を使用することを提案した…。エンキだけが反対し、この事がアヌに伝えられた。アヌは、彼らの意見に同意した。
「運命付けられていることを、自分たちの判断で無きものにしようとしても失敗するぞ！」
とエンキは言って、立ち去った。邪悪なことを実行するために、ニヌルタとネルガルが選ばれた。

……

ひかり：本当にマルドゥクって、どうしようもない奴ね！恥も外聞も無く、あるのはエゴのみ！
建：マルドゥクはイシュクルの領地にあるハランから、第 1 の地域略奪を企てた。イシュクルは軍神だから、後に主神として君臨したバビロニアではマルドゥクも軍神として例えられた。
ひかり：さすがに、この行為に対しては、マルドゥクの兄弟たちですら反対したのね。唯一、エンキだけがマルドゥクを擁護したなんて、親バカもいいとこ！

(4) 禁断の“恐怖の武器”

エンキは立ち去っても、心の中では笑っていた。武器の隠し場所は、自分しか知らないと思っていたからである。エンリルが地球へやって来る前、エンキはアブガルと共に“恐怖の武器”を隠したからである。しかし、後にアブガルがエンリルにその隠し場所を秘密裏に教えたことを、エンキは知らなかった。そして、長いこと放置されていたから、武器として機能しないだろう、と楽観視していた。

エンキから聞くまでもなく、エンリルは 2 人の英雄に“恐怖の武器”の隠し場所と、武器を深い眠りから起こす秘密の方法を教えた。エンリルは警告した。
「武器を使う前に、“二輪戦車の場所”からアヌンナキを立ち退かせておくこと。そして、都には危害を加えず、人々も殺してはならない」
ネルガルは自分の“空の船”で舞い上がったが、ニヌルタはエンリルに引き止められた。彼は、ガルズの預言とイブル・ウムの選出について、ニヌルタだけに話した。
「ネルガルは短気だ。くれぐれも都市には被害を及ぼさず、イブル・ウムには事前に警告を発するのだぞ！」
とエンリルはニヌルタに命じた。
ニヌルタが武器の場所に着くと、既にネルガルが空洞から運び出していた。それらの“メ”を長い休眠から起こしながら、彼は 7 つそれぞれにタスク名を与えた。最初のものには“敵無しのもの”、2 番目には“赤々と燃える火”、3 番目には“恐怖で崩れ落ちるもの”、4 番目には“山を溶かすもの”、5 番目には“世界の端を探し求めるもの”、6 番目には“上も下も誰も容赦しないもの”、7 番目には極悪非道な毒が満たされており、“生き物を蒸発させるもの”と名付けた。

ニヌルタがその場所へ到着した時、ネルガルは敵を滅ぼし、絶滅させる気満々だった。
「俺はナブを殺す！俺はマルドゥクを絶滅させる！！奴らがむやみに欲しがった国を消し去り、罪深い街をボコボコにしてやる！！！」
ネルガルは復讐に燃え叫び、激怒して声を荒げた。
「勇敢なネルガルよ、君はそんな公正ではない破壊をして、自分が正しいと言えるのか？」
とニヌルタが尋ねた。
「エンリルの指示ははっきりしている。選ばれたターゲットまで私が先導する。君は、私の後からついて来い！」
「アヌンナキの決定は、俺だって知っている！」
とネルガルは返した。

2 人は 7 日 7 晩、エンリルからの合図を待った。案の定、マルドゥクは待ち時間が完了すると、バビリに戻ってきた。彼は武装し、信奉者たちの前で自分の最高権力を宣言した。それは、地球年で 1,736 年のことだった。その日、その運命の日、エンリルは合図を送った。ニヌルタはマシュ山に向けて発ち、ネルガルが後に続いた。
山と平原、第 4 の地域の中心部をニヌルタは見渡した。胸を締め付けられながら、彼はネルガルに信号を送った。
「手を出すな！」
それから、ニヌルタは最初の武器を空から放った。それはマシュ山の頂上を、閃光と共に削ぎ落とし、一瞬のうちに山の内部を溶かした。彼は“二輪戦車の場所”の上に 2 番目の武器を放ち、太陽 7 個分の光を放ちながら、平原の岩は血の吹き出る傷口となった。地球は震えて崩れ落ち、天空は輝いた後に暗くな

った。“二輪戦車の場所”の平原は真っ黒焦げに砕けた岩で覆われ、平原を取り囲んでいた森はすべて、木の幹が残されて立っているだけだった。
「やった！」
とニヌルタは自分の“黒い神の鳥”から叫んだ。マルドゥクとナブがあれほど欲しがった管制塔は、彼らから永久に奪われた。
　ネルガルはニヌルタに張り合おうと思い、エルラ、“全滅させる者”になってやろうという衝動に突き動かされた。“王のハイウェイ”を伝って、彼は5つの都市がある緑に囲まれた渓谷へ飛んだ。そこは、ナブが人々を寝返らせた場所であった。ネルガルは、ナブを籠の鳥のように押しつぶしてやるつもりだった。それら 5 つの都市に向けて、ネルガルは次々に“恐怖の武器”を送り込んだ。渓谷の都市は、炎と硫黄でメチャメチャになり、そこで生きていたものはすべて蒸気になった。凄まじい武器によって山々はぐらつき、海水を塞いでいた場所は門が壊れて開き、海水が渓谷へ流れ込み、渓谷は水で満たされた。都市の灰に水が注がれ、蒸気が天に立ち上った。
「やった！」
とネルガルは叫んだ。彼の心に、もはや復讐心は無かった。

……

ひかり：これって、…ひょっとして核攻撃？
建：…そうだよ。
ひかり：ああ、何てこと？！神々も愚かだった、ってわけ？
建：結論的には、そういうことだね…。
ひかり：すべてはマルドゥクのエゴのせいね！
建：マルドゥクだけじゃないよ。ニビルの法では禁じられているマルドゥクの権利を最後まで認めようとしたエンキのエゴ、人類を最初から快く思っていなかったエンリルのエゴ、愛するドゥムジの復活を夢見て性的妄想に浸ってしまったイナンナのエゴ、神々の一員に成りたがった人類のエゴ、…様々なエゴが重なって、こんな事態を引き起こしてしまったのさ。
ひかり：ここまではネルガルとマルドゥクの対立は表立ってなかったけど、“罪深い街”なんて言うぐらいだから、よほどマルドゥクのことを恨みに思っていたようね。
建：聖書の中にも、主が言われた言葉として載っているよ。

“ソドムとゴモラの罪は非常に重い、と訴える叫びが実に大きい。私は降って行き、彼らの行跡が、私に届いた叫びの通りかどうか見て確かめよう。”

　この破壊的な任務を担ったのは、ニヌルタとネルガルだった。聖書では、2人の御使いとして登場する。
ひかり：ということは、アヌンナキは神々であるけども、天使でもあるわけ？
建：そう、だからイエスが神々と共に降臨して来た時、聖書の民は神々を天使軍団と勘違いしたのさ。ウツなんか鷲の翼で飾られ、鷲の紋章を付けていたからね。天使が背中に羽を付けている原型さ。

ひかり：ネルガルがターゲットとした場所は、聖書ではソドムとゴモラを中心とする地域ね？
建：その通り。その場面は次のようにある。

“シンアルの王アムラフェル、エラサルの王アルヨク、エラムの王ケドルラオメル、ゴイムの王ティドアルが、ソドムの王ベラ、ゴモラの王ビルシャ、アドマの王シンアブ、ツェボイムの王シェムエベル、ベラ、すなわちツォアルの王と戦ったとき、これら 5 人の王は皆、シディムの谷、すなわち塩の海で同盟を結んだ。彼らは 12 年間ケドルラオメルに支配されていたが、13 年目に背いたのである。
（中略）セイルの山地でフリ人を撃ち、荒れ野に近いエル・パランまで進んだ。（中略）そこで、ソドムの王、ゴモラの王、アドマの王、ツェボイムの王、ベラすなわちツォアルの王は兵を繰り出し、シディムの谷で彼らと戦おうと陣を敷いた。（中略）ソドムに住んでいたアブラムの甥ロトも、財産もろとも連れ去られた。アブラムがケドルラオメルとその味方の王たちを撃ち破って帰って来た時、ソドムの王はシャベの谷、すなわち王の谷まで彼を出迎えた。いと高き神の祭司であったサレムの王メルキゼデクも、パンとワインを持って来た。彼はアブラムを祝福して言った。
「天地の造り主、いと高き神にアブラムは祝福されますように。いと高き神が讃えられますように」
アブラムはすべての物の 1/10 を彼に贈った。

（中略）主は言われた。
「ソドムとゴモラの罪は非常に重い、と訴える叫びが実に大きい。私は降って行き、彼らの行跡が、私に届いた叫びの通りかどうか見て確かめよう」
（中略）2 人の御使いが夕方ソドムに着いた時、ロトはソドムの門の所に座っていた。ロトは彼らを見ると、立ち上がって迎え、地にひれ伏して言った。
「皆様方、どうぞ私の家に立ち寄り、足を洗ってお泊まり下さい。そして、明日の朝早く起きて出立なさって下さい」
彼らは言った。
「いや、結構です。私たちはこの広場で夜を過ごします」
しかし、ロトが是非に、と勧めたので、彼らはロトの所に立ち寄ることにし、彼の家を訪ねた。（中略）
「実は、私たちはこの町を滅ぼしに来たのです。大きな叫びが主の下に届いたので、主は、この町を滅ぼすために私たちを遣わされたのです」
（中略）主はソドムとゴモラの上に天から、主の下から硫黄の火を降らせ、これらの町と低地一帯を、町の全住民、地の草木もろとも滅ぼした。ロトの妻は後ろを振り向いたので、塩の柱になった。アブラムはその朝早く起き、先に主と対面した場所へ行ってソドムとゴモラ、および低地一帯を見下ろすと、炉の煙のように地面から煙が立ち上っていた。”

5 つの都市がある緑に囲まれた渓谷とは、ソドム、ゴモラ、アドマ、ツェボ

イム、ベラ（ツォアル）の王たちが同盟を結んだシディムの谷＝塩の海だ。おそらく、地形からも名称からも、現在の死海付近だろう。そこは、ナブが人々を寝返らせた場所で、イシュクルの領地だった。だから、彼らが 12 年間支配されていたケドルラオメルとはイシュクルもしくはエンリルのこと、あるいは彼らが任命した王で、ナブによって寝返ったことが、13 年目に背いた、という表現になっている。

シディムの谷で 5 人の王が戦いのために陣を敷いたのは、マルドゥクがさせたことさ。

いと高き神の祭司であったサレムの王メルキゼデクは、パンとワインを持って来てアブラムを祝福したが、サレムとはエルサレムのことで、ウツが司令官だった。つまり、サレムの王メルキゼデクとは、太陽神ウツあるいは彼が任命した王のこと。ここでも、イエスの象徴である“パンとワインによる祝福”がウツに関連して登場している。

また、“ロトの妻は後ろを振り向いたので、塩の柱になった”という表現では、“塩の柱”とはヘブライ語で“ネツィブ・メラー”で、対応する“塩”を意味するシュメール語は“ニ・ムル”だが、この言葉には“蒸気”という意味もあるから、これは“蒸気の柱”となり、“蒸気が天に立ち上った”ことを暗示していることになる。

このように、聖書の場面はかなりの創作が見られるが、それが起きたのは地球年で 1,736 年、BC2,024 年のことだったのさ。

(5)神々の誤算と大いなる惨禍

自分たちがしでかした邪悪な仕事を見渡しながら、2 人の英雄は目の前の光景に困惑した。空はにわかにかき曇り、風が吹き始めた。黒い雲の中で渦巻きながら、“邪悪な風”が空から薄暗がりを運んできた。日が暮れると、水平線の太陽を、その薄暗がりが覆い隠した。夜には、おぞましい光が暗がりの縁を取り巻き、月は昇ってくる途中で姿を消した。次の朝になると、西から、“上の方の海”から暴風が吹き始めた。それは、暗褐色の雲を東へと導き、入植地の方へと広がって行った。その雲が到達した場所は、生きているものすべてに情け容赦ない死をもたらした。“容赦しない渓谷”から、閃光によって引き起こされた死が、シュメールへと運ばれてきた。

ニヌルタとネルガルは、エンリルとエンキに警告を発した。

「止められない“邪悪な風”が、すべてに死を運んでいます！」

エンリルとエンキは、その警報をシュメールの神々に伝えた。

「逃げろ、逃げるんだ！人々を分散させよ！身を隠させよ！」

神々は自分たちの都から逃げた。怯えた鳥のように、彼らは自分たちの巣から逃げ出した。

国中の人々が“邪悪な風”の手中に落ちた。逃げても無駄だった。死はひっそりと、幽霊のように、田畑や街を襲った。一番高い壁も、一番厚い壁も、洪水の水のように通り抜けていった。どんな扉もそれを締め出すことができず、どんな錠も撥ね返すことができなかった。扉に鍵をかけて家に隠れていた人は、

ハエのように殺された。通りに逃げた人は、道の上に死体となって積み重なった。咳と痰が肺を塞ぎ、口は唾と泡で一杯になった。“邪悪な風”は目に見えず、人々を包み込むと、彼らの口は血で溢れた。“邪悪な風”はゆっくりと吹きつけながら、西から東へと、平野や山地を移動していった。後には死者と死に行く者が残され、生きていたものはすべて、人も牛も同じように犠牲になった。水は毒に犯され、田畑はすべて植物が枯れた。

南はエリドゥから北はシッパールまで、“邪悪な風”は国を打ちのめした。バビリより南の国々はすべて“邪悪な風”に飲み込まれ、第 2 の地域の中心部もかすめた。しかし、マルドゥクが最高権力を宣言したバビリは、“邪悪な風”を免れた。

……

建：核により撒き散らされた放射能雲がシュメールに到達することを、アヌンナキは予測できなかった。エジプトも汚染された。それが、あらゆるものに死をもたらした。しかし、マルドゥクが権力を主張したバビリ＝バビロンは、災害を免れた！

ひかり：よりによって、マルドゥクの地域だけが助かったなんて…。何という運命の皮肉と言うか…。

建：古代に核兵器が使われたということは、にわかには信じがたいが、他のシュメールの粘土板やメソポタミアの古文書にも、核兵器としか思えないような記述がある。

“ネルガルは海に溝を掘り、全体を 2 つに分割した　海に棲むワニさえも滅ぼされた　火をもって動物を焼きつくし、すべての植物を灰に変えた”
“ニヌルタはいと高き山へと向かった　比類なき 7 つの恐怖の兵器がニヌルタに続く　英雄はいと高き山の前に立ち、腕を大きく振り上げ、山は滅ぼされたいと高き山の傍らの平地を英雄は滅ぼした”
“7 つの恐怖の武器が放たれるや　目も眩む閃光が四方へ飛散し　すべてのものが焼き尽くされた　閃光は災いの雲を生み出した　災いの雲は空へと立ち上る”
“ほとんど呼吸できぬ者たち　災いの風に襲われた者に明日は無い　口から血を吹き　血の中に転げ回る　災いの風に襲われて蒼白となった顔”

“7 つの恐怖の武器”に関して、ここでも同じような記述が見られる。海を二分割し、山と平地も一瞬にして滅ぼし、目も眩む閃光を発すると同時にすべてのものを焼き尽くし、閃光は災いの雲を発生させ、災いの雲が原因となる災いの風に襲われると血を吹いてのたうち回り、死ぬ以外にないのは、やはり核兵器以外に無い。通常の強力な爆弾が炸裂しても、災いの雲が立ち上ったり、すべてのものを焼き尽くしたり、災いの風が発生することはないし、化学兵器でもすべてのものを焼き尽くすことはない。

つまり、古代メソポタミアで実際に核兵器が炸裂し、その具体的な描写が、聖書に描かれているソドムとゴモラの様子でもある。

1,920年代、ヴァチカンが死海周辺に派遣した発掘調査隊によると、動物の生殖能力を失わせる程の残留放射能が検出されたらしい。また、シナイ半島には、その大きさ故、宇宙からしか観測できない“傷跡”が残されている。その“傷跡”から北に向かって広大な平野が開けているが、地平線上にそそり立つ山々と平野の黒い土壌が、くっきりとしたコントラストを成している。シナイ半島の表土は白い石灰岩と赤い砂岩で構成されているから、黒い土壌は形成されようがない。

この“傷跡”に残る黒い小石はテクタイトで、黒曜石に似たガラスであり、その生成過程については何年もの間、科学者によって議論されているが、どのようにして生成されたかは、まだ良く解っていない。しかし、1,500℃以上の高温で溶けた砂や石が急激に冷えてできたことだけは確かだ。

よく言われる隕石説では、恐竜を絶滅させるほどの巨大隕石の衝突時でさえ、顕微鏡サイズのテクタイトしか確認できないが、シナイ半島のものは肉眼で確認できるほどの大きさで、色も異なる。また、シナイ半島でテクタイトが採取される場所と、そこの地質学的な関係が無く、ストロンチウムや鉛の同位体比の分析値から、地表物質との差は認められない。だから、隕石の衝突なんかではない。

また、同じようなテクタイトは、謎の多いインダス文明のモヘンジョダロ遺跡にも見られる。そこは、現地の住人が“ガラスになった町”と恐れて近づかない場所で、テクタイトが800メートル四方をびっしりと覆っている。テクタイトは隕石だけではなく、火山活動によっても生成するが、モヘンジョダロ遺跡のあるインダス川流域に於いて、あるいはメソポタミア一帯に於いても、大規模な火山活動の痕跡は確認されていない。

テクタイトが見られる以上、放射能の雲がやって来ただけではなく、“恐怖の武器”も使われたのだろう。また、インドの二大叙事詩「マハーバーラタ」と「ラーマーヤナ」には、核兵器を示唆する極めて写実的な描写があり、とても空想で書いたようなものではない。

このような風景が見られる他の場所は、唯一、地表で核実験が行われた場所（砂漠）だよ！ならば、メソポタミアを中心とした一帯で核兵器が炸裂した、と考えるのが最も辻褄が合う。そして、その原因は神々の権力闘争によるものだ、と。これ以外にも、同様の現象を描写していると思われるものがある。

★ヘシオドスの記述

BC8世紀ギリシャの詩人ヘシオドスの「神統記」の中の記述。

“熱い蒸気がティターンを包み込み　巨大な炎が天を焦がす　雷火石の閃光は神々の目を眩ませ　耐え難い光熱が混沌を覆い尽くし　あたかも天と地とが溶け合ったかのよう…”

これは、ゼウスが“雷火石”をオッサ山に投げつけたところの描写さ。“ティターン”という言葉はギリシャ語では何の意味も無いが、シュメール語で

は“天空に住む者”を意味する。
ひかり：助かったのは、イブル・ウムの一族だけ？
建：それと、マルドゥクのバビリ。バビリがサタンの一族ならば、イブル・ウムは神の一族、てことさ。しかし、これはあくまでも中東での話。他にもいただろ？人類は…。
ひかり：え～っと、そうだ、中南米で文明を築いたカ・インの子孫！
建：その通り！大洪水の時に船で助かったように、航海術には優れていたから、中南米から南北アメリカ大陸、ミクロネシアやポリネシア、そして、日本まで広がっていたのさ！
ひかり：それって、ムー文明？
建：この一大文明圏が後にムー文明と呼ばれた！ただし、太平洋は地殻活動が活発だから、そこにムー大陸があったというのは人類の妄想にすぎない。
ひかり：日本も、てことは、縄文時代でしょ？
建：ああ、ムー文明圏の中心地は日本だった！中南米でも良かったんだが、何と言っても、飲料水の確保が難しい。神々はそれまでに、地球の様々な気候変動を見てきた。それからすると、いずれ、中南米では飲料水に困ることになると予見された。それ故、飲料水が豊富で気候も良く、将来的に人類が目覚めるまで隔離しておける場所として、日本が最適だった。更に、日本には金鉱脈も豊富だ。だから、“その時”が来るまでの封印の地として、日本が選ばれたのさ。地震や台風の影響はあるとしても。つまり、ムー文明の真相は、日本が中心となった一大環太平洋縄文文明圏のことなのさ！
アバエルは牧畜、カ・インは農耕を教えられたから、この文明圏では農耕が基本となった。だから、日本では農耕儀礼が神事の中心となった。かつて、日本の縄文時代は狩猟ばかりのように思われていたが、20 世紀後半からの発掘調査で、かなり早い時期から農耕が行われていたことが証明されたよ。
ひかり：なるほどね！だったら、アトランティスは？
建：それも妄想の産物。アトランティスについて最初に語ったのは、ギリシャの哲学者プラトンだ。プラトンはアトランティス伝説について「ティマイオス」と「クリティアス」という著書に記している。たとえば「ティマイオス」に於けるアトランティス物語は、プラトンの“理想の国家＝祖国ギリシャ”が主役の物語であって、アトランティスはギリシャの引き立て役であるフィクションなのさ。しかし、いつの間にかギリシャよりもアトランティスが主役へと変貌し、多くのアトランティス信奉者に勘違いされるようになってしまった。あと、“オリハルコン”と呼ばれる超金属は「クリティアス」の中で“飛行船を宙に浮かせることができる”と書かれている、とされているが、実はオレイカルコスと書かれており、それは“山の銅”（oros：山、chalkos：銅）という意味で、現代ギリシャ語における単数対格形″oreichalkon″がオリハルコンなんだよ。つまり、オリハルコンとは、赤銅のことさ。
また、存在したと言われる大西洋の中心には、海底地形図を見れば解るように、大西洋中央海嶺が存在し、そこから新しい地質が絶えず生成し、東はユーラシア・アフリカ大陸、西は南北アメリカ大陸の方向に移動している。このような活発な地殻変動が発生している地域に、アジアとアフリカを合わ

せたよりも大きい“島”など存在し得ないから、アトランティス文明なんて存在しなかった。言い換えれば、シュメール神話が改竄されたギリシャ神話を基にして古代ギリシャ人が空想した世界を、後世の信奉者が担ぎ上げて創り上げた、“大いなる誤解”に基づく架空の文明なのさ。

ひかり：じゃ、レムリアは？

建：1,874年に英国の動物学者スクレーターが、マダガスカルと南インド、ならびにマレーシアは元来1つの大陸で5,000万年前に水没したという仮説を立て、レムリア大陸と命名したのが大元。これに対し、超古代文明の存在を教義化しつつあった神智学者ブラヴァツキーが関心を示し、この大陸はインド洋ではなく太平洋に実在したと主張した。更に、神智学協会ドイツ支部の会長でヨーロッパ・オカルトの中心人物だったルドルフ・シュタイナーは、アトランティス以前に存在した一大文明地域だったとする説を唱えた。次いで、英国の軍人ジェームズ・チャーチワードが、インドで古代の碑板を発見し、5万年前に高度な文明を誇ったムーと呼ばれる大陸が太平洋上にあったことを“解読”し、レムリアを古代伝承に従ってムーと呼び直した。

レムリアは“太陽の帝国”とも呼ばれ、ほとんどがナーガ族という種族だったらしい。しかし、ナーガと言えばインドの蛇神で、蛇神と言えば、エンキが原型だ。そしてムーとは、シュメール語で“空飛ぶ機械”の意味だよ。

つまり、シュメールの第4の地域を曲解したものに過ぎず、“大いなる誤解”に基づく解釈を、神智学者たちが都合の良いように利用した結果、レムリアやムーという“妄想”が一人歩きすることになったのさ。

ひかり：ふーん、残念ながら、古代のロマンは消えてしまった、てことね…。

建：アトランティスやレムリア、そして、一般的にイメージされるムー、いずれも偶像崇拝の悪魔主義者＝サタニストの神智学者が中心となって動いていた産物だ。つまり、サタン的意識によるオカルト、マインドコントロールさ。

16：新たな最高権力神の誕生－人類へ残された預言

(1)認められたマルドゥクの覇権

“大いなる惨禍”の後、エンキとエンリルはこの大惨事を調査するために会った。エンキは、バビリが免れたことは神のお告げであることをエンリルに言った。

「マルドゥクは最高権力を運命付けられていたのだ。バビリが免れたことが、その証拠だ！」

「“万物の創造主”の御意思だったに違いない！」

とエンリルは言った。そして、エンキにガルズの預言について明かした。

「それを知っていたのなら、何故、“恐怖の武器”の使用を回避させなかったのだ？」

とエンキが聞いた。

「いろいろなものを見すぎたのが原因だ。君が地球に来て以来、ミッションはいつも障害にぶち当たった。私たちは妨害を出し抜く方法を見つけた。例えば、

我々の任務の最高の解決法だった地球人の創造のようなことが、望まない無数の紆余曲折の源泉でもあった。君が天体の周期を測って星座を割り当てた時、誰がそこに“運命”の手を予見できただろう？私たちが選んだ“宿命”と、曲げることのできない“運命”とを、誰が区別できただろうか？誰が間違った予言を口にし、誰が真実の預言を断言できるのか？それ故、私はガルズのことを胸の内にしまっておくことに決めたのだ…。彼は本当に“万物の創造主”の密使なのか、それとも、私たちの幻覚･幻影だったのか…？どんなことが起ころうと、起きるがままに任せよう、そう、私は自分に言い聞かせたのだ！」

　エンキは頭を垂れて頷きながら、弟の言葉に耳を傾けた。
「第 1 の地域は荒れ果て、第 2 の地域は混乱し、第 3 の地域は傷ついた。“二輪戦車の場所”はもう無い。それが、起こったことだ！」
とエンキはエンリルに言った。
「それが“万物の創造主”の御意思なら、それが我々の地球特命ミッションに残されたことなのだ。マルドゥクの野望によって種は蒔かれた。そこからどんな作物が生じようと、彼が刈り取れば良いのだ！」
とエンリルはエンキに言うと、マルドゥクの勝利を認めた。
「50 の地位はニヌルタにやるつもりだったが、マルドゥクにくれてやろう。マルドゥクには、荒廃した第 1 の地域の覇権を宣言させよう。私とニヌルタだが、彼の行く手を塞ぐつもりは無い。私たちは海の向こうの土地へ旅立ち、ニビルのために金を入手するという特命ミッションを完了するよ！」
とエンリルは言った。彼の言葉には、失意が感じられた。

……

ひかり：やっぱり、第 3 の地域、インダス文明も核兵器で傷いたのね…。
建：アヌンナキも、自らが選ぶことのできる“宿命”と、曲げることのできない“運命”の狭間で苦悩していた。それも、支配欲というエゴが原因だよ。
ひかり：エンリルの“マルドゥクの野望によって蒔かれた種から何が生じようと、彼が刈り取れば良い！”という言葉からすると、ヤハウェ、イエス、アッラーの神は、マルドゥクによる創作なの？
建：そうとは限らないよ。イエスはこのように降臨してきたし、ヤハウェはアヌンナキたちの寄せ集めだし。唯一、アッラーはマルドゥク的だね。全神の上に立つものの、エンキの息子であるイエスを、同じ兄弟として、救世主として認めているからね。

(2)過去と未来
　「“恐怖の武器”を使わなかったら、別の事態になっていただろうか？」
エンキは弟に食って掛かった。
「ニビルに戻るなというガルズの言葉に、我々は従うべきだったのか？地球ミッションは、アヌンナキが反乱を起こした時に打ち切るべきだったのか？私は私のすることをして、君は君のすることをした。過去は、もう取り返せないのだ！」

とエンリルが言い返した。
「そこにも教えは隠されているのではないか？」
エンキは自分自身とエンリルに問いかけた。
「地球で起きたことは、ニビルで起きたことを映し出しているのではないか？過去の物語の中には、未来の輪郭が記されているのではないか…？人類は我々の姿に似せて創造された。我々が達成したことや失敗したことを、繰り返すのだろうか？」
　エンリルは黙っていた。彼が立ち去ろうとすると、エンキは腕を差し出した。
「兄弟として、共に異国の惑星での難問に立ち向かった同志として、肩を組もうじゃないか！」
エンキはエンリルにそう言った。エンリルは兄の腕をしっかりと掴み、彼を抱きしめた。
「また会えるかな、地球で、あるいはニビルで？」
とエンキは尋ねた。
「ガルズは、ニビルに行ったら死ぬと言っていたが、本当かな？」
とエンリルは答えると、踵を返して立ち去った。

　エンキは 1 人、後に残された。一緒にいるのは、自分の心の中の思いだけだった。すべてがそうやって始まり、今までのところ、どう結末を迎えたのか、彼は座って思いを馳せた。
　すべては“運命”だったのか、それとも、あれこれ決定したことによって形作られた“宿命”だったのか？天と地球が入れ子状の循環を規則正しく繰り返しているのなら、起こったことは、また発生するのだろうか？“過去”は“未来”なのか？地球人はアヌンナキを真似て、ニビルを追体験するのだろうか？最初にやって来た彼が、最後に去っていく彼となるのだろうか？
　次から次へと思いが湧き上がる中、エンキは決断を下した。ニビルから始まり、地球での今日までのあらゆる出来事と決断を、記録に残すことを。“未来の世代への道標”となるように。後世の人々が、“運命によって指定された時”にこの記録を読み、“過去”を思い出し、“未来”を預言として理解してくれるように！“未来”が“過去”の審判者となるように！

……

ひかり：過去の物語の中には未来の輪郭が記されていて、人類はアヌンナキが達成したことや失敗したことを繰り返すのだろうか、とエンキは問うているわね？
建：エンキの疑念は、人類が核兵器を使用し、遺伝子操作によってこれまでに無かった生物種を創ることができるようになり、現実のものとなってしまった…。
ひかり：核の大惨事は神々のエゴで起きてしまったけど、人類は神々のエゴを請け負わされ、結局、解消できなかったということか…。
建：それでも懲りずに降臨直前まで、気象兵器や地震兵器、新型ウィルス病原菌の開発をやり続け、あわやの大惨事となることろまで行ってしまった、と

いうわけさ。

ひかり：エンキは“天と地球が入れ子状の循環を規則正しく繰り返しているのなら”と仮定しているけど、規則正しい循環だったら、何も進化しないわよね？

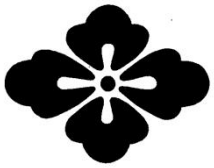
建：そうさ。螺旋のように上昇する循環でなければ、進化はしない。規則正しい循環は、シンボルで表せば二つ巴。陰陽が拮抗し、その場で堂々巡りだよ。これが三つ巴となって、初めて上昇する。と同時に、下降も始まる。どちらになるかは、人類次第さ。で、人類はその両方を選択し、あわや下降が上昇を打ち負かすところだった。

しかし、降臨があって、三つ巴から神宮の花菱へとなった。神の戦車メルカバーとなり、中心に救世主がいて、ようやく完成形となったわけだ。つまり、神宮は降臨する神々を迎える宮だったんだ。

更にそれが 4 つ集まったのが、縄文以来の封印を守ってきた諏訪大社さ。4 つの宮に立つ 4 本の柱がそれを表し、十六花弁八重表菊紋を暗示していた。御柱のハシラはアシェラ由来で、それはイナンナの暗示。十六花弁八重表紋菊は元々イナンナのシンボルだよ。

二つ巴

三つ巴


花菱

十六弁八重表菊

ひかり：“未来の世代への道標”とは、“過去”を思い出すことにより“未来”を知る、ということよね？そうすると、これは預言なの？

建：その原型かな…。実はここまでの話は、主エンキの御言葉を記した 14 のタブレットに記載されていた。本来ならば、このタブレットだけで良かった。しかし、マルドゥクが最高神となって以来、神話･伝承は曲解され、それに対する人類の理解も混乱していった。そこで、“忘れられた神”を“聖書”として登場させることにより、“過去”を思い出し、“未来”を知るための道標としたんだよ。このタブレットの最後にはこうある。

14 番目のタブレット　…主エンキの御言葉
偉大なる主エンキの口述から、一言も漏らさず、一言も付け加えず、
ウドゥバルの息子、エリドゥの男、
熟練筆記者のエンドゥブサルによって書き記された。
主エンキによって、私は長寿の恩恵を受けた。

これに対応するように、ヨハネ黙示録の最後には、次のように書かれている。

“この書物の預言の言葉を聞くすべての者に、私は証しする。これに付け加える者があれば、神はこの書物に書いてある災いをその者に加えられる。また、この預言の書の言葉から何か取り去る者があれば、神は、この書物に書いてある「生命の樹」と聖なる都から、その者が受ける分を取り除かれる。以上すべてを証しする方が言われる。
「然り、私はすぐに来る」
アーメン、主イエスよ、来て下さい。主イエスの恵みが、すべての者と共にあるように。”

ヨハネという名前の原型はエンキだと言ったよね？
ひかり：そうだったわね。
建：エンキは大洪水の前、ジウスドラにお告げした。だから、預言や黙示録の原型はエンキ。ただし、預言を意味するナビゲーターという言葉は、マルドゥクの息子ナブに由来するけどね。
ひかり：聖書関連では、最初にやって来た彼はアルファ、最後に去っていく彼はオメガだから、それはエンキよね？
建：だから、イエスと共に降臨された。
ひかり：ヤハウェは神々が習合され 1 つになったもので、アッラーはマルドゥク的だけど、じゃあ、イエスは？
建：理由は複雑になるのでまたの機会にするけど、父はエンキで、母マリアは太陽神ウツの血を引く地球人女性さ！神と人の子だから、イエスは父を“父なる神”と言い、自らを“人の子”と言っている。両親共に神ならば“神の子”となる。
ひかり：え～っ、驚きね！道理で、キリスト教徒が卒倒したはずよね…。
建：どうだい、これで人類史の根幹が見えてきただろ？
ひかり：高度な文明が太古に突然出現したり、共通の神話が世界中に存在したり、オーパーツにしても地球外知的生命体が神々として授けたとすれば、納得よね。それに、人類の異常な進化の速さも、神々が人類の進化に介入したなら説明がつくわ。また近いうちに、日本とどう結びついていくのか知りたいわ！
建：ごめん…残念ながら、来週からかつての聖地だったエルサレムに行かなければならないんだ。彼の地の人々は、いまだに思想的に混乱している。だから、僕たち神官が行って諭し、指導しなければならない、と神々からの御宣託があった。
ひかり：え～っ、来週から？どれだけの期間行くの？
建：約半年間。秋の、降臨後初の新嘗祭には戻って来るよ。
ひかり：私もついて行きたいんだけど…。
建：まだ、あの地は混乱して危険な所がある。だから、今回はダメ。あっ、そうそう、君の血統をちょいと調べさせてもらったよ。
ひかり：私、そんなの調べたことも無いけど…。
建：君の祖先は…古いところで僕の祖先と繋がっていた！
ひかり：！？

建：だから、君もこういうことに興味津々なんだよ。
ひかり：ケンは封印された古代大王家の支族の家系だったわよね？
建：君は…、その本宗の末裔なのさ！だから、本来は巫女にならなければ！
ひかり：今更、そんな…。
建：そういうことだから、今度僕の話を聴く前に、日本の歴史についても良く勉強しておくことだね。
ひかり：そんな、いきなり言われても、何か…こう…複雑な心境！
建：時間はたっぷりあるよ。じゃあ、来週は見送りに来てね。
ひかり：神々の乗り物で一っ飛びね！
建：昔に比べたら、楽なもんさ。それに、彼の地の管理者だった太陽神ウツ様がご案内してくれるというオマケ付きさ！

後編へ続く。

あとがき

序にも少々記しましたが、これはシュメールの神々の物語を軸にして、世界中の神話や伝承を取り混ぜて構成した創作（フィクション）です。しかしながら、見る人が見れば解るような合言葉が、どこかにあるかもしれません。

このようなフィクションにお付き合い頂き、何か 1 つでも気づきになる点が見つかれば、幸いです。

第 62 回式年遷宮癸巳の年　尾張國の熱田の地にて

参考著書：

・ゼカリア・シッチン著、「人類を創成した宇宙人」、徳間書店。
・ゼカリア・シッチン著、「神々との遭遇　上･下」、徳間書店。
・ゼカリヤ・シッチン著、竹内彗訳、「神々・創造主の正体」、徳間書店。
・ゼカリア・シッチン著、「〈地球の主〉エンキの失われた聖書～惑星ニビルから飛来せし神々の記録」、徳間書店。
・学研ムーブックス、ネオ・パラダイム ASKA シリーズ。
・学研 NSM ブックスエソテリカ宗教書シリーズ「ヒンドゥー教の本」。
・学研 NSM ブックスエソテリカ宗教書シリーズ「チベット密教の本」。
・学研 NSM ブックスエソテリカ宗教書「ユダヤ教の本」。
・学研 NSM ブックスエソテリカ宗教書シリーズ「キリスト教の本上　下」。
・学研 NSM ブックスエソテリカ宗教書シリーズ「イスラム教の本」。
・学研 NSM ブックスエソテリカ宗教書「神秘学の本」。
・三笠宮崇仁著、「文明のあけぼの」、集英社。
・三笠宮崇仁監修、岡田明子・小林登志子共著、「古代メソポタミアの神々」、集英社。
・小林登志子著、「シュメル－人類最古の文明」、中公新書。
・グレン・E・マーコウ著、片山陽子訳、「フェニキア人」、創元社。
・聖書（新共同訳）、旧約聖書続編つき、日本聖書協会。

初版：2013 年 4 月
改訂：2014 年 3 月
改訂 2 版：2014 年 5 月